扇ぐこと微に。乃ち日の暉やくを觀る。是順風なるが如し。乍ち嘉んで矴を行らし帆を挑げ。風に隨つて走る。七日午剋。遙に雲山を見る。未剋大唐明州の揚扇山に著く。申剋彼の山の石丹澳に到りて泊す。(石丹澳は明州の地名なり)卽ち帆を落し矴を下す。其の涯上に人數十許有りて。酒を喫し皆被を脫し。椅子に坐するを見る。乃ち船の來著するを看て皆驚起して衫を衣。涯邊に群立す。張支信を見て由緣を問ふ。支信答へて云ふ。此は日本國の求法の僧徒等なりと。是に於て彼の群居する者皆感歎し。使を差して存問し。兼ねて彼土の梨柿蔗沙糖白蜜茗茶等數般を送る。親王支信に問ひて云はく。此何等の人ぞと。支信申して云ふ。此鹽商人なりと。親王歎じて曰く。是商人なりと雖も。體貌閑麗此の如くなるやと。卽ち謝答し。贈るに本國の土物數種を以てす。茲に彼の商人等。辭退して肯はず。更に友志を遣はすを以て。時に彼の商人等雜物を受くと雖も。謝して金銀の類を還して云はく。異國の珍物。(下一句。燗脫讀む可からず)。此は明州望海鎭なり。これに登りて遊宴したまへと。此歲大唐咸通三年九月十三日。明州差使司季閑。船上の人物を點檢し。京城に奏聞す。其年十二月。勅符到つて云はく。須らく彼器を收むべし。或は早く故に隨つて越前に著くを許すと。五年。彼州の觀察使鄭暉略更に實錄を篤し。轉じて以て言上す。五月十一日。所々を巡禮す。求法の從客。親王の敎を蒙り云ふ。近來大師の我が疑を質すべき者を歷問す。此州節度使孤陶許に就て。入京の奏者たらしめんと。茲に陶許奏する時。入京を許さる。符九月到來す。十二月。親王。宗叡和尙。智聰。安展。禪念。及び興房。任仲元。仕丁丈部秋丸(ハセツカベ)等。江船に駕して索を牽かしめ。水に傍ひて京に入る。但だ賢眞。惠蕚。忠金。竝に小師弓手柁師水手等は。此年四月。明州より本國に歸らしめ畢る。然して親王淮を渡りて細州(本ノマヽ)善光寺に至る。此僧伽和尙入定の寺也。汴河の凍るに緣りて進御を得ず。仍りて暫らく件の寺に寄住す。錢物の和尙靈像衆僧を供養する多し。六年二月中旬。凍解を得。江船に汴河に駕すること日あり。鞍馬を買ひて。陸より京に入る。但だ宗叡和尙は宿願有るに依りて。汴州より相別れ。河中符道を取り。五臺山に向ふ。同じ晦頭。親王洛陽に至り。淹留五日。師を尋ねて聽讀するに。人の敎授する無し。卽ち□□□□天津福橋白馬寺槽(本ノマヽ)等を過ぎ。五月二十一日長安城に到り。昏門に入り。西明寺に安んず。卽ち本國の留學圓載法師。親王入城の由を奏聞す。皇帝感歎し。仰せて阿闍黎を請來し。難疑を決せしむ。六箇月を經。問難闍黎擊蒙する能はず。同じ

く更に圓載をして西天竺に渡る可きを奏せしむ。且事勅許し。官符施行す。廣州亦興房を□。此年十月九日。長安に於て仰事を承り。獨身却つて淮南に廻り。處々の寄附功德の雜物を請ひ取る。或は早く還さゞる者有り。或は詐つて相爭ふ者あり。斯に由つて狀を通じ府に揭げ。詐を糺さしめらるゝの間。宗叡和尙。咸通六年。長安より歸り來つて云はく。件の雜物早く請取り。廣州に向ふ可き者なりと。興房こゝに雜物を論得して。廣州へ參り赴かんと欲するの間。任中元敎書を將ちて來り。興房を待たしめ。遠からずして進發期有り。稽留す可からざらんと。乃ち正月二十七日。安展。圓覺。秋丸等を率ゐて。西に向ひ已り了らん。須らく赴き來るを停め。早く李延孝の船に駕し。本國に歸るべき者なりと。因つて宗叡和尙。興房等同年六月。延孝の船に駕し。大唐福州より順風を得。五日四夜にして。値嘉島に著きぬ。但し智聰法師は。尙大唐に住まりて來らず。仍て略記する件の如し。

（入唐傳）

渡天……慈鎭和尙（俗傳、非也。澄月房上人歟）

玄奘法顯などの古の跡に思ひ合はするにも。さこそは嶮しく危く侍りけめとあはれなり。さて歸り玉ふ可き程も過ぎぬれば。生死辨へ難しとて。細かにぞ尋ねありける。唐土の返辭に。天竺に渡り給ふ程に。途にて終り給ふよし。仄に聞くと侍るにぞ。初めて魂を遷し給ふ由を知りにける。渡り給ひける道の用意に。大柑子（カンシ）を三つ持ち給ひたりけるを。疲れたる姿したる人出で來て乞ひければ。取り出でゝ中にも小さきを與へ給ひけり。此の人同くば。大なるをあづからばやと云ひければ。我はこれにて末も限らぬ路を行くべし。汝はこゝの許の人なり。差當りたる餓を禦ぎてば足りぬべし。とありければ。此の人。菩薩の賜はざる事無し。汝心小さし。心小さからん人の施す物をば受く可からずとて。搔き消ち失せにけり。親王あやしくて。化人の出で來て。我が心を測らひけるこそと。くやしくあぢきなしと侍る事思ひ出でられて。兎に角に心すゞろに侍り。

（閑居友）

藤原良房

冬嗣の第二子。嵯峨帝の皇女潔姫に尙す。淸和帝位に即くに及び。萬機を

藤原良房

攝行せしむ。天安十四年薨ず。年六十九。

傳……源光圀

藤原良房は左大臣冬嗣の第二子なり。風韻俊拔。弱冠にして選を以て嵯峨の皇女源潔姫に尙す。天長中藏人に補せられ從五位下を授けられ。累遷して左近衞權中將に任じ。從四位下に進み。承和中參議に任じ。從三位に敍せらる。權中納言に遷り。陸奥出羽の按察使を兼ね。尋いで右近衞大將を兼ね。大納言に轉じ。民部卿を兼ぬ。上表して兼職を解かんことを請ふ。許されず。嘉祥元年右大臣に拜せらる。之を辭す。表再び上る。聽されず。又表して封戶の半を減ぜられんを請ふ。聽されず。明年從二位に敍せらる。仁壽齊衡の間正二位に進み。遷りて左近衞大將を兼ね。國史を監修す。天安元年太政大臣に拜せらる。固辭して表三び上る。允されず。寶劍一雙を賜ひて曰く。公宜しく此の劍を佩びて朕の懇情に副ふべし。蕭何をして獨り美を漢家に擅にせしむる莫れと。安車を賜ひて入朝せしむ。固辭して受けず。又表して加封の職田。資人。帶刀等を辭す。之を許す。尋いで從一位に進む。淸和帝位に卽くに及び。帶刀資人三十人を賜ふ。貞觀の初祿を減ぜんことを請ひ。資人帶刀を辭す。之を許す。左右封戶大臣に准ず。五年宴を內殿に賜ひ。六十算を賀し。賜賚每物皆六の數を用ゆ。明年帝染殿花亭に幸す。良房文人を召して詩を賦せしめ。宴樂して日を終へぬ。又射場に御し。帝親から射て一發して鵠に中つ。群臣萬歲と稱す。良房帝の稼穡の艱難を知らんことを欲し。山城の國司紀今守をして郡臣百姓等を帥ひ。耕田の禮を行はしむ。八年勅して萬機を攝行す。良房上表して固辭す。勅して曰く。曩に災異荐に臻り內外騷然たり。須らく公の助理に賴るべしと。許されず。十一年續日本後紀を上る。是より先太政大臣の封三千戶。隨身資人を賜ふ。良房位に居るに及びて固く讓りて當らず。唯千戶を受く。十三年再び勅し。封三千戶を益し。三宮に准じ。年官を給し。內舍人二人。左右近衞各六人を賜ひ隨兵と爲し。及び帶仗の資人三十人を給す。良房又上表して之を辭す。允されず。固讓して二千戶を受く。勅して直廬を禁中に賜ふ。十四年病篤し。詔して曰く。訓を皇源に酌み。風を帝籙に淘するに。未だ厚恩を施して以て盛淸を崇み。殊貨を降して以て元功を慰めざるは有らず。朕の外祖父太政大臣藤原朝臣。功三代に高く。位上臺を極め。仁襟九州に被りて餘有り。德水千里を霑して盡くること無し。

朕。襁褓に在りてより。以て今時に至るまで。其の顧復保佐の勳を言へば。豈に周旦漢光を以て伍と爲すのみならんや。朕。功を賞せざりしを念ひ。將に非常の寵を加へんとす。其至謙の性を知りて。敢て口を開きて言はず。聊か且つ爵を縻し。封を加へて。以て萬一に酬いんと欲するに。損挹すること彌深く。遜讓すること尤も切なり。夫の乃の情を感じて。相忤ふに忍びず。朕庶幾くば。彼の撝謙の誠に賴りて。其の延壽の福を增し。長生久視。朕の身を輔導し。南山に倚り平原に坐するが若くならしめむと。是を以て己を屈して人に從ひ。其の志を奪はず。恐らく天下朕を以て恩を知らずと爲さん。而して今私第に寢瘵す。日月彌留。珪幣相尋ぎ。祈禱未だ效あらず。朕自ら此の患に鍾り。寢食安きこと無く。心。思に隨て焦れ。言。淚と俱にし。深く救復の方を慮り。誠に到らざる所無し。諸を內經に聞く。人を度し道に歸せしむるの功。能く人の厄命を救ふと。又先王の德政。獄を議し刑を緩べ。老を矜み孤を養ひ。斯の仁貸を施す。朕の篤情に副はゞ。縱令病膏肓に在るも。幸に鍼藥をして力を得せしめん。宜しく度を賜ふ者八十人。又天下に大赦して以て其の疾を救ふべしと。九月東一條の第に薨ず。年六十九。帝爲に朝を輟むること三日。正一位を贈り。美濃公に封じ。忠仁と諡す。食封資人竝に生時の如くす。基經良房の遺命と稱し。上表して食封を辭す。因りて勅して位封國封を給し。其の愛宕の墓を以て荷前例幣の數に列す。世に染殿の大臣と稱し。或は白河殿と稱す。

（大日本史）

眞雅僧正

弘法大師の弟子。藤原忠仁公に依りて貞觀寺を得。僧正に任ぜられ。輿に乘りて宮城に入るを許さる。元慶三年寂す。年七十五。

傳……智證

天長二年三月。兩部及び唯受一人の師位を授く。大師（弘法）言はく。是れ汝一人に授く。其の器當るを以てなり。鹹海廣しと雖も。甘露の一水を秘す。是れ三世諸聖敎を傳ふるの術なり。汝能く機を擇びて之を傳へ。法水を無盡の澤に生ぜよと。承和二年三月。高野山中院に於て大師の遺屬を受け。東大寺の眞言院。及び弘福寺を統持す。

三年五月。勅に依つて東大寺眞言院中に灌頂院を立て。勅願の修法を置く。嘉祥元年東寺の長者と作る。帝勅して權律師に任ず。幾ならずして正に轉ず。三年三月二十五日。清和天皇生る。雅公は帝の叔父仁公と謀つて。前年より嘉祥寺内に精舍を立て。號して西院と曰ふ。之に就て修法し。專ら降誕を祈る。修供早くも驗あり。乃ち聖子を生む。雅公入つて加持するに。母子恙無きことを得たり。仁壽三年九月少僧都と作り。齊衡三年二月大僧都に轉ず。天安二年八月二十一日。始めて諸宗に准じて諸國講讀師に補任す。貞觀三年三月十九日。表請して嘉祥寺西院に年分度三人を置く。同四年七月二十七日。嘉祥寺の西院を以て貞觀寺と號す。六年二月十六日。雅公奏して曰く。律師已上侶秩稍尊し。當に凡僧と位階を同じうすべからずと。是に於て朝議。法印和尚位を以て僧位階と爲し。法眼和尚位を大小僧都階と爲し。法橋上人位を律師階と爲す。是に於て雅公を尊任して。僧正法印大和尚を賜ひ。輦車に乘じて宮門に出入するを聽す。三月四日。詔して内藏寮の所領。遠江長上郡の百六十四町を以て貞觀寺に入る。八年三月勅して曰はく。今より眞言宗の僧を以て東寺の三綱に任じ。階業を歴て。器超出する者を西寺の三綱に任じ。永く以て例と爲すと云云。雅公入つて禮す。同十四年三月十四日。尊重して法務と爲す。詔して曰はく。綱所を置き以て印鑰を附す。凡そ僧官の進退法事啓散皆管行す。七月十九日。表請して貞觀寺年分度の官符を改正して成る。十六年三月二十三日。詔して貞觀寺に大齋會を設く。以て道場の新成を賀するなり。律師道昌を以て導師と爲し。大僧都慧達を呪願と爲し。諸宗の宿德百人を延いて以て威儀に備ふ。雅寮唐高麗の樂。大安寺林邑。興福寺天人等の樂交奏す。是より先。預め公子王孫年少者を敎へ。此人時に出で遞に舞ふ。凡そ厥の莊嚴幡蓋灌頂等の飾。微妙希有にして。人目の精を奪ふ。親王公卿百官畢集し。京畿の士女都邑に塡噎す。事畢るの後。導師以下百口の僧に度者各一人を賜ふ。（弘法大師弟子傳）

都良香

桑原貞繼の子。弘仁中姓都を賜ふ。後對策及第して正六位上少内記となり。後從五位下大内記文章博士兼越前權介となる。元慶三年卒す。年三十六。

羅生門……菅亭

都宿禰良香。初の名は言道。京兆の人なり。仕へて著作郎に到り。文章博士と爲る。菅右相嘗て良香に就きて學ぶ。良香曾て月に乘じて羅城門を過ぎ。一聯を得て吟じて曰く。氣霽風梳二新柳髮一。氷消波洗二舊苔鬚一と。門邊に鬼有り歎じて曰く。特に妙なりと。其の文章の鬼を動すこと此の如し。又江州の竹生島に遊び。一句を偶吟して曰く。三千世界眼中盡と。其の對偶を得ず。吟按すること久し。島の神聲を颺けて曰く。十二因緣心裏空と。菅右相初め良香に從ひて學ぶ。右相階爵日に加り。良香猶ほ著作たり。天壤相隔る。良香其の及ばざるを憤み。官を弃てゝ山に入り。終る所を知らず。後百餘歳にして。或は大峯山窟の中に見しに。顏色衰へざりきと云ふ。（本朝蒙求）

在原業平

阿保親王の第五子。歌人也。嘗て右近衞中將たり。人呼びて在五中將と稱す。元慶中相模美濃權守を兼ぬ。元慶四年五月卒す。年五十六。

八ツ橋……作者不詳

昔男（業平）ありけり。其の男身を用なき者に思ひなして。京にはあらじ吾妻の方に住むべき國求めにとて行きけり。之より友とする人一人二人して諸共に往きけり。道知れる人もなくて惑ひ往きけり。三河國八橋と云ふ所に到りぬ。そこを八橋と云ひけるは。水行く河の蜘手なれば橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とは云ひける。其の澤の邊の木の蔭におり居て餉食ひけり。其の澤に杜若いと面白く咲きたり。其を見て或人の曰はく。かきつばたと云ふ五文字を句の上に居ゑて旅の心を詠めと云ひければ。詠める。

唐衣きつゝなれにしつましあれば遙々來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ。皆人餉の上に涙落して潤びにけり。（伊勢物語）

宇津の山……同

行き行きて駿河國に到りぬ。宇津の山に至りて。我が入らむとする道はいと暗う細きに。蔦葛は茂りて物心細く漫なる目を見ることゝ思ふに。修行者逢ひたり。斯る道にはいかでかおはすると云ふを見れば見し人なりけり。京に其の人の御許にとて文書

きてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば。五月の晦に雪いと白う降れり。

時知らぬ山はふじの嶺いつとてか鹿子斑に雪のふるらむ。

其の山は玆に譬へば。比叡の山を二十(ハタチ)ばかり重ねあげたらむほどして。形(ナリ)は鹽尻のやうになむありける。

（伊勢物語）

都　鳥……同

尙行き行きて。武藏國と下總の國との中にいと大なる川あり。其を隅田川と云ふ。其の川の邊に群れ居て。思ひやれば限なく遠くも來にけるかなと侘び合へるに。渡守。はや舟に乘れ。日も暮れぬと云ふに。乘りて渡らむとするに。皆人物わびしくて京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも白き鳥の嘴と足と赤き鴨の大きさなる。水の上に遊びつゝ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば。皆人見知らず。渡守に問ひければ。これなむ都鳥と云ふを聞きて。

名にしおはゞいざ言問はむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ。船擧りて泣きにけり。

（伊勢物語）

交野の狩……同

昔。惟喬(コレタカ)の親王と申す御子おはしましけり。山崎の彼方(ヲチカタ)に水無瀨と云ふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には其の宮へなむおはしましける。其の時右の馬の頭なりける人(業平)を常に率(ヰ)ておはしましけり。時世經て久しくなりにければ。其人の名忘れにけり。狩はねんごろにもせで酒をのみのみつゝ大和歌にかゝれけり。今狩する交野の渚の家其の院の櫻殊に面白し。其の木の下におり居て枝を折りて挿頭にさして。上中下皆歌詠みけり。馬の頭なりける人の詠める。

世の中に絕えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

となむ詠みたりける。又人の歌。

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれうき世に何か久しかるべき

とて。其の木の下に立ちて歸るに日暮になりぬ。御供なる人酒を持たせて野より出で

在原業平

來たり。此の酒を飲みてむとて能き所を求め行くに。天の川と云ふ所に到りぬ。親王に馬の頭御酒進る。親王の宣ひける。交野を狩りて天の川の邊に至るを題にて歌詠みて盃はさせと宣うければ。彼の馬の頭詠みて奉りける。

狩りくらしたなばたつめに宿からむ天の川原に我は來にけり

と聞えければ。此の歌を親王返す返す誦し給うて。返しえし給はず。紀の有常御供に仕うまつれり。其が返し。

一年に一たびきます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ

還りて宮に入らせ給ひぬ。夜深くるまで酒飲み物語して。主の親王醉ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隱れなむとすれば。彼の馬の頭の詠める。

あかなくにまだきも月の隱るゝか山の端にげて入れずもあらなむ　（伊勢物語）

御室の雪……同

昔水無瀬に通ひ給ひし惟喬の親王例の狩しにおはします。供に馬の頭なる翁仕うまつれり。日頃經て宮に還り給うけり。御送して疾く去なむと思ふに。御酒賜ひ祿給はむとて遣さゞりけり。此の馬の頭。心もとなくて。

枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

と詠みける。時は彌生の晦なりけり。親王大殿籠らで明し給ひてけり。かくしつゝ詣で仕うまつりけるを。思の外に御髮おろさせ給ひてけり。睦月に拜み奉らむとて小野に詣でたるに。比叡の山の麓なれば雪いと高し。强ひて御室に詣でゝ拜み奉るに。徒然といと物悲しくておはしましければ。稍久しく候ひて古の事など思ひ出でゝ聞えけり。さても侍ひてしがなと思へど。公事どもありければ。え候はで夕暮に歸るとて。

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみ分けて君を見むとは

とてなむ泣く泣く來にける。　（伊勢物語）

大伴黑主

歌人なり。滋賀大友郷に居るを以て滋賀黑主ともいふ。郡の大領となりて從八位上に敍せらる。貞觀中園城寺を以て延暦寺の別院となすに當り。黑主を以て神社別當となす。沒年不詳。

猿丸太夫の流亞……橋本寧

大友黑主は近江の人なり。世々大友鄕に居り。因りて氏とす。黑主和歌を善くするを以て聞え。郡大領と爲り。從八位上に敍せらる。延喜中法皇屢石山寺に幸す。國司其の民を勞するを患ふ。法皇之を聞き。復幸するに及び。他國の奉邑に課して以て其の費に充つ。國司大に懼れ。乃ち亭を打出濱に造り。植うるに菊花を以てし。獨り黑主をして還幸を待たしむ。法皇怪み問ふ。黑主歌を獻じて曰く。

さゝらなみまもなく岸を洗ふめり渚淸くば君とまれとか

と。法皇大に悅び。物を賜ひて還す。仁和昌泰の大嘗會。黑主風俗歌を獻ず。論者謂へらく。黑主の歌は古猿丸太夫の流亞なり。逸興ありて體鄙し。田夫の花前に息ふが如しと。後人祠を郡中に建てゝ以て祀り。黑主明神と稱せり。

（瓊矛餘滴）（文藝し大日本史に依る）

遍照僧正

姓は藤原。名は宗貞。仁明帝に仕へて藏人頭に至る。帝崩じ。哀慕して出家し。叡山に登る。又和歌を善くす。寛平二年寂す。年七十四。

梵行有驗……大江匡房

僧正遍照は。承和の寵臣なり。俗名は宗貞。近衞將を歷。藏人頭に補せらる。累葉淸華の家より出で。前亂(シン)後承の任に居る。才操相兼ね。衆望の歸する所たり。又和歌に長ず。宮車晏駕に及び。戀慕に堪へず。遂に以て入道す。慈覺大師の弟子にして。安然和尙の師匠なり。難行苦行。自から效驗多し。公家捨てずして。授くるに僧正職を以てし。兼ねて御持僧と爲す。天狗人に託して語つて曰はく。貞觀の世。此の山に住して。當世有驗の僧を知らんと欲し。變じて小僧と爲り。樹下に立つ。一樵父に逢ひ。謂つて曰はく。我を當時執政の家に送れ。將に大報有らんとすと。父曰はく。將に何をか爲さんと。我曰はく。一革囊を持ち。明夕來るべしと。父其の言の如くす。

即ち飛鳶と爲りて嚢に入る。晩頭右相家の中門に到り。其の口を開く。便ち寢殿に到る。足を以て右相の胸を蹈む。頓病有りと稱し。家中大に騷ぐ。足を舉げ足を下ぐ。或は活き或は死す。當時の名德を請ずるも。敢て畏るべきの人無し。一兩日を經て。家司來つて曰はく。猶華山僧正を請ぜらるべしと。已時に請書を遣はし。未時に領狀有り。總角二人。白杖を捧げ。狀に隨うて相副ふ。我頗る之を恐る。暫くにして壇場を塗らん爲。承仕以下到來す。又護法五六人有り。夜に入りて僧正光臨す。護法の數。十餘人に及ぶ。我漸く足を收むるも。意に任ずる能はず。相忍んで居る。修法七日の間。病已に平癒するも。未だ我を伏するに及ばず。家司重ねて請ひ。延ばすに二箇日を以てす。此の時術盡き。已に方計を失ふ。第二日の曉。鐵網を以て我を入れ。爐壇の火中に置く。焦灼されて煨燼(ワイジン)と爲る。壇灰を捨つるに及び。幸に則邊に置く。便ち食氣に就きて蘇生す。此處に居ること六年。若し門を出でんと欲せば。則ち護法拘留して。敢て寸步を能くせず。適水門より出づ。是に於て。此の人は本朝の一物たるを知る。必ず嬈亂(ゼウラン)を致さんと欲し。仍つて華山に到り。他所に雜居し。或は則邊に住すること三年。僧正來る每に。護法五六人必ず之を守護す。終に其の隙を得ず。又思ふ。最後の臨終に。其の妨を成すべしと。其の命期を尋ね。彼の山に向ふと雖も。護法衞護し。聖衆來迎し。敢て二三里の內に入ること能はず。唯空中の管絃を聞き。山上の雲氣を望んで止むと。本傳國史に在り。恐らくは異聞を傳ふるのみ。(續本朝往生傳)

和歌少實……紀貫之

僧正遍照は。歌のさまは得たれども。まこと少し。たとへば。繪にかける女を見て。いたづらに心を動かすがごとし。

あさみどりいとよりかけて白露を玉にも貫ける春の柳か

はちすばの濁りにしまぬこゝろもて何かは露を玉とあざむく

嵯峨野にて馬より落ちてよめる。

名にめでゝをれるばかりぞをみなへしわれおちにきと人に語るな

(古今和歌集序)

藤原基經

長良の子。陽成帝の位に卽くや。攝政の任に當り。正二位太政大臣に上り。遂に從一位に至り。陽成帝を廢して光孝帝を立て。又萬機を攝行す。寛平三年薨ず。年五十六。

傳……源光圀

藤原基經は。小名手古。仁壽元年。東宮內寢に冠す。帝親ら之に臨む。正六位上に敍す。齊衡天安の間。左兵衞少尉少納言左近衞權少將を歷て。藏人の頭に補す。貞觀中。中將に轉じ參議と爲る。伴善男の源信を誣ふるや。藤原良相之を信じ基經に命じて信を收めしむ。基經其奸有るを意ふや。之を良房に告ぐ。良房營救甚だ力む。信遂に罪を免るゝを獲たり。是の歲從三位に進み。中納言に拜し。明年特勅して左近衞中將を兼ね。尋いで大將に陞り。陸奧出羽の按察使を兼ぬ。十二年大納言に轉じ。從二位に敍し。十四年右大臣に拜す。陽成帝位に卽き。年尙幼なり。基經をして攝政せしむること。忠仁公の故事の如くす。元慶元年大將を辭す。帝。大納言南淵年名をして表を賫(モタラ)して太上皇に白さしむ。太上皇勅して曰く。萬機の寄。限るに一職を以てす可からず。宜しく其請に從ふべし。然も腰底忽ち空しくば。武備茲に闕けん。願はくは特に帶劍を賜はり。其儀容を嚴にせんと。乃ち金銀裝の寶劍一口を出して年名に授く。帝卽日基經に賜はり。大將を罷む。秋旱を以て攝政を罷めんと乞ふ。優詔ありて許されず。二年正二位に敍し。隨臣兵仗を賜はる。蝦夷邊を擾るを以て辭す。又許されず。四年太政大臣に拜し。明年從一位に敍せらる。退いて里第に居り。累りに表して職を辭す。許されず。是に至つて公務壅滯する所有り。公卿(マヒ)議し。辨大夫をして直廬に就いて決を取らしむ。後遂に故事と爲る。帝元服を加ふ。上表して政を歸す。聽されず。職封職田資人雜俸を增給す。辭して受けず。特に勅して人給爵に任じ。三宮に准じ。忠仁公の故事の如くにす。帝稍長ずるに及び。昏狂日に甚しく。廐を禁中に作り。馬三十匹を飼うて。北邊院と號す。右馬少允小針淸如。善く馬を養ふを以て寵せらる。權少屬正直道術を好し。禁中に出入す。蔭子藤原公門階下に侍奉し。常に騙策せらる。而して淸如最も不法多し。基經悉く之を逐ふ。帝猶悛(ツラタ)めず。蛙を捕へ蛇を捉へ。或は

犬猿を鬪はし。人をして木に升らしめて之を掊殺し。祈年祭の前に人を手刃す。基經深く之を憂ひ。廢立を行はんと欲す。廢太子恒貞。素より賢行有り。基經心に之を立てんと欲す。乃ち微かに其の意を見はす。恒貞拒んで納れず。更に諸皇子に求むるに可なる者無し。初め時康親王。良房の大饗に赴く。膳を奉ずる者。尊者に雉足を遺る。遽に親王に供する者を取りて之を羞む。親王神色渝らず。燭を滅して跡を掩ふ。基經適〻之を見て。深く其の雅量に服す。是れより常に意を屬す。此に至つて。其の第に詣りて謁を通ず。之を久うして出でゝ見る。進止安詳にして。被服雅素なり。徐に曰く。何の故に過ぎるかと。基經以爲らく。人君の度有りと。因つて推戴の意を陳ぶ。親王之を許す。乃ち日を刻して歸る。既にして宮に入り。佯り奏して曰く。臣將に競馬せしめんとす。請ふ。臨んで之を觀よと。帝悅んで曰く。期何れの日にか在ると。曰く後二日と。大計已に定まり。公卿を會して之を告ぐ。衆議紛紜たり。左大臣源融曰く。宗室の冑を求めば。融等尙在りと。基經曰く。固よりなり。然れども古より未だ姓を賜はつて臣と爲り。而して天位に登る者有らずと。參議藤原諸葛。劍を按し叱して曰く。今日の事。太政大臣の處分に依らざる者は斬らんと。羣議乃ち定まる。朝に及んで。老贏事に堪へざる者をして駕に從はしむ。陽成院に至り。奏して曰く。陛下狂虐。君德闕くる有り。臣等社稷の爲に計り。乘輿を此に遷すと。帝聞いて大いに驚き。號叫悲悔す。基經百官を率ゐる。時康親王を迎立す。是を光孝帝と爲す。帝。位に卽き。定策の勳を念ひ。禮遇愈渥し。輦車に駕して宮中に出入するを聽す。諸道博士に勅して太政大臣の職掌を勘奏せしむ。基經益〻謙挹を抱き。屢位を避くを求む。帝特に勅を降し。萬機舊に仍る。先づ基經に稟して後奏下せんと。尋いで請うて。源融源多をして己に代つて政を秉らしめんとす。許されず。仁和元年。年中行事を障子に圖して之を獻ず。攝津爲奈野を賜うて遊獵地と爲す。是の歲節會に班に就かずして直に昇殿するを許し又宴を內殿に賜ふ。其壽五十を賀し。樂を張りて曉に徹し。馬五匹。冬夏の衣各五襲。臥具屛風を賜ふ。又爲に僧五十人を度す。帝皇子多し。然るに基經を憚つて。未だ立つる所を言はず。三年不豫。基經臥內に入り。奏して曰く。陛下萬歲の後。神器將に阿誰にか付せんとすと。帝曰く。唯公の擇む所と。基經曰く。臣の見る所を以てせば。其れ惟王侍從かと。王侍從は定省なり。帝大いに喜び。定省を召し。右に其の手を執り。左に基經の手を執り。泣いて曰く。大臣の勳勞莫大なり。汝

謹んで忘る勿れと。基經出でゝ。百僚を率ゐて上表し。皇太子に立つるを請ふ。遂に定省を立てゝ儲貳と爲せり。帝崩ず。太子位に卽く。是を宇多帝と爲す。卽日手詔して遺勅を宣べ。夾輔の功を褒む。尋いで百官に詔す。萬機の巨細。皆太政大臣に關白して後奏下すべし。一に故事の如しと。關白此に始まる。基經上表して政を歸さんと乞ふ。許されず。詔して曰く。社稷の臣は。朕の臣に非ず。宜しく阿衡の任を以て卿の任と爲すべしと。左大辨橘廣相の筆なり。時に阿衡の任を疑ひ。衆議紛然たり。藤原佐世。故らに基經に謂つて曰く。阿衡は典職無し。何ぞ庶務を關白することを得んと。遂に官奏を示さず。事聞す。帝諸博士をして阿衡の職掌を勘せしむ。中原月雄。善淵愛成等皆言ふ。阿衡は三公なり。坐して道を論ずるのみと。基經奏して曰く。國家の事。一日萬機なり。去年八月より今日に迄り。未だ太政官の申す所の政を奏せず。臣伏して去年十一月二十一日の詔書を奉ず。萬機巨細。臣に關白すと。上奏辭謝し。敢て當ると曰はず。又同年閏十一月二十七日の勅旨を奉ずるに。宜しく阿衡の任を以て汝の任と爲すべしと。臣未だ阿衡の任を知らず。仍つて疑を持する久し。伏して聞く。左大臣明經博士等をして勘へ申さしめられたるに云ふ。阿衡の任。典職無かる可く。其典職無きを以て阿衡の貴きたるを知ると。臣を以て比擬するに克く堪ふる所に非ず。抑分職無きに至つては。暗に臣が願に合す。伏して請ふ。早く執奏の官に仰せて萬機をして壅滯せしむる莫からむことをと。是に於いて紀長谷雄。三善清行。佐世と與に官制沿革を評論して曰く。殷の世の阿衡は卽ち周官の三公なり。三公は典職無し。經史に明文有り。復疑ふ可からずと。帝。廣相。佐世。月雄をして廷議せしむ。左大臣源融之を判す。佐世堅く前議を執らんと欲す。融依違して裁斷する能はず。節適〻盛暑なり。帝頗る厭倦す。公卿基經を憚り。皆病と稱して罷め去る。時に機務壅滯する。既に久しく。諸司憂を抱く。源融を遣はし基經の第に就き。前詔に依つて機務を行はしむ。基經曰く。阿衡の職掌。其の議未だ決せず。臣明詔を奉ずる能はずと。融還り奏す。帝悅ばず。融曰く。太政大臣久しく政を聽かず。患ふ可きなり。請ふ。後の詔文を改めん。然らざれば。恐らくは不測の事有らんと。帝已むを得ずして。遂に詔を百官に宣して曰く。太政大臣先帝を援立し。朕が窮を保護し。功大に德高し。遠く周霍に超ゆ。累代の聖明。猶ほ輔弼を仰ぐ。矧んや朕は小子。何ぞ倚賴せざらん。故に去年詔を下して萬機を關白せしむ。而して大臣上奏し。堅く閒退の志を執る。朕庶事

の舊に仍りて。大臣に關白せしめんを欲す。而るに左大辨橘廣相。詔を草して。朕が本意を失す。遂に大臣をして疑を持し。肯て事を視ざらしむ。天下の務。盡く皆壅滯す。今より以後は。奏に應ずるの事。下に應ずるの事。必づ先づ太政大臣に諮禀せよ。朕將に垂拱して成を仰がんとすと。菅原道實。亦書を贈つて解喩す。基經遂に詔を奉ず。寛平元年。腰輿に乘ずることを聽す。二年疾む。帝將に臨視せんとす。固辭して乃ち止む。困篤に及び。解職を乞ふ。優詔之を允す。度者を賜ひ。罪囚を免して以て之を禳ふ。明年薨ず。年五十六。朝を輟むる三日。正一位を贈る。越前公に封ず。詔宣と謚す。食封資人竝びに生時の如し。守冢一戸を置き。荷前例幣の數を列ぬ。基經職に在る。縝密祗畏。神明に恭事し。災異に遇ふ毎に。屢〻政を歸するとを乞ふ。俞〻允されず。則ち側ら身職を修め。天譴に答へんを思ふ。清和の朝。萬機を總纜す。務むること濟益に在り。吏其の職に稱ひ。人其の慶に賴る。朝廷無事にして內外肅然たり。敦く儒術を崇む。釋典の日には。公卿を率ゐて先聖を拜し。明經博士をして周易を講ぜしむ。元慶中。勅を奉じて文德實錄十卷を撰めり。秋田城司良岑。近ごろ貪婪にして。誅求酷く無し。蝦夷叛亂し。北邊騷擾す。基經之を憂ふ。右中辨藤原保則を薦めて出羽權守を兼ねしめ。委するに閫外の任を以てす。卒に能く之を討ち平ぐ。然るに。保則終に賞拔を蒙らず。近く亦黜罰無し。時人。其勸懲。方を失するを譏る。基經嘗て內宴に侍し。偶〻清和帝賜ふ所の御衣を著く。時に帝位を遜りて水尾に居す。基經因て詩を賦して曰く。醉望西山一仙駕遠。微臣淚落舊恩衣。聞く者感嘆せり。基經。幼時仁明帝の芹河に幸するに從ふ。帝偶〻。箏の爪を遺す。時に扈從の人衆し。帝基經の敏慧を察し。召して謂つて曰く。料るに唯汝能く之を得ん。歸りて索む可きなりと。基經茫然として爲す所を知らず。心に誓つて曰く。若し之を得ば、則ち一伽藍を建てんと。果して之を得て以て獻ず。帝大に悅ぶ。因て極樂寺を創す。初め枇杷の第に居り。後堀河院閒院の二第に往來す。堀河院の地勢寛敞なり。大饗賓宴。則ち此に於いてす。其の齋戒及び親昵を延くは。則ち閒院に於いてす。世に堀河の大臣と稱す。子は時平。仲平。兼平。忠平なり。

（大日本史）

智證大師

延曆寺第五世の座主。名は圓珍。和氣宅成の子。弘法大師の外甥。延曆寺の座主義眞に師事し。得度す。仁壽三年入唐し。天安二年歸朝す。慈覺寂後。延曆寺の座主たり。寛平四年寂す。年七十八。

天臺山……三善清行

十二月初一日(仁壽三年)。臺州臨海郡に達ることを得。權に開元寺に下り。便ち老宿僧知建に逢ふ。斯れ乃ち貞元年末。天臺山國清寺の律大德僧清翰が入室の弟子なり。乍ち見て喜歡すること。宛も骨肉の如し。維摩因明二部の疏義を捨與せられ。又刺史工部郎史勅賜緋金魚袋李肇に見ゆ。行由を具し省使に申上するを蒙り。兼ねて公驗を給はり。自ら州官を率ゐて。寺に入りて慰問せらる。十三日。遂に唐興縣に達して。縣官に相見ゆ。暫く國清寺の廨宅に過まる。當時綱維徒衆總て來り相迎ふ。晩頭に寺に至り。衆僧に相見ゆ。而して松林鬱茂して。十里路を挾み。琪樹。瓔珞として。五嶺。寺を抱き。雙澗。流を合せて。四絶。奇を標せり。智者の眞容。禪牀に安坐し。普明の錫泉。殿長に瀉灑せり。昔聞今見。宛も符契の如し。當時貞元年中。七大德僧文擧老宿の門人僧清觀元璋。同房に安置して。視ること兄弟の如し。又貞元年中。禪林寺の傳教大德僧道邃和尙の入室。廣修和尙の聽習の弟子僧物外といふあり。止觀を長講して。大師の教を傳ふ。乍ち見て歡喜し。慇懃に安排す。十四日。留學の僧圓載。越州より國清寺に來つて。相接して喜慰す。大中八年二月。天臺山禪林寺に上り。便ち定光禪師の菩提の樹を禮す。又智者大師の留身の墳を拜す。金地銀地。南北交頭し。植松生竹。東西婆娑たり。路其中よりして禪林寺に至る。陳の宣帝の時。修禪寺と號す。斯れ則ち智者傳法の地。又銀地道場と號す。次に寺の巽に於て石象の道場あり。此れ智者大師普賢象に乘つて。降來摩頂し給ふことを感得せし處なり。古來相傳ふ。普賢の白象。化して大石と爲る。樣圖眞象に異ならず。石象道場と稱する所以也と。便ち象南の石窟に於て。大師坐禪の椅子あり。西邊の磐石。之を敲けば聲を出す。吳鼓に似たり。世に云ふ。智者の法を說くや。之を槌つて衆を集めたりと。象の東。兩石相對して。形屏風に似たり。中間に石簀あり。模樣大箱の如し。其の高さ八尺ばか

り。上古賢人。天下の要文を集めて。斯の簀中に納めたり。唯だ智者は之を開き見たるも。餘には。未だ其人有らずと云ふ。又禪林寺より北に行くこと二十五許里。山趾に亭子有り。捫蘿亭と曰ふ。浙東の觀察使御史中丞孟簡が建てし所なり。仍つて之を字(ナヅ)けて孟中丞亭子と曰ふ。此れより行くこと三十五許里にして。天臺山の最高の峯に至る。號して華頂と曰ふ。此れ則ち智者安居して。天魔を降伏し。神僧を感得せし地なり。招手の石。見(ゲン)に在り。定光の跡、恒に新なり。苦竹鼕鼕。茶樹林を成す。林邊の亭子を倒景亭と曰ふ。甘泉横流して。人物棲息す。次に華頂を下りて。山脚に却り到り。溪に隨つて下り。歩雲亭に至つて宿し。來日又溪に傍うて行き。石橋に至る。橋樣梁の如くにして。横に深谷に亙せり。流水萬丈。其聲雷の如し。凡人乍ち見て。殆んど精神を失ふ。曩時天竺國の沙門白道猷。尋ね來つて橋を渡り。親(マノアタ)り羅漢に見えたるは。正しくこれ其地なり。事は山記に詳らかなり。委しく敍する能はず。圓珍數日の巡禮既に畢つて。國淸に還り至つて坐夏し。僧物外の邊に就て。本を請ひて。天臺の教法を抄寫すること。三百卷に近し。又太政大臣が智者大師の影に送供せる砂金四十兩を得て。其墳塔及び國淸の佛殿を修す。國を合(コヅ)つて讃揚すること。勝げて記すべからず。其事臺州の公驗に具す。

法眼明徹……同

（天臺宗延曆座主圓珍傳）

元慶中。和尚(智證)本山に住す。忽ち涙を流し。悲哽して云はく。大唐天臺山國淸寺の元璋大德。昨夕入滅し給ひぬと。幾も無くして其後一年。又哭泣し。甚だ悲んで云はく。我が大唐請益の師良諝大和尚。奄然として遷化し給へり。貧道須らく追福を修し。門弟子の志を致すべしと。乃ち延曆寺の講堂に於て諷誦を修す。當時之を聞く者。未だ信ずるものあらず。然も其後元慶七年。柏志貞大宰府に到著す。天臺國淸寺の諸僧。竝に越州の良諝和尚の遺弟子等の書信。竝に志貞に付して和尚に送る。具に元璋竝に良諝和尚の遷化の日を錄して和尚に與ふ。先語會て睽違無し。亦嘗て諸僧に語つて云はく。嗟乎留學の和尚圓載。歸朝の間に滄海の中に漂沒せり。悲いかな。骸を父母の國に歸さず。空しく身を鮫魚の鄕に終ること。命なるかな。如何にかせんと。再三感咽して。涕泗漣如たり。其後入唐の沙門智聰。歸朝して語つて云はく。智聰初め留學の和尚圓載に隨つて。商人李延孝が船に乘つて海を渡る。俄に惡風に遭ひ。舳

艫破散す。圓載和尚及び李延孝等。一時に溺死す。時に破舟の間に一小板有り。智聰儻(タマ〳〵)之に著乘することを得。須臾にして。東風迅烈にして。浮槎西に飛ぶ。一夜の中に。大唐溫州の岸に漂著す。其後亦他船に乘つて本朝に來歸すと。是に於て。圓載和尚沒溺の日を計るに。正しく是れ和尚悲泣し給ひし時なり。天下歎異せずといふこと莫し。

（天臺宗延曆座主圓珍傳）

萬里戸庭……同

貞觀の末。總持院の十禪師濟詮。將に入唐して法を求め。竝に五臺山の文殊師利菩薩を供養せんとす。主上及び諸卿。多く黃金を捨して。以て文殊を供養するの資と爲す。濟詮山を辭するの日。和尚に拜別し。便ち大唐の風俗を問ひ。兼ねて將に漢語を習はんとす。和尚默然として。一も對ふる所無し。濟詮深く恨める色有り。起座の後。和尚門人に語つて云はく。此の師才辯有りと雖も。未だ空觀を曉らず。入唐の謀。名の高きを衒はんとするに似たり。若し心殿掃はずんば。何ぞ三尊の加持を得ん。若し加持至らずんば。何ぞ萬里の險浪を蹤えんと。其後濟詮果して唐岸に著せず。又至る所を知らず。和尚先識の機鑒。皆此の類なり。弟子或人問うて曰はく。和尚萬里の外を洞視すること。戸庭の中に在るが如く。將來の事を察知すること。目睫の間に置くが如し。豈に神通力の致せる所か。將宿命智の成ぜる所かと。和尚大笑し。答へて曰はく。我少年より金剛薩埵に歸依して。以て本尊と爲す。故に現在未來の善惡業報。或は夢中に之を示し。或は念定の間に形を現じて告げ給へるのみと。識者其實語にして矯飾せざるに服す。

（天臺宗延曆座主圓珍傳）

惟喬親王

文德帝の皇子。文德帝儲貳となさむと欲せしも。藤氏の出にあらざるを以て果さず。貞觀十四年僧と爲り。寛平九年二月薨ず。年五十四。

傳……林讀耕子

惟喬は。文德天皇第一の皇子なり。皇嗣固に其所也。然り而して。第四の皇子惟仁(コレヒト)。忠仁公其の外祖たるを以ての故に。立ちて皇太子と爲る。清和天皇是れなり。是に於て

いて。惟喬。洛外山崎の水無瀬の宮に閑居す。詩を吟じ。歌を詠じ。以て自ら遣る。毎歳櫻花を賞す。一日。河州交野（カタノ）の奈疑佐（ナギサ）院に遊んで。以て櫻花を翫ぶ。在原業平行に從うて倭歌を賦す。惟喬。交野より天河に到りて。以て宴を設く。業平紀の有常皆歌を詠ず。既にして惟喬。彌〻俗塵を厭うて小野に隱る。時の人。小野の宮と號す。小野は比叡山の麓なり。業平曾て春雪を蹈んで。其幽棲を訪ひ奉り。甚く感涙を拭ひ。歌を詠じ。情を述べて歸る。

（本朝遯史）

巨勢金岡

中納言野足の子。官大納言に至る。畫を善くす。元慶四年釋奠に先聖先師の像を圖す。歴世之を用う。又醍醐帝の勅を奉じ。紫宸殿に聖賢障子を畫きたりと云ふ。

御室の馬……橘成季

仁和寺御堂と云ふは。寛平法皇（宇多）の御在所なり。其の御所に。金岡筆を揮ひて繪畫ける中に。殊に勝れたる馬形なむ侍るなる。其の馬。夜な夜なに放れて近邊の田を喰ひけり。何物のすると知れる者なくて過ぎ侍りける程に。件の馬の脚に土つきて。濡れ濡れとなること度々に及びける時。人々怪みて此の馬の所爲にやとて。壁に書きたる馬の目を掘り抉りてけり。夫より眼なくなりて。田を喰ふこと留まりにけり。

（古今著聞集）

素性法師

俗名玄利。僧正遍照の子。清和帝に仕へて左近將監となる。出家して權律師となる。和歌に巧なり。歿年詳ならず。

京通ひ……在原滋春（俗傳）

斯くて失せにける大德（遍照）なむ僧正までなりて。花山と云ふ寺に住み給うけり。俗に在（イ）ますかりける時の子どもありけり。太郎（素性）は左近の將監にて殿上してありける。斯く世にいますかりし時だにとて。母も遣りければ。往（イ）きたりければ。法師の

子は法師なるぞよきとて。是も法師になしてけり。斯くてなむ。

折りつれば拳(クブサ)に濆るたてながらみよの佛に花たてまつる

と云ふも。僧正の御歌になむありける。此の子をおしなし給ひける大徳は。心にもあらでなりたりければ。親にも似ず。京にも通ひてなむしありきける。此の大徳の親族(シヤク)なりける人の女の。内に奉らむとて侍(カシツ)きけるを密(ヒソカ)に語らひけり。親聞きつけて。男を女をもすげなくいみじう云ひて。此の大徳を寄せずなりにければ。山に坊して居て。ことの通もえせざりけり。最久しうありて。此の騒がれし女の兄どもなどなむ。人のわざしに山に登りたりける。此の大徳の住む所に來て物語などしてうち休みたりけるに。衣の頸に書きつけゝる。

白雲の宿る嶺にぞおくれぬる思の外にある世なりけり

と書きたりけるを。此の兄の兵衛尉は。え知らで京へ去ぬ。妹見つけて哀とや思ひけむ。此は僧都になりて。京極の僧都と云ひてなむ在ますかりける。（大和物語）

歌六首

……素性法師

山の櫻を見て。

見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

寛平の御時に。屏風の歌書かせ給ひし詠みて奉りし。

忘草何をかたねと思ひしにつれなき人の心なりけり

法皇(宇多)宮の瀧御覽じにおはしましゝに。御供に侍らひて。瀧を題にて仰言ありて。

秋山にまとふ心を山河の瀧の白あわに消ちや果てゝむ

延喜の御時に。御馬遣はして。唯今石山に參るべきよし仰せごとあるに。參りて。

望月の駒より遲く出でつればたどる辿るぞ山は越えつる

山寺に籠りて。哀なる事を云ひて。夜泊りて。うち泣きなどし侍る程に。雨の降りければ。

いづれをか雨とも分かむ山伏の落つる涙も夜はにこそふれ

題しらず。

今來むと云ひしばかりに長月の在明の月を待ち出でつるかな（素性法師集）

素性法師

菅原道眞

是善の子。都良香に學びて文才卓絶なり。昌泰二年右大臣に任ぜらる。時平の讒に遇ひ。筑紫に左遷せらる。延喜三年二月薨ず。年五十九。

筑紫配流……松本愚山

明くれば昌泰四年。改元ありて延喜と號す。其の正月元日に日蝕あり。其の月の二十五日に。公を俄に左遷せられて。右大臣右近衛大將の兩官を奪ひ。太宰の權帥に貶任せらる。是官は筑前の國に太宰府ありて。府の事をすべて司る事なり。二月朔日に終に配所に赴き玉ふ。御嫡子右少辨高規は。土佐權守に降し。其の餘二男式部大丞景行。三男藏人兼茂。四男文章得業生茂淳等も。各々諸國へ配流せられ玉ふ。この連坐によりて。右中將源の善(ヨシ)の朝臣も。出雲の權守に貶流せらる。是は公の廢立を謀り玉ひし事。この善(ヨシ)の進められしより事起れりと。誣奏せしによるなりとぞ。公既に都を出でたまへる時。紅梅殿の梅花を見て詠じ玉ふ。

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

と。又北の方よりそへられける御使の道よりかへりける。消息きこえさせ給ふ。

君がすむ宿の木ずゑをゆく〳〵もかくるゝまでにかへりみしかな

公すでに配所に赴き玉ふ時。播磨の國明石の驛に少らくとゞまり玉ふ。その驛の長(ヲサ)公に見えて。榮枯忽ち夢境に異ならざるに驚きしかば。

驛長莫レ驚二時變改一。一榮一落是春秋

と遊ばされて下し玉はるといへり。

やがて太宰府につかせ玉ひて、其の年の九月十日に。去歳の御遊をおほし出されて。作りたまひし詩あり。

去年今夜侍二清涼一。秋思詩篇獨斷レ腸。恩賜御衣今在レ此。捧持毎日拜二餘香一。

此詩を東日記に九月十三夜の作とせしは誤なり。九月十三夜に月を賞する事は。寛平法皇に始りて。中右記に出でたる事。人々のよく知れる事なれば。こゝに略す。

延喜三年二月。公御齢五十九歳。御心地例ならずおはせしが。終に二十五日。從二位前右大臣菅原朝臣太宰府に薨じ玉ひぬ。あはれといふもおろかなり。さてもあるべ

き事ならねば。やがて安樂寺に葬り奉ると。一說に。今の安樂寺は葬所にはあらず。太宰府に近き所に隱し奉らんと。御車をめぐらせしに。忽ち途中に止りて動かず。卽ちこの所を御墓所と定め奉る。これ今の宰府の地なりともいへり。同じき五年八月十九日に。安樂寺に於て。始めて菅公の神殿を立てらる。味酒の安行といへる人。神託によりてなり。安樂寺の學頭。安修の奏狀に出でたる由。逍遙院殿の御記にしるされたり。

今も筑紫の府に。都府樓といへる舊跡あり。これは。公配所に赴き玉ひて後。深くかしこまり玉ひて。門を出で玉はざるよし。その御時の作。集中に見えて。それが中の一聯に。都府樓は只瓦色を見。觀音寺は唯鐘聲をきくの句。殊に人口に膾炙せり。古の樓なるものゝ毀瓦。今もその所に殘れるを。好事の人。硯にゐるに。極めてよろしき材のよし。或人語りき。さらば。この古瓦は世の常のものと異にして。公の詩にあらはれたれば。誠に重寶すべき品にてはあるなり。

（菅家遺祿）

謫後詩三篇……菅原道眞

不出門

一從謫落在柴荆。萬死兢々跼蹐情。都府樓纔看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。中懷好逐孤雲去。外物相逢滿月迎。此地雖身無檢繫。何爲寸步出門行。

九月九日口號

一朝逢九日。合眼獨愁臥。菊酒爲誰調。長齋終不破。

秋夜九月十五日

黃萎顏色白霜頭。況復千餘里外投。昔被桑花簪組縛。今爲敗謫草萊囚。月花似鏡無明罪。風氣如刀不破愁。隨見隨聞皆慘慄。此秋獨作我身秋。（菅家後集）

凡河內躬恒

歌人なり。寬平年中甲斐權少目となり。醍醐帝に召されて御書所に候す。延喜中御厨子所に還り。和泉大掾となる。紀貫之等と共に古今集を撰せり。

歌才敏妙……尾崎雅嘉

凡河內躬恒

躬恒は。元より小身なる人にて。家も貧しけれど。歌を詠まれたる故。寛平年中。甲斐少目となり。延喜帝に召されて御書所に候し。又丹波權目淡路權椽を歴て和泉大椽に遷り。六位を授けられし。又古今集勅撰の時も。貫之忠岑などと。同列にて撰者に定められたり。帝或時。躬恒を階下に召され。月を弓張と云ふは如何なる故ぞと問はせ給ひければ。恐れ畏みながら。取り敢へず歌を詠じて應へ奉られける。

照る月を弓張としもいふことは山の端さしていればなりけり

帝いみじく賞し給ひて。御衣を賜はりけるよし。又躬恒の家に櫻の木ありて。春毎に。花時には見に來る人多かりければ。其の花散りたる後は。來る人もなかりければ。

我が宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しかるべき

是は。世の人の薄情なる事を憤りて詠まれたる歌にて。古今集にも入りたり。又後撰集躬恒の歌の詞書に。淡路のまつりごと人の任果てゝ上り參うで來ての頃。兼輔朝臣の粟田の家にてとありて。

引きうゑし人はうべこそ老いにけれ松の木高くなりにけるかな

と云ふ歌あり。淡路のまつりごと人とは。淡路椽のことにて。躬恒。淡路に四年あり

て。都に上られたる時の歌なり。又延長四年大堰河行幸の時の和歌に。散位凡河内躬恒とありて。其の行幸の日。題九つ出されて。讀む人は六人なりしに。外の人々は。題毎に一首を詠まれたれど。躬恒は鶴江に立てりと云ふ題の外は。一題に二首よみて獻ぜられし事。其の日の眉目たりし由なり。後の世に。三條の大相國檢非違使の別當たりし時。二條の帥と二人。躬恒貫之の歌の勝劣を論ぜらるゝに。三條の相國は。躬恒を讃められ。二條の帥は。貫之を譽められて。互に言を盡して爭はれけれど。事果つべくもあらざりければ。二條の帥。此の由を白河院へ奏聞して。御批判を請ひ奉られけるに。院の仰せには。朕いかでか此の勝劣を定むべき。此の事は。俊賴などに問ふべしと仰せられし故。俊賴朝臣に逢ひて。彼の三條相國と爭ひ始めし事より。院の仰せられし趣まで。委しく物語られしかば。俊賴之を聞きて。度々うち頷きて。躬恒を侮らせ給ふなとばかり申されければ。帥は心得ぬ事に思ひて。さらば。貫之は劣り候ふや。孰にも勝劣を定め給へと責められけれど。俊賴尚ほ初の如く。躬恒を侮らせ給ふなとばかり申されければ。さては我が論は。負けに定まりたるべし。と帥は口惜しく思はれし由なり。躬恒の官を御書所の預となり。又御厨子所に候すと記せり。

藤原時平

基經の子。昌泰二年左大臣となり。右近衛大將を兼ぬ。延喜七年正二位に進み。九年薨ず。年三十九。三代實錄及び延喜格十卷を撰す。

乘機得美……木下葵峯

本院左府藤原時平公。人と爲り容姿閑雅。才學秀傑なり。從父大納言經國。夫人在原氏なり。美艶絶倫なり。年纔に二十許歲。常に竊に經國の老醜を厭惡す。公之を聞きて。想戀して措かず。屢〻來つて經國の第に遊ぶ。主翁。公と同族なりと雖も。其の相種なるを以て。待遇甚だ謹めり。時に春首。公二三の縉紳を携へ。復彼の第に宴し。詠吟絃歌。興趣轉酣なり。夜更け。公將に還らんとす。主翁贈るに珍器鞍馬を以てす。公笑つて謝して曰く。此の會。千載の一遇なり。冀くは非常の贈有らんと。主翁沈醉し。自ら簾帷を揭げ。夫人の手を把りて。公に示して曰く。老子。此の外秘愛する所無し。以て公に奉獻せんと。公遽に夫人を抱き。輿に俱に載せ還る。主翁獨眠旦に達し。宿醉半ば醒め。悔歎すれども及ぶ無し。公夫人と相愛し。遂に弄璋の慶有り。然かも識者。其の姪礒讒慝の行を毀ると云ふ。

（桑華蒙求）

以謀遏奢……藤原爲憲

延喜の世の中の作法したゝめさせ給ひしかど。過差を得しづめさせ給はざりしに。此の殿。制を破りたる御裳束の。事の外にめでたきを召して。內に參り給ひて。殿上に侍ひ給ふを。皇帝小蔀より御覽じて。御氣色いと惡くならせ給ひて。職事を召して。世間の過差の制嚴しきところに。左の大臣の。一の人と云ひながら。美麗ことのほかにて參れる。便無き事なり。すみやかに出づ可き由仰せよと仰せられければ。承け給はるも如何なる事にかと。恐れおぼえけれど。參りて戰く〳〵しかぐ〳〵の事と申しければ。いみじく驚きて。かしこまり承はりて。御隨身の御前參るも制し給ひて。急ぎ罷りて出で給へば。御前ども〻怪しと思ひてなむ。さて本院の御門。一月ほどさゝせて。御簾の外にも出で給はず。人などの參るとも。勘當の重ければとて。逢はせ給は

ざりけり。さりしにこそ。世の中に過差は平らぎたりしか。うち〳〵に承け給はりしは。さてばかりぞ鎭まらんとて。皇帝と御心合はせ給へりけるとぞ。（大鏡）

三善清行

淡路守氏吉の子。巨勢文雄に師事し。貞觀中文章得業生となる。昌泰三年革命議を上り。延喜中十二條の封事を上りて時弊を論ず。延喜十七年十二月卒す。年七十二。

傳……巨勢正純

三善の姓は。百濟國王の裔なり。性（ヒトヽナリ）忠正明達。博洽にして衆藝を該（カ）ぬ。又卜曆數に長ず。位參議に至る。昌泰三年。醍醐帝の爲に史記を講ず。菅原道眞右相と爲りて幼弱の王に事へ。姦佞の臣に竝ぶ。清行星災に託して之を諫む。道眞用ふること能はず。遂に謫謗に遇へり。藤原時平。盡く菅族及び其の門生を錮す。清行時平が暴威を憚らず。朝廷に告し。其の禁錮を解かんと請ふ。又洛の堀河に人屋有り。厲鬼妖を爲す。人住むこと能はず。清行其の宅に坐す、厲鬼侵すこと能はず。跡を潛めて去りぬ。當時紀ノ長谷雄。大藏善行。儒門の魁たり。名聲朝廷に冠たり。清行之を屑とせず。蓋し德量才能。共に二老に超えたり。延喜十四年四月二十八日。從四位上。式部大輔。三善朝臣清行封事を上る。其の略に曰く。一に奢侈を禁ぜん。伏して以（オモ）んみれば。先聖明王の世を御するや。節儉を崇み。驕者を誡む。今夫れ僭差競ひ傲ひ。儉約遞に嗤ふ。是れ何の故ぞや。上之を破り下に倣はしむればなり。二に大學生徒の食料を加へん。伏して以んみれば。治國の道。賢を擧ぐるを先と爲す。賢を得るの方。學校を本と爲す。是を以て哲王必ず庠序を設け。以て德義を敎へ經藝を習はしむ。本邦の古典を見るに。朝廷の學校を立つるや。大寶年中に創まる。天平の時に至り。吉備朝臣。道藝を恢弘し。學生四百人をして。五經三史。明法。算術。音韻。籀篆等を習はしむ。其後勅して越前國加賀郡。山城國久世郡。河內國茨田。澁川。兩郡。通計一百八十餘町を給し。號して勸學田と曰ひ。又勅して。常陸國丹後國の稻。通計一千八百四十束。寮中の雜用。生徒の口味に充てしむ。今缺くる所多し。請ふ舊に依り之を復せん。三。判事の員を增さん。俯して以んみれば。聖王の政。刑法を大なりと爲す。昔皐陶（コウヨウ）の大

賢も猶ほ舜之を誡めて曰く。欽めや欽めや。惟刑を恤めと。今萬民の死生を總べ。一人の胸臆に繫ぐ。恐らくは濫罰の科を貽さん。伏して望むらくは。內に依り。明律の者六人を擇び。共に議せしめん。四。諸國の僧徒の濫惡を禁ぜん。伏して以んみれば。諸寺の得度。一年或は二三百人に及ぶ。過半は是れ邪姦の輩なり。或は課役を逃れ。私に髮を落す。天下三分の二は頭を禿にす。形沙門に似て。心は屠兒の如し。況んや。又聚つて群盜を爲し。竊に錢貨を鑄る。國司法に依りて糺斷すれば。霧合雲集し。競うて暴逆を爲す。前年安藝守藤時善を攻圍み。紀伊守橘公廉を劫掠すと。封奏凡そ十二事。今略して要なる者四條を摘む。

（本朝儒宗傳）

平將門

鎭守府將軍良將の第三子。天慶中下總に據りて叛し。平貞盛の爲に射殺せらる。

傳……頼山陽

高望の四子國香。良將。良兼。良文。竝に東國の守介鎭守府の將軍に任ぜらる。國香が子を貞盛と曰ふ。材武射を善くす。左馬允と爲る。良將が子將門。性桀黠なり。攝政藤原の忠平に倚り。檢非違使爲らんことを求む。忠平省みず。將門怒り去つて東國に之き。相馬の里に據り。常陸下總を劫掠す。時に國香常陸の大掾爲り。良兼下總介爲り。皆將門と隙有り。承平中。將門終に國香を攻殺す。將門の京師に在るや。嘗て敦實親王に詣る。從兵五六騎可なり。適〻貞盛も亦來謁し。將門の門を出づるに會ふ。貞盛人に謂つて曰く。將門は必ず事を天下に生ぜん。今日士卒を率ゐざるを恨む。卽士卒を率ゐば。當に擊つて之を殺すべしと。是に至つて貞盛官を棄てゝ東し。父の仇を復せんと欲し。良兼及び從弟良正と共に將門を攻む。利あらず。貞盛謂らく是れ私鬪なり。勅を受けて之を討ずるに若かずと。將に京師に還り請ふ所有らんとす。將門これを信濃に要擊す。貞盛大いに敗れ。身を脫れて京師に入る。已にして良兼卒す。將門乃ち下總に據り。遂に襲つて常陸介藤原維幾を執へ。常陸を取れり。武藏守興世王。兇險にして亂を喜ぶ。往いて將門に說いて曰く。關東八州。沃饒にして四塞なり。據りて以つて天下に覇たる可し。夫れ一州を取るも誅せられ。八州を取るも亦誅せら

る。誅は一のみ。願ふに公安くに決する所ぞと。將門大いに悅び。延いて謀主と爲し。遂に下總上總武藏相模を攻めて悉く之を下す。弟將平諫めて曰く。帝王命有り。妄りに冀ふ可からず。願はくは之を熟圖せよと。將門が曰く。天我に縱(ユル)すに武を以つてす。吾帝位を取る。孰か能く之を拒がんと。乃ち僞宮を下總の猿島に建て。文武百官を置く。初め將門藤原の純友と友とし善し。嘗て同く比叡山に登り。俯して皇城を瞰て曰く。壯んなる哉。大丈夫當に此に宅(ヲ)るべからざらんやと。遂に與に反を謀る。純友に謂つて曰く。他日志を得ば。吾は王族なり。當に天子と爲るべし。公は藤原氏なり。能く我が闗白爲らんかと。是に至つて純友伊豫掾と爲り。任滿ちて還らず。海島に據りて盜を爲し。以つて遙に將門に應じ。潛に人を遣はし。京師に入り火を坊市に行はしむ。京師戒嚴。時に天慶二年なり。三年。朝廷參議藤原忠文を拜し。征東大將軍と爲し。諸將を率ゐて東伐せしむ。東海。東山の兵を發し。募るに重賞を以つてす。而して貞盛を常陸の掾に任じ。兵を發して將門を討たしむ。將門之を聞き。兵を率ゐ貞盛を常陸に索むれども得ず。乃ち其の衆を散じ。獨り千餘人を以つて下野に至る。下野に押領使藤原秀鄕有り。世々大族爲り。將門兵を起すに及び。往いて之を見る。將門方に髮を梳(クシケ)る。髻(モトヾリ)を捉つて出でゝ之に款接し。食を命じて共に食す。飯粒前に墮つ。拾つて之を食ふ。秀鄕其の輕率與に爲す有るに足らざるを知るや。乃ち貞盛に從ふ。貞盛將門が備無きを窺ひ。秀鄕と與に兵四千餘人を合はせ。急に之を襲ふ。將門遽に出でゝ之を拒ぎ。大いに敗る。貞盛勝に乘じて疾く攻む。將門之を險阻に誘はんと欲し。走りて島廣山に據る。貞盛其の營を火(ヤ)き。大いに山北に戰ふ。將門見兵四百騎を以つて死鬪す。貞盛兵を麾きて之を蹙む。將門獨身出でゝ走る。貞盛叱咤追ひ馳せ。射つて其の右額に中つ。馬より墮つ。秀鄕其の首を斬る。興世王以下悉く誅に伏す。京獄に梟す。八州皆定まる。而して純友尋いて平ぐ。（日本外史）

伸寃憤（上太政大臣藤原忠平書）……平將門

將門謹んで言す。貴誨を蒙らずして。星霜多く改まる。渴望の至りなるも。造次に何をか言さん。伏して高察を賜はらば。恩幸恩幸。然れば先年源ノ護等が愁狀に依り。將門を召されぬ。官符の急なるをば恐(カシコ)みぬ。然るに。道に上り祇候するの間。仰を奉ず。云ふ。將門の事。既に恩澤に霑ひぬ。仍つて早く返し遣はすとあれば。舊堵に歸

著し已はんぬ。然る後は。兵事を忘却し。弦を緩くし。居に安んじぬ。而る間。前ノ下總ノ國ノ介。平ノ良兼。數千の兵を興して。將門を襲ひ攻めつ。背走する能はずして。相防ぐの間。良兼の爲に人物を殺損奪掠せられしの由は。具に下總國の解文に注して。官に言上しぬ。こゝに。朝家より諸國勢を合せて良兼等を追捕す可きの官符を下されり。而も更に將門等を召すの使を給はりぬ。然り而して。心の安からざるに依りて。遂に道に上らず。官使莫保純行（アナホトモユキ）に付して。由を具して言上し了りしが。未だ報裁を蒙らず。鬱包の際。今年の夏。平ノ貞盛。將門を召すの官符を奉じて常陸國に到りぬ。仍つて國司頻りに將門に牒送しぬ。件の貞盛は追捕を脱れて。蹋躋として道に上れる者なり。公家須らく捕へて其の由を糺さるべきに。還つて得理の官符を給はれるは。是尤も虚飾せらるゝもの也。又右少辨源相職朝臣。仰の旨を引いて書狀を送られぬ。詞に云く。武藏ノ介經基の告狀に依りて。定めて將門を推問す可きの符を給はり了るといへれば。詔使到來を待つの比に。常陸ノ介藤原維幾（コレチカ）朝臣の息男爲憲。偏に公威を假りて。只だ寃枉を好む。こゝに將門の從兵藤原玄明の愁訴に依り。將門其の事を聞かんが爲に。彼の國に發向しぬ。而るに。爲憲と貞盛等と同心して。三千餘の精兵を率ゐて。恣まゝに。兵器仗戎具並びに楯等を下して戰を挑みぬ。是に於て。將門士卒を勵まし意氣を起し。爲憲の軍兵を討伏せ已はんぬ。時に領州の間滅亡する者。其數幾許なるを知らず。況んや。存命の黎庶は。盡く將門に虜獲されつる也。介ノ維幾。息男爲憲を教へずして。兵亂に及ばしむるの由。伏して過狀を辨じ已んぬ。將門本意に非ずと雖も。一國を討滅しぬ。罪科輕きにあらず。百縣に及ぶ可し。之に因りて朝議を候するの間。且らく坂東の諸國を擄掠し了る。伏して昭穆を案ずるに。將門已に柏原天皇五代の孫なり。縱ひ永く半國を領するも。豈に運に非ずと謂はんや。昔兵威を振つて天下を取る者。皆史書に見ゆる所なり。將門天の與ふる所。既に武藝に在り。等輩を思惟するに。誰か將門に比せん。而るに公家褒賞の由无くして。屢〻譴責の符を下さるゝていれば。身を省みるに恥多し。面目何ぞ施さん。推して之を察したまはゞ。甚だ以て幸なり。抑〻將門少年の日。名簿を太政大殿に奉じ。數十年にして今に至りぬ。相國攝政の世。意はざりき此の事を舉げんとは。歎き念ふの至り。言ふに勝ふ可からず。將門傾國の謀を萌すと雖も。何ぞ舊主を忘れん。貴閣且つ之を察するを賜はらば。甚だ幸なり。一を以て萬を貫く。將門謹んで言す。

天慶二年十二月十五日

謹々上　太政大殿少將閣賀　恩下

藤原純友

長範の子。伊豫掾となる。天慶中亂を起す。朝廷小野好古。源經基をして之を伐たしむ。純友伊豫に奔り。橘遠保の爲に殺さる。

純友追討……作者不詳

（將門記）

伊豫掾藤原純友彼國に居住し。海賊の首と爲る。唯受くる所の性。狼戾を宗と爲し。禮法に拘らず。多く人衆を率ひ。常に南海山陽等の國に行き。濫吹を事と爲す。暴惡の類。彼の威猛を聞き。追從するもの多く。官物を押取し。官舍を燒亡し。之を以て其の朝暮の勤と爲す。遙に將門謀反の由を聞き。亦亂逆を企て。漸く上道せんと擬す。此の比東西二京連夜火を放つ。之に依りて男は夜を屋上に送り。女は水を夜中に運ぶ。純友の士卒が京洛に交るの致す所なり。是に於て。備前介藤原子高。其事を風聞し。其の旨を奏問し。天慶二年十二月下旬。妻子を相具し。陸路より道に上る。純友之を聞き。將に害を爲さんとす。子高。郎等文元等をして攝津國兎原郡須岐驛に追及せしむ。同十二月二十六日壬戌寅亥。純友の郎伺等。矢を放つこと雨の如く。遂に子高を獲。卽ち耳を截り鼻を割き。妻を奪ひて將る去り。子息等賊に殺され畢りぬ。公家大に驚き。固關使を諸國に下し。且つ純友に敎喩官符を給し。兼て榮爵を預け。從五位下に敍す。而も純友の野心未だ改らず。猾賊彌〻倍す。讃岐國彼の賊軍と合戰し。大に破れ。矢に中りて死する者數百人。介藤原國風の軍敗れ。警固使坂上敏基を招き。竊に逃げて阿波國に向ふ。純友國府に入つて。火を放つて燒亡し。公私の財物を取れり。介國風更に淡路國に向ひ。具狀に注し。飛驛して言上し。二箇月を經て。武勇の人を招集して讃岐國に歸り。官軍の到來を相待つ。時に公家追捕使左近衞少將小野好古を遣りて長官と爲し。源經基を以て次官と爲し。右衞門志大藤春實を以て主典と爲し。卽ち播磨讃岐等の二國に向はしめ。二百餘艘の船を作り。賊地伊豫國を指して艤向す。是に於て。純友儲ふる所の船千五百艘と號す。官使未だ到らざる以前。純友の次將藤原恒利。賊陣を脫して。竊に逃げ來つて國風の

處に著く。件の恒利。能く賊徒の宿所隱家。竝に海陸兩道通塞案内を知る者なり。仍りて國風。置きて指南と爲し。勇悍の者を副へて賊を擊たしむ。大に敗れ散じて。葉の海上に浮ぶが如く。且つ陸路を防ぎて其の使道を絶ち。且つ海上を追ふて其の泊處を認む。風波の難に遭ひて。賊の向ふ所を失ひ。相求むるの間。賊徒りて太宰府に到る。更に儲ふる所の軍士。壁を出でゝ防戰し。賊に敗らる。時に賊太宰府累代の財物を奪ひ取り。火を放ちて府を燒き畢り。部内を寇賊するの間。官好古をして武勇を引率し。陸地より行き向はしむ。慶幸。春實等桴を鼓して。海上より、筑前國博多津に赴き向ふ。賊卽ち待ち戰ひ。一舉にして死生を決せんと欲す。春實戰酣にして裸袒亂髮。短兵を取り振り。呼びて賊中に入る、恒利。遠方等も亦相隨つて遂に入り。數多の賊を截り得たり。賊陣更に船に乘じて戰ふの時。官軍賊船に入り。火を著け船を燒く。凶黨遂に破れ。悉く擒殺に就く。取り得し所の賊船八百餘艘。箭に中りて死傷せる者數百人。官軍の威を恐れ。海に入るの男女。計るに勝ふ可からず。賊徒主伴。相共に各離散し。或は亡び。或は降り。分散して雲の如し。純友扁舟に乘じ。逃げて伊豫國に歸り。警固使橘遠保の爲に擒にせられ。次將等國々所々に捕へらる。純友捕へられ。

其の身を禁錮さる。獄中に於て死せり。

藤原秀郷

下野權大掾村雄の子。田原藤太といふ。延喜の末年下野押領使と爲る。將門の叛する。平貞盛と伐ちて之を誅し。功を以て從四位下鎭守府將軍に拜せらる。

傳……百梅居士

秀郷は藤氏。房前公の六世村雄卿の子なり。和州の田原に居る。故に田原藤太と稱す。後俵の字を轉用して氏と爲せり。武勇絶倫。世に稱せらる。朱雀天皇の朝。平將門叛し。其の伯父平國香を殺し。其の地を略す。臣權守興世。將門に說きて曰く。今君一州を掠す。罪也。若し八州を略するも。亦罪なり。同じく死罪ならば。大罪に死して可なり。且つ關左の地勢。東は奥羽に連り。西に函嶺の險有り。北は山嶺に接し。南に魚鹽の利有り。實に天府四塞の國なり。之に據りて以て八州の兵を動さば。霸王

の業成す可きなりと。將門之を然りとし。遂に八州を略し。都を總州相馬郡石井郷に建て。自ら平親王將門と號し。百官を備ふ。此の時藤原純友豫州に叛く。是より先。將門純友偶〻朝して京に逢ひ。一日叡山に登りて平城を望み。歎じて曰く　盛なる哉士や。大丈夫必ず斯に居らんのみと。相約して曰く。事成らば。汝攝政と爲れ。我は帝と爲らんと。遂に東西相叛き。天下大に亂る。平貞盛。父國香の爲に仇を報ぜんと欲して。力足らず。幸に秀郷の力を戮すに遇ひ。貞盛大に悅び。謀を合せて奥野二州の兵一萬九千を發し。將門を攻めて下毛に戰ふ。將門敗走す。之を追ひて辛島に戰ひ。亦之を敗る。將門將に奔らんとす。貞盛聲を抗げ馬を馳せ。射て之を殪し。秀郷其の首を獲たり。初め秀郷將門の才器を視んと欲し。其の門に謁す。將門素秀郷の勇名を知り。其の至れるを悅び。跣して走つて之を門に迎ふ。其の輕忽。大事を爲すの器に非ざるを知る。故に力を貞盛に戮せ。遂に之を誅せり。朝廷議して參議藤原忠文をして征夷大將軍と爲し。源經基を副將軍と爲し。將門を擊たしむ。駿州に至れる比。關東平ぐを聞きて京に歸る。天慶三年夏五月。秀郷を賞して從四位下に敍し。武藏相模守に任じ。貞盛を以て從五位に敍し。右馬助に任ぜり。

（百梅蕉言）

檜垣嫗

歌人なり。檜垣嫗集あり。篇中記する所は小野好古の事とも。或は藤原興範の事なりともいへり。

みづはぐむ……在原滋春（俗傳）

筑紫に在りける檜垣の御と云ひけるは。いとらうあり。をかくして。世を經ける者になむありける。年月斯くてあり渡りけるを。純友が騷に遭ひて。家も燒け滅び。物の具も皆取られ果てゝ。最いみじうなりにけり。斯りとも知らで。野の大貳（好古）討手の使に下り給ひて。其が家の在りし邊を尋ねて。檜垣の御と言ひけむ人に。いかで逢はむ。何處にか住むらむと宣へば。此の邊になむ住み侍りしなど。供なる人も云ひけり。あはれ斯る騷に。如何に成りにけむ。尋ねてしがなと宣ひける程に。頭白き嫗の水汲めるなむ。前より怪しきやうなる家に入りける。或る人ありて。是なむ檜垣の御と言ひけり。哀れがり給うて呼ばすれど。恥ぢて來で。斯くなむ云へりける。

むば玉の我が黒髪は白川のみづはぐむまでなりにけるかな

と詠みたりければ。哀れがり。著たりける袙(アコメ)一襲脱ぎてなむ遣りける。

又同じ人。大二の館にて。秋の紅葉を詠ませければ。

鹿の音はいくらばかりの紅ぞふり出づるからに山の染むらむ

此の檜垣の御。歌なむ詠むと云ひて。すき者ども集りて。詠み難かるべき末をつけさせむとて斯く云ひけり。

わたつみの中にぞ立てるさを鹿は

とて末をつけさするに。

秋の山べや底に見ゆらむ

とぞつけたりける。

（大和物語）

伊勢

歌人なり。伊勢守藤原繁蔭の女。宇多帝に寵せられ行明親王を生む。帝位を退くに及び五條の里第に居り。敦康親王と通じて女中務を生む。三十六歌仙の一人なり。

三輪の山……作者不詳

日野家の祖眞夏四代の孫伊勢守(後に大和になる)繁蔭が女なり。七條の御(ゴ)。溫子に仕へし官女なり。寛平法皇に嬖されて。行明親王を生む。仍て伊勢の御息所と云ふ。伊勢物語は業平の自記ありし上に。此の人筆を加へて作り物語となし。則ち七條の御(ゴ)の御許へ奉りしとなり。家集一卷あり。

三輪の山いかに待ち見む年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

古今集の歌なり。詞書に云ふ。

仲平の朝臣相知りて侍りけるを。かれがれになりにければ。父が大和守に侍る許へ罷るとて。詠みて遣しける。

とあり。仲平は枇杷の左大臣の事なり。此の人と伊勢と。忍びて云ひ交す中なりけるが。かれがれになりければ。仲平の朝臣を恨みて。父の許へ行く時。詠みて遣りけるなり。

難波がたみじかき芦のふしの間もあはで此の世を過ぐしてよとや

是は新古今戀一に。題知らずとある歌なり。伊勢小町は。女にして尋常の男の堪能には越えたる歌人なるべし。されば定家卿詠歌大概に。殊に上手の歌を心にかけて見習へとの敎にも。人麿。貫之。忠岑。伊勢。小町等の類なりと侍る。尤も賞翫の義か。

（歌道人物志）

紀貫之

望行の子。從四位下木工權頭に至る。和歌に巧にして歌仙と稱せられ。新恒。忠岑等と古今集を撰す。天慶九年卒す。

蟻通……紀貫之

紀の國に下りて歸り上りし道にて。俄に馬の死ぬべく煩ふ所にて。道行く人々立ち停りて云ふ。是は此所にいますかる神のし給ふならむ。年頃社もなく驗も見えねど。うたてある神なり。さざきも斯るには祈をなむ申すと云ふに。御幣もなければ。何業もせで手洗ひて。神おはしげもなしや。そもそも何の神とか聞えむとて問へば。蟻通の神と云ふを聞きて詠みて奉りける。馬の心地已みにけり。

かき曇りあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは

昔長谷に詣づとて宿りたりし人の。久しう寄らで往きたりければ。たまさかになむ人の家はあると云ひ出したりしがば。其所なりし梅の花を折りて入るとて。

人はいざ心も知らずふる里の花ぞ昔の香に匂ひける

返し。

花だにも同じ心に咲くものを植ゑたる人の心しらなむ　（貫之集）

かへらぬ人……同

二十七日。大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。斯くあるうちに。京にて生れたりし女子。此所にて俄に失せにしかば。此の頃の出立。急ぎを見れど。何事もえ云はず。京へ歸るに女子の亡きのみぞ悲しび戀ふる。ある人々もえ堪へず。此の間に或る人（貫之）の書きて出せる歌。

紀貫之

都へと思ふも物の悲しきはかへらぬ人のあればなりけり

又或時には。

あるものと忘れつゝなほ亡き人をいづらと問ふぞ悲しかりける

と云ひける間に。鹿兒の崎と云ふ所に。守(カミ)(貫之)の同胞(ハラカラ)又他人(コトヒト)。此彼(コレカレ)酒なんど持て。追ひ來て。磯に下り居て別れ難きことを云ふ。

(土佐日記)

飛鳥部常則

本朝畫工の名家。醍醐村上の時人。巨勢公望等と名を齊うす。

傳……狩野永納

飛鳥部常則は左衞門少志(サクワン)に任ず。善畫を以つて祿重く名高し。源氏物語に曰く。曾て源君の須磨に在るときに。戯に其の見る所の山海の景を畫いて。又當時の高手千枝常則を招いて。新に之れを圖せんと欲すと。千枝常則時に一雙の妙手と稱す。古今著聞集に載す。常則は大上手。公望は小上手と。世俗の稱する所なり。又常則曾て獅子を畫く。生狗之れを見るときは則ち吠ゆ。常則が事は。高名錄に之を載す。或は曰く常則は延喜天曆の二朝に仕へ。詔に應じて屏風に畫く。其の色紙形の者。小野の道風之に書すと。

(本朝畫史)

淨藏法師

平安の人。三善滿行の子。寛平上皇遊幸して一見之を喜び。勅して臺山に入り。密敎を禀けしむ。又大慧に從つて曇章を學ぶ。康保元年十一月化す。年七十四。

……作者不詳

先身の骨

二十四歲。正月二十八日葛木山に入る。二月晦金剛山大谷に到る。日已に晩に及び。菴に宿せんと欲す。傍に一屍骸有り。其の形甚だ長大。髑髏。手足。支體。骨節亂れず。封苔服と爲り。石を枕して臥す。其の左手に獨鈷杵を持す。其の杵。金色赫奕。長さ七寸可(バカリ)なり。法師之を見て太だ之を奇とし。通夜精勤。本尊に啓して此の事を達

せんと欲し。一心に加持すること數日。第五夜の丑刻に至つて。夢に。人有り。告げて曰はく。應に知るべし。此の尸は是れ曹が先身の骨なり。宜しく本尊に啓して彼の杵を取るべきものなりと。夢去り涙下る。佛に白し。呪經を誦する一日夜。尸動いて掌を開く。法師敬屈して金杵を移取す。卽ち薪を積み火を放ち。以て其の朽骨を葬る。燒香散花し。石を刻して塔を立つ。塔今に存す。（大法師淨藏傳）

業報決定せり……同

西塔（叡山）平等房の和尚。延昌僧正大原補陀落寺に供養の日。法師聽法の爲に會場に至る。童子來り告げて云はく。騎る所の馬俄に斃るゝと。法師云はく。汝舁き去つて之を守り。柴を折り目を掩ひ。宜しく烏の之を啄むを防ぐべしと。童子命旨を受けて法師の來るを待つ。法會已に畢り。法師歸來す。卽ち死馬に向ひ。念誦加持すること一百八反。馬忽ち蘇息し。身を振つて立つ。童卽ち之に秣飲す。望者擧獲を見。人開避を得ず。法師遂に策を擧げて道を取り庵に來る。童子に命じて云はく。早く馬を牽いて門を出づべし。業報決定せりと。童子引いて闌外に至る。果して斃るゝこと言の如し。（同）

將門の調伏……同

天慶三年正月二十二日。勅に依つて首楞嚴院に於て三七日を限り。大威德法を勤行す。是れ關東凶逆の首平將門を調伏せんが爲なり。二七日の初夜に至り。分流鏑聲東を指して出づ。又將門弓箭を帶して燈明上に立つ。人々之を見て太だ以て驚騷す。法師曰はく。斯は是れ將門調伏せらるゝの兆なりと。公家又大仁王會を修せらる。法師待賢門の講師と爲り。御願を勤仕するの間。人々皆云はく。將門の軍衆已に以て入京し。殿上陛下靜ならず。京兆門を合して擾動すと。時に法師奏して曰はく。件の賊首調伏し畢んぬ。敢て入京すべからず。但し人の云ふ所は。是れ其の頭京師に傳ふるなりと。須臾にして果然言ふ所差（タガ）はず。兒聞感歎せざるは莫し。（大法師淨藏傳）

小野道風

太宰大貳葛弦の子。好古の弟。書を以て鳴る。醍醐朱雀村上三朝に事へ。正四位下內藏權頭に至る。康保三年卒す。年七十一。

小野道風

傳……橘行精

正四位下内藏權頭道風朝臣は。參議篁の孫。太宰大貳葛弦の子なり。敏行朝臣の子參議伴衡卿を師とし給ふ。或時池の邊に逍遙しけるが。蛙の柳の蟲を捕らむとて。幾度も飛び上れる程に。初は水を放るるばかりなりしが。遂に柳に飛びつきけるを見て。自ら勉め習ひ給へりとぞ。延長三年二十一歳にて醍醐寺の額を書き給ふ。初め帝（醍醐）額二枚を眞草兩樣に書くべきよし勅あり。書きて奉りけるに。眞に書きたるは南大門の料なるべきに。草の額を晴の門に打たれたり。道風之を見て。あはれ賢王やとぞ申しける。其の故は道風が心に。草の額殊に書きすまして覺えければなり。明くる四年興福寺の寛建入唐ありし時。菅原。橘廣相。都良香。紀長谷雄の詩集と。道風の行草書各一卷を彼の國へ渡し遣されける。同じき六年。紫宸殿南廂の賢聖の障子の銘を書き給ふ。巨勢金岡其の像を畫き。大江朝綱其の銘を作り給ふ。時の人南廂の三絶とぞ稱しける。此の朝綱と申すも手書くこと勝れ給ひ。常に道風と手跡を爭はれけるが。或時兩人義して。主上（村上）の御判を賜ひて勝劣を定むべしとて。御判を申し請ひければ。朝綱が書の道風に劣れることは。譬へば。道風が朝綱の才に劣れるが如しと仰せられける。天德二年正月。申文を奉りて近江權介を兼ね給ふ。其の頃は山城守と聞え給ひし。其の文の略に曰はく。

春秋廿一歳之時。初めて龍顏の聖主に奉じ。勞績五十四年之日。已に鶴髮の衰翁となる。少藝神に非ず。妙に非ず。然而して紫宸殿の皇居には。七廻聖賢之障子を書し。本嘗會の寶祚には。兩度書圖の屏風を黷す。臨時の勅を奉ずる。勝げて計ふべからず。方今微功の下。日月彌深く。薄效の中。恩慈未だ至らず。三朝の德化を觀。身猶本朝に沈むと雖も。萬里の波濤を隔てゝ。名は是唐國に播（ホドコ）すことを得たり。

同じき四年。内裡燒けぬる後。造り出されし殿舍どもの額を書き給ふ。康保三年十一月六十二歳にて卒し給ふ。世に道風大師の書き給へる額を難じて。美福門は田廣し。朱雀門は米雀と嘲ける程に。頓て中風して手戰ひける。されど手書の上手なれば。ふるひ筆とて人はもてはやしけると云へり。

（本朝能書傳）

仲算大徳

兒たりし時。空晴法師見て寺に入らしむ。長じて論議に通じ。都内推して翹楚とす。安知二年熊野山に登り。行く所を知らず。

千手の化身……兒島法師（俗傳）

村上天皇の御宇應和元年に。天臺法相の碩徳を召して。宗論ありしに。山門よりは横川の慈慧僧正。南都よりは松室貞松房仲算已講ぞ參られける。豫算の日になりしかば。仲算既に南都を出でゝ上洛し給ひけるに。折節木津河の水出でゝ船も橋もなければ。如何せんと河の邊に輿を舁き居ゑさせて。案じ煩ひ給ひける處に。恠しげなる老翁一人現じて。何事に此の河の邊に徘徊ひ給ふぞと問ひければ。仲算宗論のために召されて參内仕るが。洪水に河を渡り兼ねて。水の干落つる程を待つなりとぞ答へ給ひける。老翁笑ひて。水は深し智は淺し。潛鱗水禽にだにも及ばず。何を以て宗論致すべきと恥しめける間。仲算實にもと思ひて。十二人の力者に。只水中を舁き通せとぞ下知し給ひける。輿舁さらばとて。水中を舁き通るに。さしも夥しき洪水。左右に颯と分れて。大河俄に陸地となる。供奉の大衆。悉く足をも濡らさず渡りけり。慈慧僧正も。比叡山西坂下松の邊に車を儲けさせて下落し給ふに。鴨河の水漲り出で。逆浪岸を浸して茫々たり。牛童輾を控へ。如何と立ちたる處に。水牛一頭水中より游ぎ出でゝ。車の前にぞ喘ぎける。僧正此の牛に車をかけ替へて。水中を遣れとぞ仰せられける。牛童命に隨ひ水牛に車を懸け。一鞭を當てたれば。飛ぶが如く走り出で。車の轅をも濡らさず。浪の上三十餘丁を游ぎ上り。内裏の陽明門の前にて。水牛は搔き消すやうに失せにけり。兩方の不思議奇特。皆權者とはいひながら。類少き事ども なり。去る程に。清涼殿に師子の座を布きて。問者。講師。東西に相對す。天子は南面にして。玉扆に旒璜を挑げさせ給へば。臣下は北面にして。階下に冠冕を低る。法席既に定まりて。僧正は草木成佛の義を宣ひ給へば。仲算は五性各別の理を立てゝ難じて曰く。非情草木理佛性を具すと雖も。行佛性無し。行佛性無くんば。何ぞ成佛の義有らん。但し文證有らば。暫く疑を除くべしと宣ひしかば。慈慧僧正則ち圓覺經の文を引きて。地獄天宮皆淨土爲り。有性無性齊しく佛道を成ぜんと誦し給ふ。仲算此の文に

詰められて。暫く閉口し給ふ處に。法相擁護の春日明神。高座の上に化現ましく〳〵て。幽なる御聲にて。此の文點を讀み替へて敎させ給ひけるは。地獄天宮皆淨土爲り。有性も無性も齊しく佛道を成ぜんと。慈慧僧正重ねて難じていはく。此の文點全く法文の心に叶はず。一草一木各一因果。山河大地同一佛性の故に。講答既に理佛性を具すと許す。若し理佛性を具しながら。遂に成佛の時無くんば。何を以て佛性と曰はんや。若し又佛性を具すと雖も。成佛せずと言はゞ。有情成佛すべからず。有情成佛は理佛性を具するに依るが故なりと難じ給ひしかば。仲算言無くして默止し給ひけるが。重ねて答へて曰はく。草木成佛子細なくば。非情までもあるまじ。先づ自身成佛の證を顯はし給はずば。何を以て疑を散ぜんと宣ひしかば。此の時慈慧僧正言を出さず。且くが程默して坐し給ふとぞ見えし。香染の法服。忽ちに瓔珞細耎(ゼン)。衣となりて。肉身忽ちに變じて紫磨黃金の膚となり。赫奕たる大光明十方に遍く照す。されば南庭の冬木俄に花開きて。恰も春二三月の東風に繽紛たるに異ならず。列座の三公九卿も。知らず卽身を替へず。蓮華藏世界の土に至り。妙雲如來の下に來るかとぞ覺えける。爰に仲算少し欺きける氣色にて。如意を揚げ席を敲きて云はく。止みなん〳〵說くを須ひず。我が法妙思ひ難しと誦し給ふ。此の時慈慧僧正の大光明忽ちに消えて。本の姿になり給ひけり。是を見て藤氏一家の卿相雲客は。我が氏寺の法相宗こそ勝れたれと。我慢の心を起して退出し給ひける處に。門外に繫がれたる牛。舌を低れて涎を唐居敷に殘せるを見給へば。慥に一首の歌にてぞありける。

草も木も佛となると聞く時はこゝろある身の賴もしきかな

是れ則ち草木成佛の證歌なり。春日大明神の示し給ひけるにや。何れを勝劣とも定め難し。理なる哉仲算は千手の化身。慈慧は如意輪の變化なり。されば智辨言語何れもなじかは劣るべき。唯雲間の陸士龍。日下の荀鳴鶴が相逢ふ時の如くなり。然れば法相は六家の長者たるべし。天臺は諸宗の最頂なりと宣下せられ。共に眉目をぞ開きける。

（太平記）

紀貫之女

和歌を善くす。天曆中淸涼殿の梅樹枯る。帝他の樹の移し植うべきものを求めて女の家に得たり。女歌を作りてその梅に繫け。天聽に達す。事編中

紀貫之女

に詳なり。

鶯宿梅……藤原爲憲

いとをかしう哀に侍りし事は。此の天暦の御時に。清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば。求めさせ給ひしに。何某の主の藏人にていますかりし時承りて。若き者どもはえ見知らじ。汝求めよと宣ひしかば。一京罷り歩きしかども侍らざりしに。西の京のそこそこなる家に。色濃く咲きたる木の樣。體美しきが侍りしを掘り取りしかば。家主の。木に此結ひ著け候ひて持て參れと云はせ給ひしかば。あるやうはこそはとて持て參りて候ひしを。何ぞとて御覽じければ。女の手にて書きて侍りける。

勅なればいとも畏し鶯の宿はと問はゞいかゞ答へむ

とありけるに。怪しく思し召されて。何者の家ぞと尋ねさせ給ひければ。貫之のぬしの御女の住む所なりけり。遺恨の業をもしたりけるかなとて。あまえおはしましける。

（大鏡）

空也上人

六波羅密寺の開山。光勝字は空也。一に弘也に作る。毎夜阿彌陀佛の名號をとなへて市廛の間を巡回す。後世の鉢叩念佛は上人より起るといふ。天祿三年寂す。年七十七。

松尾明神……作者不詳

上人雲林院に住ませ給ひけるが。十月の頃。大宮の大路を南へ。念佛唱へ。過ぎ給ひけるに。途中に白髮の老翁。實に寒愁の氣色にて。上人の袖に立ちそひ給ふ。上人何者ぞと問ひ給へば、是は松尾明神といひ侍る神なり。衆生濟度のおもひふかく。本覺眞如の妙體を忘れ。此の國に跡を垂れし以來。財施の食。綾羅の衣は。自ら手向くる人あれども。本意の如く眞の道に入りて。眞實の法施を捧ぐる人無ければ。慈悲忍辱の衣破れて。法喜禪悅の味ひ受け難し。是に仍つて。妄想顚倒の風は。忉字の衣裏に烈し。惡業煩惱の霜は。烏瑟の髻珠に厚し。上人願はくは。法華の衣を授け給へと

ありければ。上人ありがたく思召し。念佛を唱へ。衣を脱いで云はく。此の衣を著て行住坐臥に法華よむこと四十年。其の妙香薫じて皆衣にそむるなりと宣ひて。御衣を明神に與へ給へば。神悦び受け取りて。則ち著しまし〳〵て。今は法華の衣を著て。苦を遁れ溫かになりぬ。則ち松尾へ歸社いたし。あれにて待ち申さんと宣ひて。御姿かき消すやうに見え給はず。良(さ)有りて上人松尾へ參社有り。念佛を唱へ給へば。明神出現して御對面あり。師弟の御契約をなして。御衣を内陣に納め。俱に合掌して。手を屢〻とり。又念佛を申し給ふ事しば〳〵なり。誠にかんたん肝に銘ずるばかりなり。神これを悦び。御前の鰐口と太鼓を布施に上人に與へ。末世の衆生利益の爲に此の太鼓をたゝき。念佛を勤め給ふべし。此の報謝には。上人念佛あらん限りは。影の形に隨ふ如く守護し申さんと宣ひて。内陣へ入らせ給ふ。上人歡喜限りなし。それより。國々在々所々に入りて。毎月齋日毎に。太鼓。鐘をたゝき。念佛唱へ。衆生を勸め給ひて。往生する人のある時は。太鼓。鐘をたゝきて念佛を申し。有緣。無緣の弔をなし給ふなり。是に依つて。俗呼んで六齋念佛といひ傳へたり。それより毎年。松尾御神前に於て氏子集り。六齋念佛を勤め。神慮をすゞしめ奉る。（空也上人繪詞傳）

源博雅

兵部卿克明親王の子。博雅三位といふ。官皇太后權太夫に至りて天元三年九月薨ず。年六十二。

樂の聲

……豐原統秋

博雅卿は。上古に優れたる管絃者なりけり。生れ侍りける時。天に音樂の聲聞えたり。其の頃。東山に聖心上人と云ふ人ありけり。天を聞くに微妙の音樂あり。笛二笙二箏琵琶各一聞えたり。世間の樂にも似ず不思議に目出たかりければ。上人怪みて。菴室を出でゝ樂の聲に隨きて行きければ。博雅の生るゝ所に至りにけり。生れ畢りて樂の聲は留りぬ。上人他人に語ることなし。數日を經て又彼の所へ向ひて。其の生兒の母に此の瑞相を語るとなむ。彼の卿は。子息二人ありけり。一人は信義。笛の上手なり。一人は信明。琵琶の上手なりけりとなり。（體源抄）

鬼の笛……同

博雅三位。月明かりける夜。直衣にて朱雀門の前にて遊ひて。終夜(ヒネモス)笛を吹かれける に。同じ態なる人來て笛を吹きけり。誰ならむと思ふ程に。其の笛の音。此の世に類(タグヒ) なくめでたく聞えければ、怪しくて近寄りて見れば。未だ見ぬ人なりけり。我も物言 はず。彼も言ふことなし。此の如く夜毎に行き會ひ吹く事よごろになりぬ。彼の人の 笛の音。殊にめでたかりければ。試に彼を取り替へて吹きけるに。世になき程の笛な り。其の後。なほ月の頃は行き會ひて吹きけれど。本笛を返し取らむとも言はざりけ れば。やがて永く替へて止みにけり。三位亡せて後。帝此の笛を召して。時の笛吹共 に吹かせられければ。其の聲吹き現す人なかりけり。其の後。淨藏と云ふめでたき笛 吹ありけり。召して吹かせられけるに。三位に劣らざりければ。帝感じ給ひて。此の 笛の主。朱雀門の邊にて持たりけるとこそ聞け。淨藏彼の處に行きて吹けと仰せられ ければ。月の夜。彼處に行きて此の笛を吹きければ。樓門の上に高く大なる聲にて。 なほ一物かなと讃めけるを。斯くと奏しければ。始めて鬼の笛と知しめしてけり。葉 二と名づけて天下第一の笛なり。其の後傳へて御堂入道殿(道長)の御物になりてける を。宇治殿(頼通)平等院を造らせ給ひける時。御經藏に納められにけり。此の笛に葉 二つあり。一は赤く一は青し。朝毎に露置くと云ひ傳へたれば。京極殿(師實)御覽じ ける時は。赤葉落ちて露置かざりけりと。富家入道殿(忠實)語らせ給ひけるとぞ。

(體源抄)

篳篥……同

博雅三位の家に盜人入りて。物を取りけり。其の間。三位物の下に隱れにけり。盜 人去りて後やわら出でて。置物の厨子を探るに。篳篥殘れり。是を取りて吹くに。盜 人遙に之を聞きて。心に感じて涙下りければ。哀みに堪へず覺ゆるとて。取る所の物 を返し置きて去り畢んぬと云へり。此の事を思ふに。其の功入すれば必ず其の德ある べし。

(體源抄)

源順

左馬允擧の子。梨壺五人の一。官能登守に至る。永觀元年卒す。年七十三。

傳……橋本寧

源順。字は具瀋。大納言定の曾孫。左馬允擧の子なり。能く詩文を屬し。兼て和歌に達す。天曆五年。帝順及び大中臣能宣。清原元輔。紀時文。坂上望城に勅し。昭陽舍に就き。後撰和歌集を選ばしむ。世に之を梨壺の五人と謂ふ。又藤原伊尹を以て撰和歌所の別當と爲す。伊尹時に歳人左近衛少將と爲る。帝勅旨を手書して之に賜ふ。順制詞を行る。中に雄劍在レ腰。拔則秋霜三尺。雌黄自レ口。吟又寒玉一聲の句有り。時人焉を稱す。順官途沈滯。憂鬱間文辭に見る。嘗て河原院賦を作り。源融の奢侈を刺りて曰く。彊吳滅兮有二荆棘一。姑蘇臺之露穰々。暴秦衰兮無二虎狼一。咸陽宮之煙片々たりと。仕へて能登守に至る。永觀元年卒す。年七十三。著に和名類聚鈔十卷あり。

（瓊矛餘滴）

慈慧大師

名は良源。俗姓木津氏。近江の人。十二歳叡山に登り。十七歳にして出家す。天元四年大僧正となる。永觀四年寂す。年七十四。

龍鳳の侶……覺運僧正

承平七年。興福寺の維摩會の講師基增に隨ひて彼の寺に行向す。時に勅使左中辨藤原右衡議して曰はく。講匠は臺山の耆德なり。伴ふ所の威儀僧は又龍鳳の侶なり。當時の學徒は是れ鶩子の才なり。請ふ各の雄辯を決し。宜しく佛法の沖旨を明にすべしと。玆に因つて南北の學徒各四人を抽んづ。和尚は卽ち其の一人なり。當初南都に義昭法師といふ者有り。學中の英傑なり。辯論の道古今類希なり。和尚と義昭と。諸人僉議して第一番と爲す。義昭一鶚の才に誇り。獨步の心有つて謂つて云はく。我年臘共に長けたり。少僧と論難すべからずと。時に仁數都學道の長たり。人を知るの鑒ありて時輩に稱せられ。廉直の性皎月の如くなること有り。私に義公を招いて呼（クチツキ）を辟（カタム）

けて告げて曰はく。良公(慈慧)は當時の俊才なり。將來必ず國寶と爲るべし。推して一雙と爲すこと最も其宜しきを得たりと。義昭忽ち仁僧都の詞に應じて更に辯論の脣に嚬る。問答の旨玄又玄なり。和尚論談の席を覩るに。南都の惡僧頭を裏み杖を横へ。之を行路に邀りて皆曰ふ。義公は南都の偉器なり。汝何してか相敵せん矣。天階るべからずとは蓋し此の謂歟。若し詞語明ならざれば理趣盡きざらん。則ち將に杖木を加へて止足の分を知らしめんと。和尚の懸河の詞を聞くに及んで。暴侶咸路畔に跪いて。杖を投げ叉手して還つて前過を悔ゆ。右衡歸洛の後大相國府に詣で。和尚の才辯を歎美せり。其の後嘉聲播揚して天下を鼓動す。受法の師覺慧律師。相府に於て功德を修す焉。伴僧の中に和尚の名あり。相國命じて云はく。是は維摩の會場に名譽を振ひし者乎。今相遇ふことを得て羨ふ所足れりと。結願の日諸僧退出す。相國獨り和尚を留めて深く來緣を結べり。

（慈慧大師傳）

法華講……同

應和三年癸亥秋八月。清涼殿に於て法華講を設くるもの五日。南北二十の名德を召して朝夕の二座を分つ。第二日の夕座に至つて。法藏導師と爲り覺慶問者たり。藏は定性二乘不成佛の義を立つ。詞辯瀉を建すが如し。慶窒礙して辯ぜず。師は第三の朝導なり。慶屈せしを聞して齒を咬んで出づ。慶に代つて無一不成佛の旨を演ぶ。天顏午に喜色を生じ給ふ。春日の神豫め藏に告げて宣はく。無といふは二乘を指す。一といふは唯獨の義なりと。故に其の論互に屈せず。詞林花新に義天月朗なり。問難往反既に昏夜に入る。藏の曰はく。決擇坐久うして稍更の深くるに至る。明日朝座に必ず理窟を決せんと。其明日朝導に居す。問者は平州なり。而も師昨夕の問に代つて又義未だ竟へず。藏問者と爲り。平州分無し。君臣耳を清めて俟つ。詞義前日に邁ぐ。藏の曰はく。子が辯富樓那に似たり。我豈に當るべけんや。

（慈慧大師傳）

梵篋利劍……同

玆の山(比叡山)は。蓋し傳教一實を覆すと雖も。覺(慈覺)に至つて千仞と成る。衆も亦三千に滿つ。正には則ち顯を學び。傍には則ち密を修す。手弓矢を觸れざるものの比々之有り。師(慈慧)此基を修して自ら謂へり。時像季に及んで。聲聞の輩。緣覺の

竹。鬱として林を成し滋蔓して圖り難し。蔓草だも猶除くべからず。況んや二乘をや。苟も弓を韆(ノクロ)にし矢を矰(ヤナグ)にせば。則ち正法をして世に住せしむることを得ず。經に云はずや。文珠の三昧耶身に二種有り。一は利劍二は梵篋。梵篋は智慧の德。利劍は利智の用なり。又修記に云はく。地結の上に金剛牆有り。牆の内に大乳海有り。海の中に寶山有り。山の上に寶師子の座有り。座の上に寶蓮華有り。花の上に寶樓閣有り。閣の中に八葉の大蓮花有り。蓮花の上に月輪有り。輪の内に阿字有り。字變じて利劍と成り。劍變じて文珠と成る。文珠は八不中道の利劍を以て諸の戲論を截る。故に什師(羅什)翻經の砌にしては。證を筆頭に作し。呂氏護法の宅にしては。影を几上に現ず。是れ對治悉檀なり。吾が徒として學ぶ所は。皆梵篋にして中道に非ること無し。加ふるに利劍を以てせば。則ち豈に百千の活文珠に非ずやと。各弓劍を帶すること此に始れり。

（慈恵大師傳）

兼明親王

延喜十四年生る。前中書王と稱せらる。著述多し。永延元年薨ず。年七十四。

傳……林讀耕子

兼明は醍醐天皇の子第二の源氏なり。承平二年正月。從四位上に敍ぜられ。天慶二年二月。右中將に任ぜられ。五年三月。左中將に任ぜられ。七年四月參議に任ぜられ。九年十一月從三位に敍せらる。天曆七年權中納言に任じ近江の守を兼ね。十年正月正三位に敍せらる。應和二年八月左兵衞の督を兼ね。康保四年正月權大納言に任じ。十月從二位に敍し。天祿二年十二月左大臣に任じ。勅して帶劍を授けらる。天延二年二月。輦車を聽さる。三年八月。兼明龜山の神を祭り。自ら祭文を作る。貞元二年四月。勅有つて親王と爲し二品に敍せらる。兼明元是れ皇子。且つ博學多才なり。年既に高くして官最も貴し。故の關白太政大臣藤原の兼道之れを娟疾し。其の勢威の已に超ゆることを憚つて奏して以つて此に及ぶ。陽に之を貴ぶ而已。兼明焉を鬱陶として。乃ち菟裘の賦を作る。其序に曰く。余龜山の下。聊幽居を卜す。官を辭し身を休め老を此に終らんと欲す。草堂の漸く成るに逮んで。政を執る者の爲に。枉げて陷しいれらる。君昏く臣諛うて愬ふるに處無し。命なり天なり。後代の俗士必ず吾を罪するに其

の宿志を遂げざるを以てせん。然れども魯隱の蒐裘の地を營して老いんと欲する。公子翬が爲に害せらる。春秋の義。其の志を贊成して。以つて賢君と爲す。後來の君子。若し吾を知る者有らば。之を隱すこと無からん。因つて賈生が鵩鳥の賦に擬し。蒐裘の賦を作つて以つて自ら廣む。其詞に曰く。

赤奮若の歲。清和の月。彼の西山に陟つて。言に其蕨を採る。鵩の賦を吟じて夕に惕れ。蒐裘を顧みて朝に發す。昔隱公の害に逢へるや。誠に天の魯を棄つるに在り。今我が不肖なる。何ぞ世の顯越に遭へる。天其れ何をか言ふや。四時行はれ百物成る。之を問へども言はず。請ふ對するに情を以てせん。惟天高うして地廣し。上始まり無く下極り無し。萬物云に生ず。或は消し或は息む。風雨陶冶し。寒暑廻轉し。千變萬化何の常則か有らん。禍福相須ち。憂喜定らず。榮枯同枝にして。歌哭同徑なり。下人事を學び。上天命を達す。憂へず喜ばず。其れ唯上聖か。伯夷仁を得て飢え。彼れ其れを奈んともすること無し。盜跖壽を以て終ふ。是れ亦若爲。箕子囚繫せられ。比干傷夷せらる。天の善に與みする。其れ信に未だ知らず。故に柳下三び黜けられて悔いず。子仲長く往いて歸ること無し。況や

今趙高鹿を指すの日にして梁冀跋扈の時なり。虎にして冠す。當理の謂ふ可きに非ず。梟や鏡す。寧ろ彝倫の資る所ならんや。夫劍戟は柔に嫌つて。剛にして摧折するを嫌はず。梁棟は直を取つて撓みて傾危する。取らず。往哲舉措。磷緇有る無し。其離を歎らず。漁父が誨に孤くと雖。容れざる何ぞ病まん。顏子の詞を祖とす可し。亦夫れ世に治亂有り。時に否泰有り。命に通塞有り。迹に顯晦有り。扶桑豈に影無からんや。浮雲掩うて乍ち昏く。叢蘭豈に芳しからざらんや。秋風吹いて先づ敗る。彼の尼父の一望するや。龜山の魯を蔽すを歎ず。靈均が五び顧るや。沅湘を繞つて楚を傷む。明訓を先賢に問はんと欲す。以て幽致を萬古に鑑みる。唐風移ると雖。猶舊の依稀たるがごとし。漢德縱厭くも。安んぞ新に詔訣せん。殊に恨むらくは王風の競はず。直道の已に湮ることを。淫蛙を聞きて長く歎じ。屈蠖の伸びざるを悲む。河の清日を俟つ。浮雲幾く春ぞ。凡そ人の世に在るや。殆ど花上の露なり。空中の雲の如し。去留常無く。生滅定らず。聚散相紛れ。汹穆糺錯す。何んぞ勝げて云ふ可けんや。語らず言ふこと薩し。便ち是れ淨名翁が病なり。知る者は默す。寧玄元氏の文に非ずや。馬を喪ふの老。倚伏を秋草に委す。

蝶を夢みるの翁。是非を春叢に任す。冥々の理。適も無く莫も無し。如々の義。有に非ず空に非ず。嗟乎文王早く歿したり。吾何くにか隨はん。已んぬるかな〳〵。命の衰へたるや。吾將に龜緒の嚴隈に入り。蒐裘に歸つて去來せん。

是の年十二月中務の卿に任ず。時の人中書大王と稱す。兼明の母は參議藤原の菅根の女なり。俶姬と名づく。延喜帝の中。櫛を奉ること三十餘歲。曾て帝城の西北に於て。聊閑地を卜し。道場を建立するに意有つて未だ成らず。疾に臨むに及んで兼明を誡めて云く。必ず此の願を遂げよと。故に兼明其の遺敎に因つて爲に伽藍を起す。觀音寺と號す。乃ち狀を獻じて私稻三千束を以つて之に充て給することを請ふ。京畿の間觀音寺と號する。其數繁多なり。故に兼明星霜の推移名字相錯らんことを恐る。因つて寺の名を改めて施無畏と爲す。鐘を鑄つて銘を作る。奏請して以つて定額寺と爲す。私稻三千束を以つて之に充て給す。兼明著述少なからず。一條の院永延元年九月二十六日薨ず。年七十四。而して後村上帝の子具平。親王と爲る。中務卿に任ず。亦是れ博學文を屬す。是を以て。世稱して兼明を前中書王と爲し。具平を稱して後中書王と爲せり。

（本朝逸史）

能因法師

歌人なり。遠江守忠望の子。本名を橘永愷といふ。文章生なり。歌道を藤原長能に學び。削髮して能因といふ。著す所。玄々集八十島記等あり。

雨乞の歌……源俊頼

實綱が伊豫守にて侍りけるに。歌好む者にて。能因法師を具して伊豫に下りて侍りけるに。其の年の春。世の中旱して如何にも雨降らざりける。其の中にも。伊豫國は殊の外に旱けて。國内に水絶えて。飲みなどするだになかりければ。水に飢えて死ぬる者數多ありけり。守實綱歎き思ひて祈り騷ぎけれど。如何にも驗も見えざりければ。思ひ煩ひて。能因法師に。神は歌に感じさせ給ふものなり。三島明神に歌詠みて參らせて雨祈れと申しければ。殊に潔め參りて。色々の御幣に書き付けて。社に參りて伏し拜みける程に。俄に曇りふたがりて。大雨降りて堪へ難きまで歌ます。

天の川苗代水に堰きくだせ天降ります神ならば神

其の後三日許をやみもぜず降りて。後には四五日許に一度降りて。國の内思ふさまにぞなりにける。世の末なれど。神は尙歌をば捨てさせ給はぬとぞ實綱申しける。

（後秘抄）

伊勢が結べる松……同

能因法師は。歌を含嗽してぞ口すさびける。草子などをも。手を洗ひてぞ取りて廣げゝる。唯うちするかと思ひけれど。讃岐の前司兼房と申す人の。能因を車の後に乘せて物へ罷りけるに。二條と東の洞院とは伊勢が家にてありけるに。子の日の小松のありけるを。尖を引き結びて植ゑたりけるが。生ひつきて實に大なる松にて近うまでありしが。梢の見えければ。能因車の後より惑ひ下りければ。兼房の卿。心も得で。如何なる事ぞと尋ねければ。此の松の木は。高名の歌讀の伊勢が結べる松には候はずや。其が前をば。如何でか車に乘りながら過ぎ侍らむと云ひて。遙に徒より歩みて。梢の隱るゝ程になりてこそは車には乘りけれ。

（後秘抄）

和泉式部

歌人なり。小式部内侍の母。道長に召されて上東門院に仕へ。才藻あり。唯其の素行に至つては世の誹議を免かれず。

法の燈……淺井了意

和泉式部は。太宰の大貳高遠が孫。筑前守助高が女。母は越中守保衡が女なり。上東門院の女房として召し仕はれける。後に和泉守道貞が妻となれり。此の故に和泉式部と名づく。拾遺和歌集には。雅致が女式部と書きたり。是和泉式部なり。智辨勝れたる女房にて。學問能く勤め。歌の道堪能なり。上東門院或時播磨の書寫に參詣し給ふ事あり。性空上人は六根淨の聖にて。前の日より此の事を知り給ひ。同宿の僧に仰せけるは。明日は此の山に貴人共の來るべきぞ。我は此の寺になしと申せとて。引籠りておはしけるに。上東門院參らせ給ひしを。弟子の僧見奉り。上人の仰せし貴人とは是なるべし。實にも佛道修行の道心を醒さするものは女なり。顏容美しう繕ひ出

で立ちたる。皆是人を誑かし心を亂す程なれば。發心修行の人の爲には鬼神ぞかし。あな恐ろしと思ひて。上人唯今はさる方に參らせ給ひて。寺にはおはせずと云ふ。上東門院遙々思ひ立ちて參らせ給ひしに。御殘多くもおはしますとて。泣く泣く御車に召して御下向あり。和泉式部御供に詣でけるが。御堂の柱に斯くぞ詠みて書き付けゝる。

暗きより暗き道にぞ入りにける遙に照らせ山の端の月

上人立ち出で見送り給ふが。此の歌を見て。限なく感じつゝ。呼び返し奉りて。

日は入りて月まだ出でぬたそがれに掲げて照らす法の燈

と詠み給ひて。樣々法文ども說きて御敎化ありけるとなり。釋迦を日に喩へ彌勒を月に准へ。二佛の中間に人を導く所。御法の燈にあらずんば。迷の暗は如何でか照すべき。實に有り難き歌にこそ。式部が歌は拾遺和歌集に入れられたり。此の頃にや。小式部內侍世を早うせしかば。母の式部歎に沈みけるを。上東門院哀れがらせ給ひ。御衣脫ぎ式部に賜はせ給ふに。斯くぞ詠みける。

諸共に苔の下には朽ちずして埋もれぬ名を聞くぞ悲しき

と詠みて涙を流す。是より世の常なきことを思ひ知りつゝ。誓願寺の如來に歩を運び。後世を求めて浮世を厭ひしが。後には庵室をしつらひ引き籠りけり。東北院は其の舊跡なり。

（本朝女鑑）

小式部內侍

歌人なり。橘時貞の子。母は和泉式部。母に先ちて歿せり。

丹後の使……源俊頼

大江山生野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

是は小式部の內侍と云へる人の歌なり。事の起は。小式部の內侍は和泉式部が女なり。其の和泉式部が保昌が妻にて丹後の國に下りけるほど。京に歌合のありけるに。小式部の內侍歌讀に取られて讀みける程に。四條中納言定賴と云へるは。四條大納言公任の子なり。其の人戯れて。小式部の內侍のありけるに。丹後へ遣しゝ人は參りたりや。如何に心もとなく思すらむと妬がらせむとて申して立ちければ。內侍御簾より

半すき出でゝ。僅に直衣の端袖を控へて。此の歌を詠みかけゝれば。中納言。此は如何に斯るやうやはあるとて突い居て。此の歌返しせむとて。暫し思ひけれど。え思ひ得ざりければ。引き外して逃げにけり。是を思へば。心疾く詠めるもめでたし。

（後秘抄）

紫式部

式部丞藤原爲時の女にして右衞門權佐藤原宣孝の妻となる。上東門院に仕へ。和歌に巧に。朝典に通ず。其著源氏物語世に稱せらる。正暦三年卒す。

七事共具……安藤爲章

父爲時は。菅三品（文時卿）の弟子にて。高名の學者。又歌をも讀みて。集にも撰ばれたり。是を父として生れ（其一）。兄惟規も後拾遺より始めて末の集にも入りたる歌人なり。それが物習ひつゝおそく讀み取り且忘るゝ所をも。式部は怪しきまで悟りしを見れば。聰明自ら神童なりけらし（其二）。幼き程に賢しきとても。女は學問遂げ難きものなるを。彼の學窓のさまを思ふに。うち續き和漢の積書を讀み。音樂以下の業に怠らざりしと見ゆ。千載集に云ふ。上東門院に侍りけるを里に出でける頃。女房の消息の次に。箏傳へに參でむと云ひて侍りければ遣しける。

露しけき蓬のもとの蟲の音をおぼろげにてや人の尋ねむ

此の箏の傳授にても。其の樂才推し量るべし（其三）。禁裏。院中。中宮。東宮。親王。攝家の御方に參り遊びて。元日節會より始めて追儺に至るまで。恒例。臨時。一年の公事。或は歌合。繪合。香合。蹴鞠など。優美なる事の限に其の眼肥えたり（其四）。時代も餘り上つ方ならず。又衰世たらず。中葉にして文質かねたる世に生れたり（其五）。須磨。明石。住吉。難波。泊瀬。石山。宇治。大原野。嵯峨野。西川。東川。江口。神崎の邊。小野の奥。鞍馬の谷。比叡の山。鳩の峯など。女にては餘あるまで名所舊跡を歷遊したりと見ゆ。是皆才氣の助となれり。彼の鹽津山にて詠める歌は。父が任國へ下りたる時などの作なるべし（續古今集に云ふ。鹽津山と云ふ道を行くに。賤の男のいと怪しき態して。なほ辛き道かなと云ふを聞きて讀める。紫式部。知りぬらむ往來にならす鹽津山よにある道はかからきものぞと。鹽津山は近江淺井郡なり）玉

葛の卷に常陸の事を書けるは。外祖常陸介爲信或は母の物語などを聞きたるにや（其六）。一部の意と詞と。男にては斯く濃かならぬものなるを。女なれば。男の思ひよらぬ事まで筆を渉したり。女にても。上の品なる人は下ざまの業を知り給はず。まして下のきざみは如何上を思ひ及ばむや。式部たまたま中の品に生れて。思ひ至らぬ隈なし（其七）。是等を兼備したる式部なれば。彼の石山の冥助を假らずとも。自然此の物語出で來なまし。觀音菩薩を思ひかくるも。後人の臆說にして。式部を知らざるものと云ふべし。右の七事うち合ひたる人は。をさをさ有り難ければ。前後に。此の物語程の物見えざるも道理になむ。

（紫女七論）

眞名書……紫式部

風の涼しき夕暮。聞きよからぬ琴を獨搔き鳴しては。嘆加はると聞き知る人やあらむとゆゝしくなど覺え侍るこそ。をこにも哀にも侍りけれ。さるは怪しう黑み煤けたる曹司に。箏の琴和琴調べながら。心に入れて。雨降る日。琴柱倒せなども云ひ侍らぬまゝに。塵積りて寄せ立てたりし厨子と柱の狹間に首さし入れつゝ。琵琶も左右に立て侍り。大きなる厨子一具に隙もなく積みて侍るもの。一つにはふる歌物語のえも云はず蟲の巢になり渡る。むつかしく這ひ散れば。開けて見る人も侍らず。片つ方に書ども態と置き重ねし人（宣孝）も侍らずなりにし後。手觸るゝ人も。殊になし。其等を徒然せめて餘りぬる時。一つ二つ引き出でゝ見侍るを。女房集りて。お前は斯くおはすれど。御幸福は少きなり。なでふ女が眞名書は讀む。昔は經讀むをだに人は制しきと後言云ふを聞き侍るにも。物忌みける人の行末命長かるめるよしとも見えぬ例なりと云はまほしく侍れば。思隈なきやうなり。

（紫式部日記）

日本紀の御局……同

內の上（一條）の源氏の物語人に讀ませ給ひつゝ聞しめしけるに。此の人は日本紀をこそ讀み給へけれ。眞に才あるべしと宣はせけるを。ふと推量に。いみじうなむ才かあると殿上人などに云ひ散らして。日本紀の御局とぞ命けたりける。いとをかしくぞ侍る。此の故里の女の前にてだに包み侍るものを。さる所にて才さがし出で侍らむよ。此の式部丞（惟規）と云ふ人の。童にて史記と云ふ書讀み侍りし時聞き習ひつゝ。彼の

人は遅う讀み取り忘るゝ所をも怪しきまでぞ諭し侍りしかば。書に心入りたる親（爲時）は。口惜しう男子にて持たらぬこそ幸福なかりけれとぞ常に歎かれ侍りし。其を男だに才がりぬる人は如何にぞや。華やかならずのみ侍るめるよと漸う人の云ふも聞き止めて後。一と云ふ文字をだに書き渡し侍らず。いと手筒に淺ましく侍り。讀みし書など云ひけむもの。目にも留めずなりて侍りしに。彌〻斯る事聞き侍りしかば。如何に人も傳へ聞きて憎むらむと恥かしさに。御屏風の紙に書きたる事をだに讀まぬ顔をし侍りしを。宮の御前にて文集の所々讀ませ給ひなどして。さる態のこと知しめさせまほしけに覺えたりしかば。いと忍びて人の侍はぬものゝ隙々に。一昨年（寛弘四）の夏頃より。樂府と云ふ書二卷をぞしどけなくかう教へ。堪へ聞えさせて侍るも隱し侍り。宮も忍びさせ給ひしかど。殿も内も氣色を知らせ給ひて。御文ともを感でたう書かせ給ひてぞ殿は奉らせ給ふ。實にかう讀ませ給ひなどすること。將彼の物いひの内侍はえ聞かざるべし。

（紫式部日記）

叩く水雞……同

源氏の物語御前にあるを殿（道長）の御覽じて。例の漫事ども出で來たる序に。梅の枝に敷かれたる紙に書かせ給へる。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ

賜はせたれば。

人にまだ折られぬものを誰か此のすきものぞとは口ならしけむ

目ざましうと聞ゆ。渡殿に寢たる夜。戸を叩く人（道長）ありと聞けど。怖ろしさに音もせで明したる翌朝。

夜もすがら水鷄よりけになくなくぞ槇の戸口に叩きわびつる

返し。

たゞならじとばかり叩く水鷄ゆゑ明けてはいかに悔しからまし（紫式部日記）

清少納言

肥後守清原元輔の女。一條帝后定子に事へて紫式部と竝稱せられ。後老いて家居し。終る所を知らず。

青　栄……作者不詳

清少納言は。一條院の位の御時宇治の關白(頼通)世を知らせ給ひける始。皇太后(定子)の時めかせ給ふ盛に侍ひ給ひて。人より優なる者とは思しめされたりける程の事どもは。枕草子と云ふ物にみづから書き著して侍れば。細に申すに及ばず。歌よみの方こそ元輔が女(ムスメ)にて。さばかりなりける程よりは勝れざりけるとかやと覺ゆる。後拾遺などにも。むげに少く入りて侍るめり。自ら思ひ知りて申し請ひて。さやうの事には交(マジ)り侍らざりけるにや。さらでは最いみじかりける者にこそあめれ。其の枕草子こそ心の程見えて最をかしう侍れ。さばかりをかしうも哀にもいみじくも感(ノ)でたくもある事共。殘らず書き記したる中に。宮(定子)のめでたく盛に時めかせ給ひし事ばかりを。身の毛も立つばかり書き出でゝ。關白殿失せ給ひ宇治の大臣(オトヾ)(伊周)流され給ひなどせし程のおとろへをば。かけても云ひ出でぬ程のいみじき心ばせなりけむ人の。はかばかしき便宜(ヨスガ)なども無かりけるにや。乳母(メノト)の子なりける者に具して。遙なる田舍に罷りて住みけるに。青栄と云ふ物ほしにとに出づとて。昔の直衣姿こそ忘れねと獨言ちけるを見侍りければ。怪しの衣著て綴(ツヾリ)と云ふ物帽子にして侍りけるこそ最哀なれ。實にいかに戀しかりけむ。

（無名草子）

したり顔……紫式部

清少納言こそしたり顔にいみじう侍りける人。さばかり賢(サカ)しだち眞字(マナ)書き散して侍る程も。能く見ればまだ最堪へぬこと多かり。斯く人に異ならむと思ひ好める人は。必ず見劣りし、行く末うたてのみ侍れば。艶(エン)になりぬる人は最すごう漫(スヾロ)なる折も物の哀にすゝみ。をかしき事も見過ぐさぬ程に。自らさるまじく徒(フダ)なる態にもなるに侍るべし。其の徒になりぬる人の終(ハテ)いかでかはよく侍らむ。斯くかたかたにつけて一節の思ひ出でとるべき事なくて過し侍りぬる人の。殊に行く末の頼もなきこそ慰め思ふ方だに侍らねど。心淒うもてなす身ぞとだに思ひ侍らじ。

（紫式部日記）

香爐峰の雪……清少納言

雪いと高く降りたるを。例ならず御格子參らせて。炭櫃に火起して。物語などして

集り侍ふに。少納言よ。香爐峯の雪は如何ならむと仰せられければ。御格子あげさせて。御簾高く巻き上げたれば。笑はせ給ふ。人々も皆さる事は知り。殿などにもさるは歌へど。思ひこそよらざりつれ。尙此の宮(定子)の人にはさるべきなめりと云ふ。

（枕草子）

柳の眉……同

三月ばかり物忌しにとて。假初なる人の家に往きたれば。木どもなどはかばかしからぬ中に。柳と云ひて例のやうになまめかしくはあらで。葉廣う見えて憎げなるを。あらぬ物なめりと云へば。斯るもありなど云ふに。

さかしらに柳の眉の廣ごりて春のおもてをふする宿かな

とこそ見えしか。

（枕草子）

駿馬の骨……參觀

清少納言零落の後。若殿上人數多同車し。彼の宅の前を渡るの間。宅の體破壞したるを見て。少納言無下にこそなりけれと車中に云ふを聞きて。本より棧敷に立ちたりけるが。簾を搔き上げ。鬼形の女法師の如き顏を指し出し云々。駿馬の骨をば買はずやありしと云々。

（古事談）

藤原佐理

敦敏の子。正曆中太宰大貳となり。正三位に敍せらる。任にありて宇佐の神人と爭ひ。爲に都に還る。兵部卿を以て卒す。年五十五。筆法に妙なり。

三島の神の額……藤原爲憲

敦敏の少將の男子佐理大貳。世の手書の上手。任果てゝ上られけるに。伊豫の國の前なる泊にて。日甚(イミ)じう荒れ。海の面惡しくて風怖ろしう吹きなどするを。少し直りて出でむとし給へば。又同じやうにのみなりぬ。斯くのみしつゝ日頃の過ぐれば。最怪しく思して物問ひ給へば。神の御祟とのみ云ふにさるべき事もなし。如何なる事にかと恐れ給ひける。夢に見え給ひけるやう。いみじう氣高き態(サマ)したる男のおはして。此

日の荒れて日頃經給ふは己がし侍る事なり。其は萬の社に額の懸りたるに己が許にしも無きが悪しければ懸けむと思ふに。なべての手して書かせむが最悪く侍れば。われに書かせ奉らむと思ふにより。此折ならでは何時かはとて停め奉りたるなりと宣ふに。誰とか申すと問ひ申し給へば。此浦の三島に侍る翁なりと宣ふに。夢の中にもいみじう畏り申すと思すに。驚き給ひては又更にも云はず。さて伊豫へ渡り給ふに。多くの日荒れつる日ともなく晴朗(ウラウラ)となりて。其方ざまに追風吹きて飛ぶが如く詣で著き給ひぬ。湯度々沐(ア)み。いみじく潔齋(ケサイ)して。淨(キヨ)まはりて。ひの裝束して。軈(ヤガ)て神の御前にて書き給ふ。社の司ども召し出でゝ打たせて。能く法の如くして歸給ふに。露恐るゝ事なくて末々の船に至るまで無事(クヒラカ)に上り給ひにき。我がする事を人間の人の感(ホ)め崇むるだに興ある事にてこそあれ。まして神の御心にさまで欲しく思しけむこそ如何に御心おごりし給ひけむ。又大概(オホカタ)これにぞ日本第一の御手の覺は此の後ぞ取り給へりしか。六波羅密寺の額も此の大貳の書き給へる。されば彼の三島の神の額と此の寺のとは同じ御手に侍り。御心ばへぞ懈怠は少し如泥人(ニヨデイジン)とも聞えつべくおはせし。故中關白殿(道隆)東三條造らせ給ひて。御障子に歌繪ども書かせ給ひし色紙形を此の大貳に書けと宣はするを。いたく人騒がしからぬ程に參りて書かれなばよかりぬべかりけるに。關白殿渡らせ給ひて。上達部殿上人などさるべき人々數多參り集ひて後に。日高く待たれ奉りて參り給へりければ。少し骨(コツ)なく思しめされど。さりとてあるべきことならねば書きて罷り出で給ふに。女の裝束(サウゾク)被けさせ給ふを。さらでもありぬべく思さるれど。捨つべき事ならねば。許多(ソコラ)の人の中を分け出でられけるなむ尙懈怠の失錯なりける。長閑なる今朝疾くもうち參りて書かれたらましかば。斯らましやはとぞ見る人も思ひ自も思したりける。無下(ムゲ)の其の道のなべての下萬などにこそ斯やうなる事はせさせ給はめと殿をも譏り申す人々ありけり。其の大貳の御女從弟(イトコ)の懐平(カネヒラ)の左衞門督の北の方にておはせしは經任君の母上。大貳に劣らず女手書にておはすめる。（大鏡）

慶滋保胤

丹波忠行の第二子。菅文時に學んで文才あり。天曆中從五位下大內記となり。長德三年歿す。性仁慈にして。愛禽獸に及ぶ。日本往生傳を著す。

傳……大江匡房

慶滋保胤は。賀茂忠行の第二子なり。累葉陰陽の家の出と雖も。獨り大成を企つ。富才にして文に工に。當時の絶倫たり。菅三品に師事す。門弟の中。已に貫首たり。天暦の末。内御書所に候す。秋風生桂枝の賦の試に獨り及科に預かる。芸閣の勞に依りて。内官に任ぜらる可かりし。而るに大業の思あるに依りて。申して近江の椽に任ぜられ。遂に方略の試を奉ず。青衫の時より。早く著作に任じ。緋袍の後も。其の官を改めず、文筆佳句。今に人口に在り。少年の時より。心に極樂を慕ふ。子息の冠笄纔に畢るに及びて。寛和二年。遂に以て入道す。〔法名寂心〕諸國を經歴して。廣く佛事を作す。若し佛像經卷あれば。必らず容止して過ぎ。禮節在すが如くす。强牛肥馬と雖も。猶涕泣して哀み。慈悲禽獸に被る。長德三年。東山如意輪寺に終る。或人夢みて曰く。衆生を利益せんが爲に。淨土より歸りて。更に娑婆に在りと。玆に澄入の漸く深きを知るのみ。

（續本朝往生傳）

感涙滂沱……作者不詳

彼の村上の中務宮（具平親王）文作らせ給ふ道など優れておはしましければ。齊名以言など云ふ博士常に參りて文作らせ給ふ御伴になむなりける。大内記保胤とて。中に優れたる博士御師にて文は習はせ給ひける。其保胤には。是等が文作り得たる所得ぬ所の有樣問はせ給ひければ。答へ申しける事こそ。唐の言の葉は知らぬ事なれど面白く聞え侍りしか。孰も孰も取々に侍るを。譬にて申し給らむとて。齊名が文作り侍る樣は。月の冴えたるに半古りたる檜皮葺の家の御簾所々はづれたる内に。女の箏の琴彈き澄したる樣になむ侍る。以言の詩は。砂子白く散したる庭の上に。櫻の花散り敷きたるに。陵王舞ひたるになむ似てぞ侍る。匡衡が樣は。武士の緋の革して緋威の鎧きたる著て。えならぬ駒の足疾きに乘りて逢坂の關を越ゆる氣色なりとぞ申しける。儲宮。足下は如何と仰せられければ。既に檳榔毛に乘り侍りにたりとぞ申侍りけるとなむ。大内記の聖はやんごとなき博士にて。文作る道類少くて世に傳へけれど。心は偏に佛の道に深く染みて哀憐の心のみありければ。大内記にて記すべき事ありて催されて内に參れりけるに。左衞門の陣などの方にや。女の泣きて立てるがありけるを。何事のあれば斯くは泣くぞと問ひければ。主人の使にて石の帶を人に借りて持て罷りつ

るが。道に落して侍れば主人にも重く戒められむずらむ。さばかりの物を失ひつる。淺ましく悲しくて歸る空もなければ。思ひ遣る方もなくて其を泣き侍るなりと申しければ。心の中推し量るに實にさぞ悲しからむとて。我がさしたる帶を解きて取らせたりければ。元の帶にはあらねども空しく失ひて申す方なからむよりも自ら罪も宜しくや侍るとて。是を持て罷らむずる嬉しさと。手を摺りて取りて罷りにけり。さて片隅に帶もなくて隱れ居たりける程に事始まりければ。遲し遲しと催されて。みくらの小舍人とかに帶を借りてぞ公事は勤められ侍りける。池亭の記とて書かれたる書にも。身は朝に在りて心は隱にありとぞ侍るなる。中務の宮の物習ひ給ひけるにも。文少し教へ奉りては目を閉ぢて佛を念じ奉りてぞ怠らず勤め給ひける。斯くて年を渉りける程に。年長けてぞ頭下して横川に上りて法文習ひ給ひけるに。增賀聖のまだ横川に住み給ひける程にて。止觀の明靜なること前代に未聞かずと讀み給ひける。此の入道たゞ泣きに泣きければ。聖斯くやはいつしか泣くべきとて拳を握りて打ち給ひければ。我も人も事苦りて立ちにけり。また程經て偖もやは侍るべき。彼の文受け奉り侍らむと申しければ。又先の如くに泣きければ。又情無く苛みければ。後の言もえ聞かで過ぐる程に。又懲りずまに御氣色取り給ひければ。又更に讀み給ふにも同じやうに最ど泣き居りければこそ。聖も涙溢して。實に深き御法の尊く覺ゆるにこそとて衰れがりて其の文靜に授け給ひけり。

（續世繼物語）

赤染衞門

赤染時用の養女。攝政道長の妻倫子に仕へ。大江匡衡に嫁す。才藻當時に傑出し。和泉式部と名を齊くせり。榮花物語を著はす。

公任の辭表……作者不詳

四條大納言（公任）寛弘二年の比。月頃怨のありて。出仕もし給はず。大納言辭退し申さむとせられけるに。匡衡を招きて。辭表を奉らむと思ふ間。時英。齊名。以言等に誂へしむと雖ども尙心に適はず。貴殿ばかりぞ書き開かれむと思ふと云はれければ。匡衡なまじひに承けとりて。家に歸りて愁歎の氣色あり。時に赤染衞門何事ぞと尋ぬるに。斯る事なり。彼の輩は才學優長なり。然るを其にも優りて書き陳べむこと極め

て有り難しと答へければ。赤染うち案じて。彼の人ゆゝしく矯飾ある人なり。我が身の先祖やんごとなき者にてありながら。沈淪の旨を書かざるか。早く此旨を書くべしと云ふ。匡衡彼の輩の草を見るに實に其の趣なり。尤然るべしとて。打立に曰はく。臣は五代の太政大臣の嫡男なり。曩祖忠仁公より以來と云ふより次第に數へあげて。我が身の沈めるよしを書きて持ちて行く所に。感歎して悅べる氣色なり。依りて是を用ゐられけり。

（十訓抄）

優なる心……源隆國

今は昔。大江匡衡が妻は赤染の時望（時用）と云ひける人の娘なり、其の腹に擧周を産ませたるなり。其の擧周勢長じて文章の道にやんごとなかりければ。公に仕うまつりて遂に和泉守になりにけり。其國に下りけるに。母の赤染をも具して行きたりけるに。擧周思ひかけず身に病を受けて日來煩ひけるに。重くなりにければ。母の赤染歎き悲みて思ひ遣る方なかりければ。住吉明神に御幣を奉らしめて。擧周が病を祈りけるに。其の御幣の串に書き付けて奉りたりける。

代らむと思ふ命は惜しからでさても別れむ程ぞ悲しき

と。其の夜遂に愈えにけり。又此の擧周が官望みける時に。母の赤染鷹司殿（倫子）にかくなむ讀みて奉りたりける。

思へ君かしらの雪をうち拂ひ消えぬさきにと急ぐ心を

と。御堂（道長）此の歌を御覽じていみじく哀れがらせ給ひて。斯く和泉守にはなさせ給へるなりけり。又此の赤染。夫の匡衡が稲荷の禰宜が女を語らひて愛し思ひける間。赤染が許に久しく來らざりければ。赤染此くなむ讀みて稲荷の禰宜が家に匡衡がありける時に遣しける。

我が宿の松はしるしもなかりけり杉むらならば尋ね來なまし

と。匡衡此を見て恥かしとや思ひけむ。赤染が許に返りてなむ棲みて。稲荷の禰宜が許には通はずなりにけりとなむ。

（今昔物語）

增賀上人

橘恒平の子。幼にして天臺山に上り慈慧大師に就き學ぶ。冷泉上皇供奉に

加へむとす。辭して奉ぜず。佯狂して去る。長保五年寂す。年八十七。

樂しの身や……西行法師

昔。增賀聖人といふ人いまそかりけり。いとけなかりけるより道心高くて。天台山の根本中堂に千夜籠りてこれを祈り給ひけれども。なほ實の心や付きかねて侍りけん。ある時たゞ一人伊勢大神宮に詣でゝ祈請し給ひけるに。夢に見たまふやう。道心を發さんと思はゞ。この身を身とな思ひそと。示現を蒙りたまひけり。うち驚きて仰すやう。名利を捨てよとにこそ侍るなれ。さらば捨てよとて。著たまひける小袖衣みな乞食どもに脱ぎくれて。ひとへなる物をだにも身にかけ給はず。赤はだかにて下向したまひけり。見る人不思議の思をなして。物にくるふにこそ。見めさまなどのいみじきに。うたてやなどいひつゝ。うちかこみ見侍れども。露心もはたらき侍らざりけり。道々物を云ひつゝ。四日といふに山へ登り。本住み給ひける慈慧大師の御室に入り給ひければ。宰相公の物に狂ふとて見る同朋もあり。又かはゆしとて見ぬ人も侍りけるとかや。師匠の大師ひそかに招き入れて。名利を捨て給ふとは知り侍りぬ。但かくまでの振舞侍らじ。いや只威儀を正して。心に名利をはなれ給へかしといさめ給ひけれども。名利をながく捨てはてなん後はさにこそ侍るべけれとて。あら樂しの身や。おうおうとて立ち走り給ひければ。大師も門の外に出で給ひて。はるゞ見送り侍りて。すゞろに涙を流し給ひけり。增賀は遂に。大和國多武嶺といふ所にさすらへ入りて。智朗禪師の庵のかたばかり殘りけるにぞ。居をしめ給へりける。げにもうたてしきものは名利の二なり。正しく貪瞋痴の三毒より事起りて。この身を實ある物と思ひて。これを助けんためにそこばくのいつはりを構ゆるにや。武勇の家に生まるゝものは。胡籙(ヤナグヒ)の矢を早くつがひ。三尺の劍を抜きて。一陣を懸けて命を失ふも名利勝他のためなり。柳の黛細くかき。蘭麝を衣にうつし。秋風の名殘を送る姿ともてあつかふも名利の二に過ぎず。又墨染の形に身をやつし。念珠を手にくるも。所詮は貝人に歸依せられて世を過ぎんとのはかりごと。或は極位極官を極めて。公家の梵筵に到り。三千の禪徒にいつかれんと思へるも。名利の二をはなれず。この理を知らざるたぐひは申すに及ばず。唯識止觀に眼をさらし。法文の至理を辨へ侍る程の人だちの。しりながら捨て侍らで。生死の海にたゞよひ給ふぞかし。誰々もこれをもて離れんとし侍れど。

世々を經て思ひなれにし事の改めがたきに侍り。しかあるにこの增賀上人の名利の思ひをやがてふり捨て給ひけん。有りがたきには侍らずや。これまた伊勢大神宮の御助けにあらずば。いかにしてかこの心もつき侍るべきや。貪瞋痴の村雲ひきおほひ。名利のとこやみなる身のいすゞ川の浪にすゝがれて。天照大神の御光に消えぬるにこそと。返すゞ〳〵かたじけなく貴く侍り。この事いつの世に忘れたてまつるべきや。

（撰集抄）

性空上人

橘諸兄六世の裔で大中大夫善根の子。播磨の書寫山に登り、圓教寺を創し。開山となる。寛弘四年寂す。年九十八。

生身の普賢……作者不詳

書寫性空上人。生身の普賢を見奉るべきよし。寤寐に祈請したまひけるに。ある夜轉經に疲れて。脇息によりかゝりて暫しまどろみたる夢に。生身の普賢を見奉らんと思はゞ。神崎遊女の長者をみるべきよしと見て夢覺めぬ。奇異の思ひをなして。彼處に行きむかひて。長者が家におはしつきたれば。只今京より上日（ジヤウニチ）の輩とて。遊宴亂舞のほどなり。長者横座に居て。鼓を打ちて亂拍子の次第をとる。その詞にいはく。

周防むろつみの中なるみたらゐに風はふかねどさゝら波たつ

と。上人閑居して。信仰恭敬して。横目もつかはずまもり居たまへり。その時忽ちに普賢菩薩の形に現じ。六牙の白象に乘りて。眉間の光を放ちて。道俗貴賤男女をてらす。即ち微妙の音聲を、出して。實相無漏の大海に。五塵六慾の風は吹かぬとも。隨緣眞如の浪の立たぬ時なしと。感涙抑へがたくして。眼を開きてみれば。又もとの如く女人の姿となりて。周防つみの詞を出す。眼を閉づる時は。又菩薩の形と現じて法門を演べたまふ。此の如く度々敬禮して。泣く〳〵歸りたまふとき。長者俄に座を立ち。閑道より上人の許へ來りて。この事口外に及ぶべからずといひて。即ち俄に死す。異光空に滿ちて甚だ香し。長者の頓滅の間。遊宴の興覺めて。悲泣する事限りなし。上人ます〳〵悲涙に溺れて。歸路に惑ひけりとなん。かの長者。女人好色のたぐひなれば。誰かこれを權者の化作とは知らん。佛菩薩の悲願衆生化度の方便によりて、形を

さまぐ〜に分けてしめしたまふ。道までも賤しきにはよらざる事かやうのためしにて心得べし。

（十訓抄）

具平親王

村上帝の皇子。母は代明親王の女。庄子女王なり。二品中務卿となる。千種殿と號し。後中書王と稱す。才藝人に絶し。最も詩歌を巧にし。又書に妙なり。寛弘六年七月薨ず。年四十六。

代々の跡……北畠親房

此の天皇（村上）賢明の御譽。先皇の跡を嗣ぎ申させ給ひければ。天下安寧なる事も延喜延長の昔に異ならず。文筆諸藝を好み給ふことも變りまさりけり。萬の例には延喜天暦の二代とぞ申侍る。親王の中に具平親王（六條の宮と申す。中務卿に任じ給ひき。前に兼明親王名譽おはしき。因りて之をば後中書王と申す）。賢才文藝の方。代々の御跡を能く相繼ぎ申し給ひけり。一條の御代に萬昔を興し人を用るましましければ。此親王昇殿し給ひし日。清涼殿にて作文ありしに（中殿の作文と云ふ事是より始まる）。所貴是賢才と云ふ題を探らるゝ事あり。此の親王の定なるべし。凡諸道に明らかに佛法の方まで暗からざりけるとぞ。昔より源氏多かりしかども。此御末のみぞ今に至るまで大臣以上に至りて相繼ぎ侍る。源氏と云ふ事は。嵯峨の帝世の費を思しめして皇子皇孫に姓を賜ひて人臣となし給ふ。則ち御子の數多源氏の姓を賜はる。（中略）此親王ぞ實に才も高く德もおはしけるにや。其の子師房姓を賜はりて人臣に列せられし。才藝古に愧ぢず名望世に聞えあり。十七歳にして納言に任じ。數十年の間。朝廷の故實に練熟し。大臣大將に昇りて懸車の齡まで仕うまつらる。親王の女祇子の女王は宇治の關白の室なり。依りて此大臣をば。彼の關白の子にし給ひて。藤氏に變らず春日の社にも參り仕うまつられけりとぞ。又嬪（ヤガ）て御堂の息女に相嫁せられしかば。子孫も皆彼の外孫なり。此の故に御堂宇治をば遠祖の如くに思へり。其より以來和漢の稽古を旨とし。報國の忠節を先とする誡めあるによりてや。此の一統のみ絶えずして十餘代に及べり。

（神皇正統記）

安倍晴明

天文博士なり。父は益材。初め賀茂忠行及び其の子保憲に從ひて。陰陽推算の術を學び。奇中神の如し。從四位下に敍せられ。大膳大夫。左京大夫。播磨守等に歷任す。

早瓜……橘成季

堂御關白殿(道長)御物忌に。解脫寺僧正勸修。陰陽師晴明。醫師忠明。武士義家朝臣參籠して侍りけるに。五月一日南都より早瓜を奉りたりけるに。御物忌の中に取り入れんこと如何あるべきとて。晴明に占はせられければ。晴明占ひて。一つの瓜に毒氣候ふ由を申して一つを取り出したり。加持せられば。毒氣顯れ侍るべしと申しければ。僧正に仰せて加持せらるゝに。暫時念誦の間に。其瓜はたらき動きけり。其時忠明に毒氣治すべきよし仰せらるれば。瓜を取り廻し取り廻し見て二所に鍼を立てけり。其の瓜働かずなりにけり。義家に仰せて瓜を割らせられければ。腰刀を抜きて割りたれば。中に小蛇蟠りてありけり。鍼は蛇の左右の眼に立ちたりけり。義家何となく中を割ると見えつれども。蛇の頭を切りたりけり。名を得たる人々の擧動此の如し。ゆゆしかりける事なり。此の事孰れの日記に見えたりと云ふことを知らねども。普く申し傳へて侍り。

(古今著聞集)

道摩法師……同

御堂入道殿(道長)法成寺を作らせ給ふ時。毎日渡らせ給ふ。其頃白犬を愛して飼はせ給ひける御供に參りけり。或日門を入らせおはしますに。御前に進みて走り廻りて吠えければ。立ち止まらせ給ひて御覽ずるに。させる事なかりければ。尙歩み入らせ給ふに。犬御直衣の裾を喰ひて引止め奉れば。いかにもやうあるべしとて。榻を召して御尻を掛けて居給ひて。忽に晴明を召して仔細を仰せらるゝに。暫く睡りて思惟したる氣色にて申すやう。君を呪詛し奉る者。厭術の物を道に埋みて越えさせ奉らむと構へ侍るなり。御運やんごとなくして此犬吠え顯す所なり。犬元より小神通の物なりとて。其の所を指して掘らするに。土器を打ち合せて黃なる紙捻にて十文字に縛げた

るを掘り起してけり。解きて見るに。入りたる物はなくして朱砂にて。一文字を土器に書けり。晴明申して曰く。此術極めたる秘事なり。晴明が外知る者なし。但若し道摩法師が所爲か。其一人ぞ知るべしとて。懐紙取り出でゝ。鳥の形をゑりて。呪を唱へて投げ上ぐるに。白鷺となりて。南を指して行く。此の鳥の落ち停らむ所を厭術の者の住所と知るべしと申しければ。下部彼の白鳥の行く方を瞻りて隨きて行く間。六條坊門萬里小路河原院の舊き諸折戸の内に落ちぬ。よりて探り索むる所に。老僧一人あり。即ち搦め捕りて行方を問はる。道摩。堀川の右府(賴宗)の語らひにて術を施す由申しけれども。罪をば行はれず。本國播磨へ追ひ遣す。但し永く斯の如くの術致さゞるよし誓狀を召さる。

（古今著聞集）

惠心僧都

近江比叡山慧心院の學僧。大和葛木郡の人。名は源信。俗姓卜部。天祿中横川楞嚴院に屏居して著作に從事す。寛仁元年寂す。年七十六。

水想觀……西行法師

むかし延暦寺に。惠心の僧都といふやんごとなき人おはしけり。常に觀法を修して。我が身竝に一室を。悉く水になし給ふわざをなんし給ひける。ある時内記入道保胤。往生のさうだんせまほしくて。惠心の僧都の室におはして。常に住み給ふところをあけて見給ふに。水たゝへて僧都も見え給はねば。いかさまにもやうある事と思して出でられける時。あたりに枕のありけるを水の中へなげ入れて歸られにけり。かくて次の日。また内記入道のおはし侍りけるに。僧都對面して申されけるは。それがしが胸に。木の枕を投げ入れ給ひて。よにむつかしく侍るに。取りて給はせなんやと聞えければ。入道もゆゝしき人にてゐるまそかりければ。きのふの事よと心得て。左右におよび侍らずと答へられたれば。嬉しく侍るとて。暫く目を閉ぢておはしけるほどに。惠心の僧都の身。きえ〳〵と水になりて。一室みな水をたゝへて。波はげしく侍れど。内記入道は。いさゝかも濡れ給はずぞ侍りし。さてかの水に枕の浮きたりけるをとりて。障子よりそとへなげ出し給ひてけり。かくて暫く侍りて。また僧都出で來給ひて

けり。いと不思議に侍る。觀法成就げにゆゝしくぞ侍る。心に道心深くて。坐禪入道忘り侍らねば。火生三昧に入る時は。身よりほむらを出し。水觀に住する時には。水をわかすならひに侍る。すべて上代末代にはよるべからず。種姓の高下にも露よるまじき事に侍る。たゞ道心のみこそ。かくの如くの不思議を現ずる種にては侍れ。誰もかくは思へども。野の鹿はなれがたく。我の犬つねになれたり。あはれ。いつ實の心の發り侍らんずるやらん。

（撰集抄）

歌論……無住法師

惠心僧都は。修學の外他事なく。道心深き人なりければ。狂言綺語の徒事を憎まれけり。弟子の兒の中に。朝夕心をすまして。和歌をのみ詠ずるありけり。兒どもは。學問なんどするこそさるべき事なれ。この兒歌をのみすきて所詮なきものなり。あれ體の者あれば。餘の兒どもゝ見まなぶ。明日里へやるべしと。同宿によく〳〵申し含められけるをも知らずして。月さえて物靜かなるに。夜うちふけて緣にたち出で。手水つかふとて。彼の兒詠じて云ふ。

手にむすぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にもすむかな

僧都これを聞きて。折節といひ歌の體といひ。心肝にそみてあはれなりければ。歌は道心のしるべにもなるべきものなりけりとて。この兒をも留めて。其の後歌を詠み給ひけり。近代の集に其の歌見え侍るにや。或說には近江の湖に船のゆくを見てこの兒。

世の中をなにゝたとへん朝ぼらけこぎ行く船のあとの白波

と詠じけるを聞きて。歌をこのまれけるともいへり。先の歌は。貫之病重くして。心弱かりける時の歌。後の歌は。滿誓が歌なり。二つながら古歌を詠じたるにこそ。ともに拾遺にあり。

僧都詠じていはく。

うらやましいかなる空の月なれば心のまゝに西に行くらん

凡そ狂言綺語といひて。口業の過(トガ)に和歌を入る事は。染歌(センカ)といひて。愛情にひかれて。由なき色にそみ。むなしき詞をかざる故なり。聖教の理をものべ。無常の心をもつらねて。世緣俗緣をうすくし。名利情執をも忘れ。風花をみて世上のあだなる事を

知り。雪月を詠じて心中の潔き理をもさとらば。佛道に入るなかだち。法門を悟る便りなるべし。されば古人の佛法を行するる。必ずしもこの道をすてず。折に隨ふ述懷これ多く聞ゆ。

（沙石集）

著述……釋師錬

壯歳を過ぎて學名を忌み。横川に屏居し。專ら著述を以て己が任と爲す。所謂一乘要訣。往生要集。阿彌陀經疏。大乘對。俱舍抄。因明相違註釋等なり。臺嶺の教法此時を盛となす。笈を負ひ業を承くる者多し。時に慧心院僧都と號す。信臺宗二十七疑を作り。宋國南湖の知禮法師に問ふ。禮問書を得て嗟嘆して曰く。東域に深解の人有るかなと。乃ち答釋を造つて之を返す。風舶往來し。音問相繼ぐ。

（元享釋書）

安養尼

惠心僧都の妹。少時佛道に志し。遂に婚嫁せず。道心堅固を以て聞ゆ。

取りての後は……橘成季

横川の惠心僧都の妹安養の尼の許に强盗入りにけり。物ども皆取りて出でにければ。尼上は紙衾と云ふ物ばかりを引き著て居られたりけるに。姉なる尼の許に小尼君とてありけるが。走り參りて見ければ。小袖を一つ取り落したりけるを取りて。是を盗人取り落して侍りけり。召し奉れとて持ちて來たりければ。尼上の言はれけるは。是も取りての後は我が物とこそ思ひつらめ。主の心許さざらむ物をば如何著るべき。盗人は未だ遠くはよも行かじ。疾く疾く持ちておはしまして取らさせ給へとありければ。門の方へ走り出でゝ。やゝと呼び返して。之を落されにけり。確に奉らむと言ひければ。盗人ども立ち停りて暫し案じたる氣色にて。惡しく參りにけりとて。取りたる物どもをもさながら返し置きて歸りにけりとなむ。

（古今著聞集）

源頼光

多田滿仲の子。英武にして驍勇世に冠たり。圓融。華山。一條。三條。後安養尼　源頼光

一條の五朝に歴事し。累遷して左馬權頭となり。内昇殿を聽され。正四位下に至る。射を善くし。將略を以て世に稱せらる。治安元年卒す。

先祖の守護……源隆國

今は昔。三條院の天皇の春宮にておはしける時。東三條におはしけるに。寢殿の南面に春宮行かせ給ひけるに。西の透渡殿に殿上人二三人許候ひけり。而る間。辰巳の方なる御堂の西の檜に。狐の出で來て臥し丸びて臥せりけるに。源頼光朝臣の春宮大進に候ひけるに。此は多田の滿仲入道の子にて。極めたる兵なりければ。公も其の道に仕はせ給ひ。世にも恐れられてありける。其が其時に候ひけるに。春宮御弓と鏑目とを給ひて。彼の辰巳の檜にある狐射よと仰せ給ひければ。頼光が申すやう。更にえ射候はじ。異人は射損じて候ふとも弊くも候はず。頼光に至つては。射損じ候ひなむ。限なき恥に候ふべし。然りとて射宛て候はむに於ては。あるべき事にも候はず。若く候ひし時。おのづから鹿等に罷り合ひて。恥かしからねども射候ひしを。今は絶えて然る事も仕り候はねば。此の樣の當物などは。今は箭の落つる所も思え候はずと申して。暫く射ざる事を此く申さむ程に。逃げてや去ぬると思ふ程に。惡さは西向に居て吉く眠りて逃ぐべくもあらず。而る間まめやかに射よと責めさせ給へば。頼光辭び申し煩らひて。御弓を取りて鏑目を番ひて亦申すやう。力の及ばぬこそ仕り候はめ。此く遠き物は鏑目は重く候ふ。征箭はしゝこそ射候へ。鏑目は更にえや射付けず候ふらむ。箭の道に落ちて候はむは。射損じて候はむよりも嗚呼がましく候ふ。此は如何に仕るべき事にか候ふらむと。紐差し乍ら表の衣の袖を捲り。弓頭を少し臥せて。弓を箭束のある限り引き給ひて箭を放したれば。箭の行くも暗くて見えぬ程に。即ち狐の胸に射宛てつ。狐頭を立て轉びて逆さまに池に落ち入りぬ。力弱き御弓に重き鏑目を以て射れば。いみじく弓勢射る者なりとも。射つけずして箭は道に落つべきなり。其れに此の狐を射落しつるは稀有の事なりと。宮より始め奉りて。候ふ殿上人共も皆思ひけるに。狐は水に落ち入りて死にければ。即ち人を以て取りて棄てしめつ。後宮いみじく感ぜさせ給ひて。忽に主馬の御馬を召して頼光に給ふ。其時に頼光庭に下りて。御馬を給はりて。拜してなむ上りける。然て申しけるは。此は頼光が仕りたる箭にも候はず。先祖の恥せじとて。守護神の助けて射させ給へるなりとなむ申して罷り出でに

ける。其の後賴光親しき兄弟骨肉に會ひても。更に我が射たる箭にもあらず。此れ然るべき事なりとなむ云ひける。亦世間にも此の事聞えて。いみじく賴光をなむ讃めけるとなむ。

（今昔物語）

蜘蛛切……信濃前司行長（俗傳）

同じき年の夏の頃。賴光瘧病（ワラハヤミ）を仕出し。如何に落せども落ちずっ後には毎日に發りけり。發りぬれば。頭痛く身ほとほり。天にも著かず。地にもつかず。中に浮かれて惱まれけり。斯やうに逼迫する事三十餘日にぞ及びける。或時又大事に發りて。少し減（ヒソ）につきて醒方になりければ。四天王の者共看病しけるも。皆閑所に入りて休みけり。夜深方の事なれば。幽なる燭の影より。長七尺ばかりなる法師するすると歩み寄りて。繩を捌きて賴光につけむとす。賴光是に驚きてがばと起き。何者なれば賴光に繩をばつけむとするぞ。惡き奴かなとて。枕に立て置かれたる膝丸おつ取りて。はたと切る。四天王共聞きつけて。我も我もと走り寄り。何事にて候ふと申しければ。云々（シカジカ）とぞ宣ひける。燈臺の下を見れば。血溢（コボ）れたり。手々に火を炬して見れば。妻戸より簀子へ血溢れけり。此を追ひ行く程に。北野の後に大なる塚あり。彼の塚へ入りたりければ。卽ち塚を堀り崩して見る程に。四尺許なる山蜘蛛にてぞありける。搦めて參りたりければ。賴光。安からざることかな。是程の奴に誑かされ。三十餘日惱まさるゝこそ不思議なれ。大路に曝すべしとて。鐵の串に挿し河原に立てゝぞ置きける。是より膝丸をば蜘蛛切とぞ號しける。賴光の代より出羽守賴基の手に渡る。

（平家物語）

鬼同丸……橘成季

賴光朝臣。寒夜に物へ歩きて歸りけるに。賴信の家近くよりたれば。公時を使にて。唯今こそ罷り過ぎ侍れ。此の寒さこそはしたなけれ。美酒侍るやと云ひたりければ。賴信朝臣。折節酒飲みて居たりける時なりければ。興に入りて。唯今見むやうに申し給ふべし。此の仰せ特に悅び思ひ給ひ候ふ。御渡りあるべしと云ひければ。賴光則ち入りにけり。盃酌の間。賴光厩の方を見やりたりければ。童を一人縛めて置きたりけり。怪しと見て。賴信に。彼（アレ）に縛めておきたるものは誰ぞと問ひければ。鬼同丸なりと答ふ。賴光驚きて。いかに鬼同丸などを彼體（アレテイ）には縛め置き給ひたるぞ。犯しある者

ならば。斯く程仇にはあるまじきものをと言はれければ。頼信。實にさる事に候ふとて。郎等を呼びて。猶したゝかに縛めさせければ。金鎖を取り出でゝ。能く逃げぬやうにしたゝめけり。鬼同丸。頼光の宣ふ事を聞くより。口惜しきものかな。何ともあれ。今夜の中に此の恨を報はむずるものをと思ひ居たりけり。盃酌數獻になりて。頼光も醉ひて臥しぬ。頼信も入りにけり。夜深け靜まる程に。鬼同丸究竟の者にて。縛めたる繩金鎖蹈み切りて遁れ出でぬ。狐戸より入りて頼光の寢たる上の天井にあり。此の天井引き放ちて落ちかゝりなば。勝負すべき事異議あらじと思ひ躊躇ふ程に。頼光も常人にあらねば。早く悟りにけり。落ちかゝりなば大事と思ひて。天井に鼬(イタチ)より也大に貂(テン)よりも小き物の音こそすれと云ひて。誰か候ふと呼びければ。綱名のりて參りけり。明日は鞍馬へ參るべし。未だ夜をこめて是より頓て參らむずるぞ。某々供すべしと言はれければ。綱承りて。皆是に候ふと申して居たり。鬼同丸此の事を聞きて。爰にては今は叶ふまじ。醉ひ臥したらばとこそ思ひつれ。なま賢(サカ)しき事し出でては惡しかりなむと思ひて。明日の鞍馬の道にてこそと思ひ返して。天井を遁れ出でゝ。鞍馬の方へ向ひて。市原野の邊にて便宜の所を求むるに。立ち匿るべき所なし。野飼の牛の數多ありける中に。殊に大なるを殺して路頭に引き伏せて。牛の腹を搔き破りて其の中に入りて。目ばかり見出して待ちけり。頼光案の如く來りけり。淨衣に太刀をぞ佩きたりける。綱。公時。定道。季武等皆供にありけり。頼光馬を控へて。野の景色興あり。牛其の數あり。各牛追ふ者あらばやと言はれければ。四天王の輩我も我もと斷けて射けり。寔に興ありてぞ見えける。其の中に綱いかゞ思ひけむ。尖り箭を拔きて。死にたる牛に向ひて弓を引きけり。人恠しと見る所に。牛の腹の程を指して矢を放ちたるに。死にたる牛ゆすゆすと働きて。腹の内より大の童打刀を拔きて走り出でゝ。頼光に懸りけり。見れば鬼同丸なりけり。矢を射たてられながら。猶事ともせず敵に向ひけり。頼光は少しも騒がず。太刀を拔きて鬼同丸が頭を打ち落してけり。頓ても倒れず。打刀を拔きて鞍の前つわをせめて突きたり。さて頭は鞅(ムナガイ)に食ひつきたりけるとなむ。さて頼光は其より歸りにけり。

（古今著聞集）

藤原行成

義孝の子。筆蹟絶妙なり。長徳元年拔てられて卑官となる。寛仁中權大納

藤原行成

言に昇り。按察使を兼ぬ。萬壽二年薨ず。年五十六。

扇……藤原爲憲

又殿上の人々扇どもして參らするに。他人々は骨に蒔繪をし。或は銀黄金沈紫檀の骨になむ筋を入れ彫物をし。えも云はぬ紙どもに人のなべて知らぬ歌や詩や。又六十餘國の歌枕に名揚りたる所々などを書きつゝ參らするに。例の此の殿(行成)は骨の漆ばかりをかしげに塗りて黄なる紙屋紙の下繪ほのかにをかしき程なるに。表の方には樂府を麗はしう眞に書き。裏には御筆を留めて草に感たく書きて奉り給へりければ。打ち返し打ち返し帝(後一條)御覽じて御手筥に入れさせ給ひて。いみじき御寶と思し召したりければ。他扇どもは。唯御覽じ興ずるばかりにて止み侍りにけり。孰れも孰れも帝王の御感侍るに增すことやはあるべきな。

(大鏡)

忍の德……作者不詳

大納言行成卿未だ殿上にておはしける時。實方の中將いかなる憤かありけむ。殿に參り會ひて。謂ふこともなくて行成の冠を打ち落して小庭に投げ捨てゝけり。行成少しも騷がずして。主殿司を召して。冠取りて參れとて冠して。守刀より笄拔き取りて。鬢搔い繕ひて居直りて。如何なる事にて候ふやらむ。忽に斯う程の亂罰に預るべき事こそ覺え侍らね。其故を承りて後の事にや侍るべからむと言麗はしう曰はれけり。實方は。しらけて逃げにけり。折しも半蔀より主上(一條)御覽じて。行成はいみじき者なり。斯く温和しき心あらむとこそ思はざりしかとて。其の時藏人頭空きたりけるに。多くの人を超えてなされにけり。實方をば。中將を具して歌枕見て參れとて陸奥の國に流し遣はされける。やがて彼處にて失せにけり。實方藏人頭になられて。止みにけるを恨にて。執とまりて雀になりて。殿上の小臺盤に居て臺盤を食ひけるよし人云ひけり。一人は不忍によりて前途を失ひ。一人は忍を信ずるによりて褒美に預ることを得たり。

(十訓抄)

藤原道長

關白兼家の子。寛仁二年太政大官となり。萬壽四年十二月薨ず。年六十二。

藤原道長

世に御堂關白と稱し。榮華前後に比なかりき。

南面の柱……藤原爲憲

さるべき人は疾うより御心魂の猛う御まもりも剛きなめりと覺え侍れば。華山院の御時に。五月下つ闇に五月雨も過ぎて。いとおどろおどろしく搔き亂れ雨の降る夜。御門さうざうしくや思しめしけむ。殿上に出でさせおはしまして遊びおはしましけるに。人々物語し給ひて昔怖ろしかりける事どもなど申させ給へるに。今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。斯く人勝なるにだにけしき覺ゆ。況して物離れたる所など如何ならむ。さあらむ所に一人往なむやと仰せられけるに。え罷らじとのみ申し給ひけるを。入道殿(道長)は。何處なりとも罷りなむと申し給ひければ。さる所おはしますに。帝にて。最興あることなり。さらば往け。道隆は豐樂院。道兼は仁壽殿の塗籠。道長は大極殿へ往けと仰せられければ。他の君達は便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承り給へる殿ばらは御氣色變りて益なしと思したるに。露さる御氣色もなくて。私の從者をば具し候はじ。此の陣の吉上にまれ瀧口にまれ一人昭慶門まで送れと仰言給べ。其れより内に一人入り侍らむと申し侍へば。證なき事にこそと仰せらるれば。實にとて御手筥に置かせ給へる刀差して立ち給ひぬ。今二所も攣む攣む各おはさうじぬ。子四つと奏して斯く仰せられ議する程に丑にもなりにけむ。道隆は右衞門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよと。それをさへ分たせ給へば。然おはしましあへるに。中關白殿(道隆)陣まで念じておはしたるに。宴の松原のほどに其の物ともなき聲どもの聞ゆるに。すぢなくて歸り給ふ。粟田殿(道兼)は露臺の外まで戰く戰くおはしたるに。仁壽殿の東面の砌のほどに。軒と等しき人のあるやうに見え給ひければ。物も覺えで。身の侍はどこそ仰言も承らめとて。各歸り參り給へれば。御扇を敲きて笑はせ給ふに。入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを。如何と思しめす程にぞ最さり氣なく事にもあらずげにて參らせ給へる。如何に如何にと問はせ給へば。いと悠やかに御刀に削られたる物を取り具して奉らせ給ふ。此は何ぞと仰せらるれば。徒にて歸り參りて侍らむは證さぶらふまじきによりて。高御座の南面の柱の下を削りて取りて候ふなりと。つれなく申し給ふに。いと淺ましう思しめさる。他殿達の御氣色は今にも尙直らで此の殿の斯くて參り給へるを。帝より始め感じ嘗られ給へど。羨ましきにや又い

かなるにか。物も曰はでぞ侍ひ給ひける。尙疑はしく思しめされければ。翌朝(ツトメテ)藏人し て。削り屑を遣し見よと仰言ありければ。持て往きて押しつけて見たうびければ。露 違はざりけり。其の削り痕は最けざやかにて侍るめり。末の世にも見る人は尙淺ましきことにぞ申しゝかし。

（大鏡）

出家入道……赤染衞門（俗傳）

殿の御前(道長)世を知り始めさせ給ひて後。帝は三代(一條。三條。後一條)にならせ給ふ。我が御世は二十三四年ばかりにならせ給ふに。帝若うおはします程は攝政と申し。長(オトナ)びさせ給ふ折は關白と申しておはしますに。此の頃(寛仁三)の攝政をも御一男唯今の内大臣殿(賴通)に讓り奉らせ給ひて。我が御身は太政大臣の位にておはしますをも。常に公に還し奉らせ給ひ辭せさせ給へど。公儀(オホヤケ)更に聞し召し入れぬに。度々わりなくて過ぐさせ給ふ。御心には冷(スサ)まじう思さるゝ事限なし。斯る程に。御心ち例ならず思さるれば。人々も夢騷がしく聞ゆるに。我が御心ちにも宜しからず思しめさるれば。此の度こそは限なめれと物心細く思さる。殿ばら宮々などにも。最恐ろしう思し歎くに。最どまことにおどろおどろしき御心ちの態なり。斯れば萬にいみじき御祈ども樣々なり。されど唯今は驗も見えず。最苦しうせさせ給ふ。（中略）陰陽師どもは。晴明。光榮(ミチヨシ)など最神さびたりし者どもにて。最驗殊なりし人々なり。所替へさせ給ひて宜しかるべき山中しければ。故麗景殿(綏子)の尙侍の御家土御門に渡らせ給ひて忘らせ給ひにしかば。其の例を引きて。外に渡らせ給へなど。さるべき殿ばら中させ給へど。すべて更にいかむとも思ひ侍らばこそあらめとて。聞しめし入れず。唯佛を賴み奉らせ給へり。年頃の御本意。唯出家せさせ給ひて。此の京極殿の東に。御堂建てゝ。其所におはしまさむとのみ思されつるを。此度(コタミ)怠らせ給へらば。限なき御有樣にてこそは過ぐさせ給はめ。されど如何とのみ。親しき疎き。やゝましげに思ひ申したるも。道理に見えさせ給ふ。宮々など皆おはしまし集まらせ給ひて。さし竝び萬に扱ひ奉らせ給ふ。此の世の有樣なべてならずめでたうおはします。攝政殿(賴通)にも御修法三壇行はせ給ひ。種々(サマザマ)の御讀經數を盡させ給へり。內(後一條)。春宮（後朱雀）より。大宮(彰子)皇太后宮(妍子)中宮(威子)小一條院(敦明)。又攝政殿。左大將殿(教通)など。皆御修法せさせ給ふ程の御有樣思ひやるべし。殿の內は更にも云はず。

其の邊の人の家々。大なる小き分らず。許多の僧ども入り居たり。斯らむにはいかでかと見えさせ給ふ。御祭祓など云はむ方なし。殿の御前。今は祈はせで。唯減罪生善の法どもを行はせ。念佛の聲を絶えず聞かばやと宣はすれど。其は露此の殿ばら聞し召し入れず。いかで疾く本意遂げなむと宣はするを。大宮聞しめして。尙今暫し春宮の御代を待たせ給ふべく聞えさせ給ふを。心うく相思しめさぬなりけりと恨み申させ給へば。如何にとのみ覺し歎かせ給ふ。（中略）殿の御前。更に命惜しうも侍らず。さきざき世を知り政ごち給へる人々多かる中に。己ばかりさるべき事どもしたる例はなくなむある。內。東宮おはします。三所（彰子。妍子。威子）の后院の女房おはす。唯今內大臣にて攝政仕うまつり。次は大納言（敎通）にて左大將かけたり。又大納言（賴宗）あるは左衞門督にて別當かけたり。子の男（長家）位ぞまだ最淺けれど。三位中將にて侍り。皆是次々公の御後見を仕うまつるべし。自ら太政大臣准三后の位にて侍り。此の二十餘年雙ぶ人なく。身一つにして數多の帝の御後見を仕うまつるに。殊なる難なくて過ぎ侍りぬ。己が先祖の貞信公（忠平）いみじうおはしたる人。我太政大臣にて。太郎小野宮のおとゞ（實賴）左大臣。二郎九條右大臣（師輔）。四郎（師氏）五郎（師尹）。そは大納言などにてさし並び給へりけれど。后立ち給はずなりにけり。近うは九條の大臣我が御身は右大臣にて止み給ひにけれど。大后（安子）の御腹の冷泉院。圓融院。さし續きおはしまし。十一人の男子の中に。五人（伊尹。兼通。兼家。爲光。公季）の太政大臣にて三人攝政し給へり。今にいみじき御幸福なりかし。されど后三所斯く立ち給へる例は。此の國にはまだなき事なりなど。世にめでたき御有樣を云ひ續けさせ給ひ。今年五十四なり。死ぬとも更に恥あるまじ。今行く末も斯ばかりの事は有り難くやあらむ。唯飽かぬ事は。尙侍（嬉子）を東宮に奉り。皇太后宮の一品宮（禎子）の御有樣と。此の二事をせずなりぬるこそあれど。大宮おはしまし。攝政のおとゞ在ますめれば。さりともとし給ふことありなむと言ひ續けさせ給ふに。宮々殿ばら止め難う思され。僧侶も涙留め難し。上（倫子）は更にも云はず。聞えさせむ方なし。斯くて今はとて。院源僧都召して御髮下させ給ふ。上も年比の御本意なれば。やがてと思し宣はすれど。かんの殿（嬉子）の御事の後にと申させ給へば。いと口惜と覺し惑ふもいみじ。僧都の御髮下し給ふとて。年來の間世の護にて一生衆生の父として萬を子の如くはぐくみ。正法をもて國を治め。非道の政事なくて過ぐさせ給ふに。限なき位を去り。

めでたき御身を捨てゝ出家入道せさせ給ふを。三世の諸佛達喜び給はむに。現世は御壽命のび。後生は極樂の上品上生に昇らせ給ふべきなり。三歸五戒を受くる人すら。三十六部の善神恒河沙眷屬共に護るものなり。況や眞の出家をやなど。哀に尊き事限なし。（中略）此の御惱は寛仁三年三月十七日より惱ませ給ひて。同じき二十一日に出家せさせ給ひつれば。日永く覺さるゝまゝに。さるべき僧だち殿ばらなどと物語せさせ給ひて。御心ち此上なうおはします。今は唯いつしか此の東に御堂建てゝ。閑に住む業せむ。となむ造るべき斯くなむ建つべきなどと云ふ御心工夫いみじ。（榮花物語）

藤原保昌

致忠の子。武勇膽大膂力あり。丹後。大和。攝津の國守を歴仕す。長元九年卒す。年七十五。

袴垂……源隆國

今は昔。世に袴垂と云ふいみじき盜人の大將軍ありけり。心太く力强く。足早手利。思慮賢く。世に竝なき者なき者になむありける。萬人の物をば。隙を伺ひ奪ひ取るを以て役とせり。其が十月許りに衣の要ありければ。衣少し儲けむと思ひて然るべき所々を伺ひ行きけるに。夜半許に人皆寢靜まり畢てゝ月の朧なりけるに。大路に漫に衣の數著たりける主の。指貫なめりと見ゆる袴の裔挾みて衣の狩衣めきてなよゝかなるを著て。唯一人笛を吹きて行きも遣らず練り行く人ありけり。袴垂之を見て。あはれ此こそ我に衣得させに出で來る人なめりと思ひければ。喜びて走り懸りて打ち臥せて衣を剝がむと思ふに。怪しく此の人の物恐しく思ひければ。副ひて二三町許を行くに。此の人我に人こそ隨きにたれと思ひたる氣色もなくて。彌靜に笛を吹きて行けば。袴垂試みむと思ひて足音を高くして走り寄りたるに。少しも騷ぎたる氣色もなくて。笛を吹きながら見返りたる氣色。取り懸るべくも思はれざりければ走り去りぬ。此樣にとさまかうざまにするに。塵ばかり騷ぎたる氣色もなければ。此は希有の人かなと思ひて十餘町許具して行きぬ。然りとて有らむやはと思ひて袴垂刀を拔きて走り懸りたる時に。其の度笛を吹き止みて立ち返りて。此は何者ぞと問ふに。譬ひ何ならむ鬼なりとも神なりとも。此樣にて唯獨あらむ人に走り懸りたらむさまで怖しかるべき事に

もあらぬに。此は如何なるにか。心も肝も失せて唯死ぬ許怖しく覺えければ。我にもあらで突き居られぬ。如何なる者ぞと重ねて問へば。今は逃ぐとも逃すまじかめりと思ひて引剝に候ふ。名をば袴垂となむ申し候ふと答ふれば。此の人然云ふ者世に在りとは聞くぞ。差ふし氣に希有の奴かな。共に詣で來とばかり云ひ懸けて。又同じ樣に笛を吹きて行く。此の人の氣色を見るに。常人にもあらぬ者なりけりと恐ぢ怖れて。鬼神に取らるゝと云ふらむやうにて。何にも思はで共に行きけるに。此の人大なる家のある門に入りぬ。沓を履きながら緣の上に上りぬれば。此の家主なりけりと思ふに。内に入りて即ち返り出で袴垂を召して綿厚き衣一つを給ひて。今よりも此樣の要あらむ時は參りて申せ。心を知らざらむ人に取り懸りては汝誤まられなとぞ云ひて内に入りにける。其の後此の家を思へば。攝津前司保昌と云ふ人の家なりけり。此の人も然なりけりと思ふに。死ぬる心地して生きたるにもあらでなむ出でにける。其の後袴垂捕へられて語りけるに。奇異しくむくつけく怖しかりし人の有樣かなと云ひけるなり。此の保昌朝臣は家を繼ぎたる兵にもあらず。致忠と云ふ人の子なり。而るに露家の兵にも劣らずとして。心太く手利き强力にして思慮のある事もいみじければ。公も此の人を兵の道に仕はるゝに聊心元なき事なし。然れば世に聞きて此の人を恐ぢ迷ふ事限なし。但子孫のなきを家にあらぬ故にやと人云ひけるとなむ語り傳へたるとや。

（今昔物語）

皇慶阿闍梨

中納言橘廣相の曾孫。性空法師の姪なり。嘗て東塔院の靜眞に從て秘密の宗を學ぶ。又嘗て鎭西に遊ぶ。景雲阿闍梨之を器とし。密傳の秘奥を授く。その平生神異多し。永承四年七月寂す。年七十三。

林下乞士

傳

東塔院の靜眞阿闍梨は。慈覺大師六代の嫡嗣なり。卽ち是を師として密教を學ぶ。梵字悉曇研き究めずと云ふことなく。五部三部底を盡して山門の奥祕を傳へ。法の燈火是に熾なり。然れども尙知らぬ火の筑紫に遊びては。景雲阿闍梨に就て東寺の祕密を傳へ。又大師の寶瓶を以て瀉瓶の信（シルシ）として付す。時に延般法師と云ふ人あり。亦綱

密の名匠なり。皇慶と共に景雲阿闍梨に隨つて密教を傳授す。皇慶筑前の國背振山に於て安居する時に。延殷と倶に法を修する次で。驚發地神の眞言を誦して。印手を以て地を按すに。大地大に震ふ。皇慶乃ち延殷を誡めて曰はく。無上菩提を成ずるに至るまで。愼んで是を他に語ることなかれと。又池上の巷に於て舍利を禮するに。舍利光を放つ。四天王寺に詣でゝ舍利を禮するに。舍利本は三粒なり。卽ち分れて八粒となる。薄暮に一人の童子來る。貌甚だ偉壯なり。皇慶問ふ。汝は何人ぞ。童子の曰く。僕は久しく播州書寫の性空上人に給事せる乙護法と云ふ者なり。或人役夫上人の上供を偸む。我忿に耐へず。拳を以て頭を擊つに。其の人卽ち死す。故を以て上人我を驅つて去らしむ。故に今師に投ずと。皇慶飲食を與ふ。童の曰はく。願はくは印言を以て加持し玉へ。受けやすからんと。皇慶乙童を數百里の外に使はすに。半時ならずして往來す。或は衣を洗がしむるに。虛空に曝して桁竿を用ゐず。又袈裟を洗はしむるに。震旦日本には淸淨の水なしと云ひて。天竺の無熱池へ往きて洗ひけり。其の外の靈異甚だ多し。或時に諸の役夫列座してたはむれける次で。各拳を以て輔車(ツラガマチ)を打ち。次第に巡つて相授けて乙童に至る。乙童辭して曰はく。我若し打たば。恐らくは其の人死すべしと。諸人强ひて望みければ。乙童爲方(センカタ)なくて頰(ヤハラ)かに打つに。其の人血を吐いて殆んど死なんとす。皇慶聞いて呵嗔して擯し黜す。時に乙童泣いて曰はく。背振山の地動は堅牢善女天出現の時なり。我まのあたり見るが故に。此の勝德を感じ來るに。今又擯出せらる。悲い夫と。長曆中に。智證。慈覺の兩門人相諍ふことあり。朝廷皇慶の德望一山を蓋ふを以て皇慶を譖む。皇慶の曰はく。官事若し急ならば乙童を宥(ナダ)むべしと。爾の時に朝廷恐れて强ひて譖めずといへり。まことに乙童又來らば。衆人此を何とせんや。

（礦石集）

藤原公任

關白賴忠の子。幼より學藝に秀づ。官正二位大納言に進み。按察使を兼ぬ。萬壽元年長久二年薨ず。年七十六。

和歌の船……藤原爲盡

一年入道殿(道長)大井川の逍遙せさせ給ひしに。作文の船管絃の船和歌の船と分た

せ給ひて。其の道に妙なる人々を乘せさせ給ひしに。此の大納言(公任)殿の參り給へるを。入道殿。彼の大納言いづれの船にか乘らるべきと宣はすれば。和歌の船に乘り侍らむと宣ひて詠み給へるぞかし。

小倉山嵐の風の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき

申しうけ給へるかひありて遊ばしたりな。御みづからも宣ふなるは。作文の船にぞ乘るべかりける。偖かばかりの詩を作りたらましかば名のあがらむことも增りなまし。口惜しかりけるわざかな。さても殿孰れにとか思ふと宣はせしなむ我ながら心おごりせられしと宣ふなる。一事の勝るゝだにあるに。まして斯く孰れの道も擺け出で給ひけむは往古も侍らぬことなり。

(大鏡)

紫の雲……源隆國

今は昔。一條院の天皇の御時に上東門院始めて内に參らせ給ひけるに。御屏風を新しくせさせ給ひて。色紙に書かむ料に歌讀どもに仰せ給ひて歌讀みて奉れとありけるに。四月に藤の花の滋く榮えたる家を繪に畫きたりけるを。公任の大納言當りて讀み給ひけるが。既に其の日になりて人々の歌は皆持ち參りたりけるに。此の大納言の遲く參り給ひければ。使を以て遲き由を關白殿(道長)より度々遣しけるに。行成大納言は此の和歌を書くべき人にて疾く參りて。御屏風を給はりて書くべき由申し給ひければ。彌ゝ立ち居待たせ給ひける程に大納言參り給へれば。歌讀共のはかばかしく歌も讀み出でざるに。然りとも此の大納言の歌はよも弊き樣はあらじと皆人も心憎がり思ひたりけるに。御前に參るや遲きと。殿何に歌は遲きぞと仰せられければ。大納言捗々しくも更にえ仕り得ず。弊くて奉りたらむに奉らざるには劣りたる事なり。其の中には歌讀どもの最勝れたる歌どもゝ候はぬめり。其の歌ども召されてはかばかしくもあらぬが書かれて候はむには。公任が永くの名にも候ふべしと極じく遁れ申し給ひけれども。殿異人の歌はなくても有りなむ。其の御歌なくば惣べて色紙形ぞ書かれざるまじなりと。誠實に責め申し給ひければ。大納言極じく候ふ悪かな。此の度は凡そ誰も誰も歌え讀み出でざる度にこそ候ふめれ。中にも永任をこそ然りとも其の歌は心憎く思ひ給へ候ひつるに。此くきしのめやなへと讀みて候へば最異樣に候ふ。然れば此等だに此く讀み損ひ候へば。まして公任は讀み得候はぬも道理なれば。尙免し給ふべき

なりと樣々に遁れ申し給へども。殿强(アナガチ)に切りに切めて責めさせ給へば。大納言極じく思ひ煩ひて大歎打して。此は永き名かなとうち言ひて懷より檀紙に書きたる歌を取出でて殿に奉り給へば。殿之を取りて御前に披きて置き給ふに。御子の左大臣宇治殿(賴通)同じく二條大臣(敎通)殿より始めて若干の上達部殿上人。然れども此の大納言は無下に故なくは讀み給はずと心憎く思ひて。除目の大間殿上のやうに皆人押し平びて見騷ぐに。殿音(コエ)を高くして讀み上げ給ふを聞けば。

紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらむ

と。若干の人皆之を聞きて胸を叩いて極じと讃め喧けり。大納言も人々の皆いみじと思ひたる氣色を見てなむ今ぞ胸は落ち居ぬるぞと殿に申し給へる。此の大納言は萬の事皆やんごとなかりける。中にも和歌讀む事を自も歎かし給ひけりとなむ語り傳へたるとや。

（今昔物語）

宿のあるじ……同

今は昔。公任大納言。春頃白川の家に居給ひける時。然るべき殿上人四五人許行きて。花の滋く候へば見に參りつるなりと云ひければ。酒など勸めて遊びけるに。大納言斯くなむ。

春來てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ

と。殿上人ども之を聞きて極じく感(ムジ)て讀みけれども。之に准ふにもなかりけり。又此大納言父の三條の太政大臣(オホキオトド)(賴忠)失せ給ひたりけるに。九月の中旬の比。月の極じく明かりけるに。夜更け行く程に空を詠めて居たりけるに。侍の方に極じく明なる月かなと人の云ひけるを聞きて大納言。

、古を戀ふる涙にくらされて朧に見ゆる秋の夜の月

となむ讀みたりける。又此の大納言九月許に月の雲隱れたりけるを見て讀みける。

すむとても幾よも過ぎじ世の中に曇りがちなる秋の夜の月

と。又此の大納言宰相中將にてありける時。然るべき上達部殿上人數多具して遊ばむが爲に。大堰河に行きて遊びけるに。紅葉の井關に流れ留りたりけるを見て讀みける。

落ち積る紅葉を見れば大堰河井關に秋はとまるなりけり

と。又此の大納言の御娘は二條殿(敎通)の御北の方にておはしけるに。雪降りける朝

其の御許に奉りけり。

降る雪は年と共にぞ積りけるいづれか高くなりまさるらむ

と。又此の大納言世の中を恨みて蟄居たりける時。八重菊を見て讀みける。

おしなべて咲く白菊は八重やへの花の霜とぞ見え渡りける

と。又世の中を背く人々多く有りける比。大納言此く讀みける。

思ひ知る人もありける世の中にいつを待つとて過すなるらむ

と。又關白殿の大饗行はせ給ひける屏風に。山里に紅葉見に人の來たる所を繪に畫きたるに。此なむ讀みける。

山里の紅葉見にとか思ふらむ散り果てゝこそ問ふべかりけれ

と。斯樣に讀みて此の大納言は極めたる和歌の上手にはおはしけるとなむ語り傳へたるとや。

（今昔物語）

定朝 或作肇朝

大佛門扉朝の子。治安二年法橋に敍せらる。法成寺金堂造佛の賞としてなり。永承三年法眼に轉ず。山階寺造佛の賞としてなり。天喜五年八月一日死す。

地藏菩薩……源隆國

今は昔。但馬前司國擧と云ふ人有りけり。（中略）忽ち鬢髮を剃りて出家入道しつ。即ち大佛師定朝を語らひて。等身の皆金色の地藏菩薩の像を一體造奉り。色紙の法華經一部を書寫して。六波羅密寺にして大きに法會を行つて供養し奉りつ。其の講師は大原の淨源供養と云ふ人なり。法會の庭に來り集れる道俗男女皆涙を流して。悉く地藏菩薩の靈驗を信じ奉りけり。其の地藏菩薩は六波羅の寺に安置して今に在すと語り傳へたるとなり。

（今昔物語）

陵王の面……兼顯

佛師定朝。弟子覺助をば義絶して家の中へも入れざりけり。然れども母に謁する爲に。定朝他行の隙などには密々に來りけり。定朝左近府陵王の面打ち進ず可きの由仰

せ下され。至心に打出て愛して。褻居の前なる柱に懸けて置きたりけるを。父他行の隙に覺助來りけるに。此の面を取り下して見て。あな心憂。此の定にて進ぜられたらましかば。淺猿(アサマシ)からましとて腰刀を抜き。むず〳〵とけづり直して。本の如く柱に懸け。退き歸りぬ。定朝歸り來て。此の面を見て云く。白物(シレモノ)來り入りたりけりな。不孝の者。他行の間と雖。入り居る事奇怪の事なり。此の陵王の面作り直いてけり。但かなしく直されにけりとて。勘當を免さしめけりと云々。

（古事談）

阿部頼時
同　貞任
同　宗任

頼時は忠良の子。父祖の業を承けて勢威四隣に輝く。子貞任。藤原の光貞の爲に罪せられんとするに及び。肯んずる能はずして、遂に反す。朝廷源頼義を命じ鎭守府將軍と爲し。之を討たしむ。天喜五年歿す。貞任。宗任は其の子なり。康平五年貞任は鳥海柵を守りて死し。宗任は降を乞ひて伊豫に放たる。後僧と爲りて九州に赴けりといふ。

傳……作者不詳

源頼義。境に入り任に著くの初。俄にして天下の大赦あり。頼良大に喜び。名を改め頼時と稱す。【太守の名に同じ。禁有るの故也。】身を委ねて歸服す。境内兩清。一任無事なり。任終るの年。府務を行はんが爲に鎭守府に入り。數十日經廻の間。頼時首を傾けて給仕す。駿馬金寶の類。悉く幕下に獻じ。兼ねて士卒に給す。而して頼義國府に歸るの道。阿久利河の邊に宿る。夜人ありて竊に語る。權守藤原ノ朝臣說貞の子の光貞元貞等野宿して人馬を殺傷せらると。將軍光貞を召し。嫌疑の人を問ふ。答へて曰く。頼時の長男貞任。先年を以て光貞の妹を聘せんと欲す。其の家族を賤みて之を許さず。貞任深く恥と爲す。之を推するに貞任の爲す所なり。此の外他の仇無しと。爰に將軍怒つて貞任を召し。之を罪せんと欲す。頼時其の子姪に語つて曰く。人倫の世に在るや。皆妻子の爲なり。貞任愚なりと雖も。父子の愛は。棄て忘るゝこと能はず。一旦誅に伏す。吾何ぞ忍びんや。如かじ關を閉ぢて聽かざらんには。若し來つて

我を攻めんか。吾が衆拒ぎ戰はゞ。未だ以て憂とすべきにあらず。從ひて戰利あらずして吾が儕死するとも。亦可ならずやと。左右皆曰く。公の言是なり。請ふ一丸泥を以て衣川の關を封ぜんに。誰か敢て破る者有らんやと。遂に道を閉ぢて通ぜしめず。

天喜五年秋九月。國解を進め。賴時を誅伐するの狀を言上す。儛く。臣金ノ爲時下毛野興重等をして。奥地の俘囚に甘說して。官軍を興さしめぬ。是に於て銚屋仁土呂志宇曾利三部の夷人。安倍ノ富忠を首となして兵を發す。而るに賴時其の計を聞き。自ら往いて利害を陳ぶ。衆二千人に過ぎず。富忠伏兵を設け。之を嶮岨に擊つ。大戰二日。賴時流矢に中り。烏海の柵に還りて死す。

同年十一月。將軍兵千八百餘人を率ゐて貞任を討たんと欲す。貞任等精兵四千餘人を率ゐて。金ノ爲行の河崎の柵を以て營と爲し。黃海に拒ぎ戰ふ。時に風雪甚だ勵しく。道路艱難。官軍食無く。人馬共に疲る。賊類は新羈の馬を馳せ。疲足の軍に敵す。唯客主の勢の異なるのみならず。亦寡衆の力の別なるあり。官軍大に敗れ。死者數百人なり。

宗任八百餘騎を率ゐて城外に戰を挑む。前陣頗る疲れ。之を敗る能はず。玆に因つて五陣の軍士。平眞平。菅原行基。源眞淸。刑部千富。大原信助。淸原貞廉。藤原衆成。橘孝忠。源親季。藤原朝臣時經。丸子宿彌弘政。藤原光貞。佐伯元方。平經貞。紀季武。安部師方等を召し。合せ加つて之を攻めしむ。皆是將軍麾下坂東の精兵也。萬死に入り。一生を忘れ。遂に宗任の軍を敗る。

磐井以南の郡々。宗任の海に依りて。官軍の輜重。往反の人物を遮り奪ふ。件の姦類を追捕せんが爲に。兵士千餘人を分ちて。栗原郡に遣はす。又磐井郡仲村の地。陣を去る四十餘里也。耕作田畠。民戶頗る饒し。則ち兵士三千餘人を遣はし。亦稻禾等を刈らしめて軍糧に給す。此の如きの間。十八箇日を經て。營中に留まるもの。六千五百餘人也。貞任等此由を風聞し。其衆に語つて曰く。聞くが如くば。官軍食乏しく。四方に糧を求め。兵士四散し。營中數千に過ぎずと云ふ。吾大衆を以て襲ひ擊たば必らず之を敗らんと。則ち九月五日を以て。精兵八千餘人を率ゐ。地を動かして襲ひ來る。玄甲雲の如く。白刃日に耀く。是に於て武則眞人進んで將軍に賀して曰く。貞任謀を失ふ。將に賊首を梟せんとす。將軍曰く。彼官軍分散して。孤營少兵なるを知り。忽ち大衆を將ゐて來り襲ふ。是必らず謀勝つものなり。而るに子謀を失ふといふ。其

の意如何。武則曰く。官は客兵たり。粮食常に乏し。一旦に鋒を爭つて雌雄を決せんと欲す。而るに賊衆若し嶮を守りて進み戰はざらんには。客兵常に疲れて。久しく攻むる能はず。或は逃れ散ずる者有りて。還つて彼の爲に討たる可し。僕常に之を以て恐と爲す。而るに今貞任等進み來つて戰はんと欲す。是れ天の將軍に福する也と。

貞任劍を拔いて官軍を斬る。【同十七日】。官軍鋒を以て之を刺す。大楯に載せ。六人して之を舁き。將軍の前に置く。其の長六尺有餘。腰圍七尺四寸。容貌魁偉。皮膚肥白也。

同六年二月十六日。貞任重任經淸の首三級を獻ず。京都壯觀を爲す。車は轂を擊ち。人は肩を摩す。是より先首を獻ずるの使者。貞任の從者の降人たるものを率ゆ。櫛無き由を稱す。使者曰く。汝等私用の櫛有らん。其を以て之を梳る可しと。擔夫則ち櫛を出して之を梳り。淚を垂れて嗚咽して曰く。吾が主存生の時。之を仰ぐこと高天の如し。豈吾が垢櫛を以て忝くも其の髮を梳ることを圖らんやと悲哀して忍びず。衆人皆淚を落す。

（陸奥物語）

伊勢大輔

中古三十六歌仙の一人なり。伊勢祭主大中臣輔親の女。上東門院に事へて紫式部。和泉式部等と名を齊くす。後越前守高階成順の妻となる。

八重櫻……伊勢大輔

女院（上東門院）の中宮と申しける時。內におはしまいしに。奈良から僧都の。八重櫻を進らせたるに。今年のとり入れ人は新參（イママヰリ）ぞとて。紫式部の讓りしに。入道殿（道長）聞かせ給ひて。たゞには取れぬものをと仰せられしかば。

古の寧樂の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな

殿の御前殿上に取り出させ給ひて。上達部君達引き連れて。慶におはしたりし。院の御返し。

九重の匂ふを見れば櫻がり重ねて來たる春かとぞ思ふ

（伊勢大輔集）

山吹の花……源俊頼

道信の中將の。山吹の花を持ちて上の御局と云ふ所を過ぎけるに。女房達居こぼれて。さる愛でたき物を持ちて。唯に過ぐるやうやはあると云ひ懸けゝれば。元よりや設けたりけむ。

口なしに千入(シホ)やちしほ染めてけり

と云ひて。差し入れたりければ。若き人々え取らざりければ。奥に伊勢大輔が侍ひけるに。彼(アレ)取れと宮の仰せられければ。承りて。一間の程膝行り出でける程に。思ひよりて。

こはえも云はぬ花の色かな

とこそ付けたりけれ。是を上聞しめして。大輔なからましかば。恥がましかりけることかなとぞ仰せられける。

（俊秘抄）

藤原彰子

上東門院と稱す。藤原道長の女。一條帝の中宮。永延二年生れ。承保元年十月崩ず。年八十七。

望月……作者不詳

世繼も帝の御序に國母の御事申し侍れば。此の帝の御母后の御事此の序に申し侍るべし。御年二十一二におはしましゝ時。後一條院後朱雀院うち續き生み奉らせ給へり。土御門殿にて後一條院生み奉らせ給へりし七夜の御遊に。御簾の内より出され侍りける盃に添へられ侍りし歌は。昔の御局(ミ)の詠み給へりし。

珍らしき光さし添へ盃はもちながらこそ千世はめぐらめ

とぞ覺え侍る。其の女院十三より后におはしまし。一條院崩(カク)れさせ給ひて後一條の帝幼くおはしましけるに。撫子の花を取らせ給ひければ。御母后。

見るまゝに露ぞこぼるゝおくれにし心も知らぬ撫子の花

五節の頃。昔を思ひ出でゝ。殿上人參りて侍りけるに。伊勢の大輔。

早く見し山井の水のうす氷うちとけざまはかはらざりけり

藤原彰子

とぞ詠みて出し侍りける。寛弘九年二月に皇太后宮にあがらせ給ふ。御年二十五と聞えさせ給ひき。後一條の帝位に即かせ給ひて寛仁二年正月に太皇太后宮にならせ給ひき。萬壽三年正月十九日に御態(サマ)かへさせ給ふ。御年三十九御名は淸淨覺と申しけり。后の御名とゞめさせ給ひて女院と聞えさせ給ふ。年安の官位(ツカサ)たまはらせ給ふ事は同じやうに變り侍らざりけり。長暦三年五月七日御髮(グシ)おろさせ給ふ。顯基の入道中納言。

世を捨てゝ宿を出でにし身なれどもなほ戀しきは昔なりけり

と詠みて此の院へ奉り給へる御返事に。

つかの間も戀しきことの慰まば二たび世をも背かざらまし

と詠ませ給へる。初は御髮そがせ給ひて後に皆おろさせ給ふ心なるべし。(中略)彼の東北院は此の院の御願にて父大臣の御堂法成寺の傍に作らせ給へり。山の容池の姿もなべてならず。松の影花の梢も外には勝れてなむ見え侍りける。九月十三夜より。望月の影まで佛の御顏も光添へられ給へり。(中略)此の堂土御門の末に當れば上東門院と申すなり。此の後代々の女院の院號かどの名聞え侍るめり。陽明門も近衞にあたりたれば此の例によりて附かせ給へり。(中略)帝の御前などにては土御門近衞などは申さで。上東門の大路より孰方。陽明門の大路よりは其方などぞ奏すなる。されば一條二條など申すにも同じ心なるべし。此の上東門院の御年は八十七までおはしまし。

(續世繼物語)

なきねの夢……作者不詳

上東門院の御事はよしあしなど聞ゆべきにもあらず。何事もめでたき例には先づ引かれさせ給ふときなれば。とかく申すに及ばず。何事も御幸福(サイハイ)極めさせ給ふ餘に。御命さへこちたくて數多の帝に後れさせ給ふこと口惜しく侍れ。其の度にいと哀なる御歌ども詠ませ給ひたるは優しくこそ侍れ。一條院崩れさせ給ひて。

逢ふことの今はなきねの夢ならでいつかは君を又は見るべき

など詠ませ給へるも最感でたくこそ侍れ。又顯基の中納言御返事に。よは二たびは背かざらましなど侍るも最哀なり。何事よりも優なる人多く侍ひけむこそいとゞ心惜くめでたく覺え侍れ。

(無名草子)

源隆國

權大納言俊賢の第二子。長元中參議に任じ尋で權中納言となり正二位に敍せらる。治曆三年權大納言に進み。承曆元年出家し。尋いて薨ず。著す所今昔物語あり。

これにせむ……橘成季

左大辨宰相經賴卿。前の妻の腹に最愛の小女ありけるを。車に載せて行幸を見物すとて。供奉の人の中に何れをか殿にせむずると云ひて。人毎に此はと問ひければ。皆頭をふりけるに。隆國卿の渡るを見て。是にせむと云ひければ。實に是に過ぎたる人はあらじと思ひて。聟に取りてけり。北の方。我が女には隆國よりも善からむ人を娶はせよと責めければ。其よりも優らむ人は有り難ければ。才學につきて資仲卿を娶はせたりけり。彼の卿頻りに隆國を爭ひ思ひけれども。昇進及ばず。其の子息にて隆俊中納言の時は。資仲卿は未だ藏人頭にだもならざりけり。

（古今著聞集）

今昔物語……作者不詳

世に宇治大納言物語【今昔物語也】といふ物あり。此大納言は隆國といふ人なり。西宮殿（高明）の孫。俊賢大納言の第二の男なり。年高うなりては。暑をわびて暇を申て。五月より八月までは。平等院一切經藏の南の山際に南泉房といふ所に籠り居られけり。さて宇治大納言とは聞えけり。髻を結ひ分けて。をかしげなる姿にて。筵を板に敷きて涼み居侍りて。大なる團扇をもて扇がせなどして。往來の者。高き卑しきを云はず呼び集め。むかし物語をさせて。我に内にそひ臥して。語るに隨ひて大なる雙紙に書たりけり。天竺の事も有り。大唐の事もあり。日本の事もあり。それが中に尊き事もあり。あはれなる事も有り。きたなき事も有り。少〻はそら物語も有り。利口なることも有り。さま〻〻樣樣なり。世の人これを興じ見る。十五帖なり。其の正本は傳はりて。侍從俊貞といひし人の許にぞありける。いかになりにけるにか。後にさかしき人々書き入れたる間。物語おほくなれり。大納言より後の事書き入れたる本もあるにこそ。

（宇治拾遺物語）

源賴義

源頼義

鎮守府將軍頼信の長子。小名は王代丸。頼時貞任を討ちて功あり。陸奥守に任じ。後伊豫守となる。承保二年入道し幾ならずして卒す。

弓矢の譽……作者不詳

六箇郡の司に安倍頼良と云ふ者あり。是同じき忠良の子なり。父祖忠頼は東夷の酋長にして。威風大に振ひ村落皆服す。六郡を横行して人民を劫略し。子孫尤滋蔓す。漸く衣川の外に出でゝ賦貢を輸さず。徭役を勤むることなく。代々驕奢にして誰人も敢て之を制すること能はず。永承の頃。太守藤原朝臣登任數千の兵を發して之を攻む。出羽の秋田城介平朝臣重成前鋒たり。太守は夫士を率ゐて後を爲す。頼良諸部の俘囚を以て之を拒ぎ。大に鬼切部に戰ふ。太守の軍敗績し。死する者甚だ多し。是に於て朝廷議あり。追討將軍を擇ぶに。衆議歸する所は獨源朝臣頼義に在り。頼義は河内守頼信朝臣の子なり。性沈毅にして武略多く。最將帥の器たり。長元の間。平忠常坂東の妄雄として暴逆を事となす。頼信朝臣追討使となりて平忠常竝に嫡子を討つ。軍旅に在るの間。勇決群を抜き才氣世を被ふ。坂東の武士屬を樂ふ者多し。素小一條院の判官代なり。院畋獵を好む。野中赴く所の麋鹿狐兎は常に頼義の獵る所となる。好んで弱弓を持し。而して發つ所の矢羽を飲まざるはなし。縱猛獸と雖も弦に應じて必ず斃る。其の射藝巧に人に軼ぐ斯の如し。上野守平直方朝臣其の騎射に感じ。竊に相語つて曰はく。僕不肖と云へども苟も名將の後胤たり。偏に武藝を貴ぶ。而れども未だ曾て控弦の巧卿の能の如きものを見ず。請ふ一女を以て箕帚の妾となさむと。則ち彼の女を納れて妻とす。三男二女を生ましむ。長子義家仲子義綱等なり。判官代の勞に因つて相模守となる。俗武勇を好み。民多く歸服す。頼義朝臣の威風大に行はる。拒捍の類皆奴僕の如し。而して士を愛し施を好む。會坂以東弓馬の士は大半門客たり。任終りて上洛す。數年の間を經て忽ち朝選に應じ。征伐の任を專にす。拜して陸奥守となり。鎮守府將軍を兼ね頼良を討たしむ。天下素より才能を知るを以て其の採擇に服す。境に入り任に著くの初。俄に天下の大赦あり。頼良大に喜び。名を改めて頼時と稱す。身を委ねて歸服し。境内兩ながら清し。

（陸奥話記）

馬盗人……源隆國

今は昔。河内前司源頼信朝臣と云ふ兵ありき。東に吉き馬持ちたりと聞えける者の許に。此の頼信朝臣乞ひに遣りたりければ。馬の主辭み難して其の馬を上りけるに。道にして馬盗人ありて。此の馬を見て極めて欲しく思ひければ。構へて盗まむと思ひて密に付きて上りけるに。此の馬に付きて上る兵共の緩むことのなかりければ。盗人道の間にてはえ取らずして。京まで付きて盗人上りにけり。馬は將て上りにければ頼信朝臣の厩に立てつ。而る間頼信朝臣の子頼義に。我が祖の許に東より今日吉き馬將て上りにけりと人告げければ。頼義が思はく。其馬由なからむ人に乞ひ取られなむとす。然らざる前に我行きて見て。實に吉き馬ならば我乞ひ取りてむと思ひて。祖の家に行く。雨極じく降りけれども此の馬の戀しかりければ。雨にも障らず夕方より行きたりけるに。祖子に云はく。など久しくは見ざりつるぞなど云ひければ。次に此は此の馬將て來ぬと聞きて此乞はむと思ひて來たるなめりと思ひければ。頼義が未だ云ひ出でざる前に。祖の云はく。東より馬將て來たりと聞きつるを。我は未だ見ず。遣りたる者は吉き馬とぞ云ひたる。今夜は暗くて何とも見えじ。朝見て心につかば速に取れと云ひければ。頼義乞はざるに此く云へば喜しと思ひて。然らば今夜は御宿直仕りて朝見給へむと云ひて留りに侍。宵の程は物語などして。夜深更ぬれば祖も寢所に入りて寢にけり。頼義も傍に寄りて寄臥しけり。然る間雨の音止まず降る。夜半許に雨の交れに馬盗人入り來りて。此の馬を取りて引き出でゝ去ぬ。其の時に厩の方に人音を擧げて叫びて云はく。夜前將て參りたる御馬を盗人取りて罷りぬと。頼信此の音を髣に聞きて。頼義が寢たるに此かる事云はゞ聞くやと告げずして起きけるまゝに。衣を引き壺折りて胡簏を搔き負ひて。厩に走り行きて自ら馬を引き出して。賤の鞍のありけるを置きて。其に乘りて只一人關山樣に追ひて行く。心は此の盗人は東の者の此の吉き馬を見て取らむとて付きて來けるが。道の間にてえ取らずして京に來て。此かる雨の交れに取りて去ぬるなめりと思ひて行くなるべし。亦頼義も其の音を聞きて。祖の思ひける樣に思ひて。祖に此くとも告げずして。未だ裝束も解かで丸寢にてありければ。起きけるまゝに祖の如くに胡簏を搔き負ひて。厩なる□□關山樣に只一人追ひて行くなり。祖は我が子必ず追ひて來らむと思ひけり。子は我が祖は必ず追ひて前

みおはしぬらむと思ひて。其れに後れじと走らせつゝ行きける程に。河原過ぎにければ雨も止み空も晴れにければ。彌走らせて追ひ行く程に。關山に行きかゝりぬ。此の盗人は其の盗みたる馬に乘りて。今は逃げえぬと思ひければ。關山の喬に水にてある所。痛くも走らずして水をづぶづぶと歩ばして行きけるに。賴信此を聞きて事しも其々に本より契りたらむ樣に。暗ければ賴義が有无も知れぬに。賴義射よ彼やと云ひける言も未だ畢てぬに弓番すなり。尻答ぬと聞くに合せて馬の走りて行く。鐙の人も乘らぬ音にて。からからと聞えければ。又賴信が云はく。盗人は既に射落してけり。速に末に走らせ會ひて馬を取りて來よとばかり云ひ懸けて。取りて來らむをも待たず其より返りければ。賴義は末に走らせ會ひて馬を取りて返りけるに。郎等共は此の事を聞きつけて。一二人づゝぞ道に來り會ひにける。京の家に返り著きて。此やありつる彼こそあれと云ふ事も更に知らずして。未だ明けぬ程なれば。本のやうに亦這入りて寢にけり。賴義も取返したる馬をば郎等にうち預けて寢にけり。其の後夜明けて賴信出でゝ賴義を呼んで。希有に馬を取られざる。吉く射たりつるものかなと云ふ。事かけても云ひ出でずして。其の馬引き出でよと云ひければ引出したり。賴義見るに實に吉き馬にてありければ。さらば給はりなむとて取りてけり。但宵にはさも云はざりけるに。吉き鞍置きてぞ取らせたりける。夜盗人を射たりける祿と思ひけるにや怪しき者どもの心ばへなりかし。兵の心ばへは此くありけるとなむ語り傳へたるとや。

（今昔物語）

賴豪阿闍梨

延暦寺の僧。藤原有家の子。實相坊といふ。白河帝の爲に子を祈りて驗あり。約に從つて戒壇を寺内に築かんと請ふ。帝允さず。應德元年賴豪怒りて食を斷つて死す。皇子も亦尋いて死す。

戒壇建立……葉室時長（俗傳）

白河院御位の時。后腹（キサキハラ）の皇子渡らせ給はざりければ。主上御心元なく思し召し。尊き僧と聞し召しければ。三井寺の實相房の賴豪阿闍梨を召されて。汝皇子祈り出してんや。效驗あらば勸賞は乞ふによるべしと仰せ含めらる。賴豪畏つて申す。年來深き

望侍り。勅定相違なくば皇子の御誕生勿論の御事なりと奏す。主上大に悅び思し召して。勸賞乞ふに依るべしと重ねて勅約あり。賴豪悅んで本寺に歸り。年來所持の本尊の御前にして。肝膽を碎きて祈り申しける程に。中宮たゞならぬ御事と承りて。彌皇子御誕生と黑煙を立てゝ祈り申す。月滿ち御座して承保元年十二月十六日。最安らかに皇子御誕生あり。主上斜ならず御感有りて。賴豪を召して。效驗神妙々々。何事をか申し請くべき。と御氣色あり。賴豪は園城寺に戒壇を立て。寺門年來の本意を遂げんとぞ奏しける。其の時主上。こは思し召しよらぬ御事なり。只一度に僧都僧正にも成り。寺領坊領をも申さんずるにやとこそ思し召されつれ。戒壇の事は努々御存知なかりきと勅定有りければ。賴豪重ねて。凡卑の愚僧。名聞の高位も所望なく。この事を申し受けん爲に微力を勵まし。肝膽を碎きて祈り出し進らせたり。綸言をば汗に喩へ。出でて再び還る事なし。勸賞は乞ふに依るべきよし。勅約今更改むべからず候ふなり。寺門の宿訴と云ひ賴豪が本意といひ。所望たゞこの事に在り。と奏し申す。主上の仰せには。凡そ皇子誕生有りて祚を繼がしめん事も。海內無異の御志なり。今汝が所望を達せば。山門慣をなして世上靜ならじ。兩門の合戰出來せば。天臺の佛法忽ちに亡びぬべし。何ぞ戒壇の一事を以て。三院の牢籠を顧みざらん。其の上三井の戒壇に於ては。上代既に達せず。後代爭でか成ぜん。と仰せ下されければ。賴豪は百千萬劫の古より。欣求淨土の望みを達せずとて。二千餘年の今。厭離穢土の思ひを斷つべきや。爭でか前佛の敎化に預からざるに依りて卽ち漏るべくば。後佛の引導に現在未來の一切衆生出離生死の期を失ふべし。この條專ら聖敎に背けり。其の理豈佛意に叶はんや。就中我が門徒の爲體。能化の戒光を胸中に耀かしながら。所依の戒壇を硯下に許されず。悲しき哉登壇受戒の期を迎ふる每に。必ず異門他宗の境に臨む。恨めしき哉大乘圓頓の器たりながら。小乘偏漸の戒を受く。愁吟の至切なる。門人にして誰か傷嗟せざらん。悠々たる長夜に戒光を挑げて闇冥を照し。茫々たる苦海の嶮浪に木叉に乘じて彼岸に到る。只三界苦域濁穢の所在を遁れ。九品淨土常樂の安養に生れんと欲するが爲なり。この條若し矯餝を存せば。吾が國は神國なり。神明神道宜しく非を糺すべし。吾が法は佛法なり。佛界佛陀須らく罰を與ふべし。現世には卽ち三七日を過ぎずして。速に災難災殃を招ぎ。當來には必ず萬劫千劫を限り。永く八寒八熱に沈むべし。是佛法興隆の爲なり。是衆生利益の故なりなど種々に申し上げけれ共。

遂に御許なかりければ。賴豪大惡心を起し。眼の色替り。今は思ひ死なんとて雙眼より涙をはら〳〵とこぼし。御前を立ち樣に。賴豪思ひ死に死に失せなば。皇子は我が進らせたる物なれば。卽ち取り返し奉るべしとて。三井寺に罷り歸り。卽ち飲食を止めて道場に入り。行ひ死に死して皇子を取り殺し奉らんとぞ聞えける。此の事主上聞し召して。宸襟安からず。朝政も御懶きまでの御歎なりければ。江中納言匡房卿の。其の時は美作守にて御座しけるを召して。皇子誕生の勸賞。賴豪三井寺に戒壇建立の所望有りつるを御免無しとて。惡心を起し。我が身干死して。皇子をも取り返し奉るべき由聞し召す。汝は師檀の契深し。罷り向つて誘ひ宥めよと仰せければ。匡房卿御裝束を改めず。束帶を正うして。內裏より頓て三井寺へ馳せ行きて。彼の坊に罷り向つて見れば。蔀遣戸も立て下し。纔に持佛堂許りに人ありがほなり。明障子も護摩の煙に薰つて。何となく貴く。身の毛竪つてぞ覺えける。美作守持佛堂の大床に佇みて。匡房參りける由申しけれ共。暫しは音もせず。賴豪良久しく有つて荒らかに障子をあけて出で給へり。目はくぼ〳〵と落ち入り。白髮は永々と生ひ延びて。銀の針を琢き立てたる如し。手足の爪も切らず。身の垢も積りて顏の正體もなし。天狗とかやもかくやと覺えて物恐ろし。賴豪申しけるは。やゝ。御邊は宣旨の御使にこれへは入り給へるな。出合ひ奉る事は思ひ寄らず存じつれ共。年來師檀の契淺からず。最後の見參と存じて只今見え奉るなり。有り難き志と思ひ給ふべし。扨天子は虛言せず。綸言汗の如し。出でゝ再び反らずとこそ承れ。皇子祈り出して進らせよ。勸賞は乞ふに依るべしと度々勅定を蒙りし間。過去今生の所修の功德を廻向して。肝膽を碎きて精誠を盡し祈り生じ進らせぬ。其れに戒壇建立を免されざる條。生々世々の遺憾。偏に此の事にあり。所詮皇子に於ては取り返し奉り侍るべし。今生の見參これ最後なりとて。持佛堂に歸り入りて障子を丁と立て。其の後は音もせず。匡房卿力及ばず。歸參してしか〳〵と奏聞す。主上ゆゝしく歎き思し召されければ。當時の關白太政大臣師實卿。御痛はしく思ひ進らせて。暫く賴豪が怨を宥められん程。戒壇を許さるべきか。と申されければ。叡慮も思し召し煩はせ給ひけるに。御夢想あり。賢聖の障子のあなたに赤衣の裝束したる老翁あり。左の脇に弓を挾み。大なる鏑矢をさらり〳〵と爪よると聞し召しければ。驚き思し召して誰人ぞと御尋ねありけるに。我はこれ比叡山の西の麓に侍る老翁なり。世には赤山とぞ申しける。三井寺に戒壇を立つべき由執奏の臣あ

り。御免を蒙りて年來持てる鏑矢を放たんと存じて矢を爪よるなりと答ふ。と思し召して御夢覺めさせ給ひけれ共。猶爪よる聲は聞えさせ給ひければ。御免なかりけり。

（源平盛衰記）

源義家

頼義の子。八幡太郎と稱す。永承中父に從つて安部貞任を伐ち。遂に之を誅す。功を以て從五位下出羽守となる。永保三年陸奥守兼鎮守府將軍となり。清原武衡等の亂を平ぐ。天仁元年卒す。年六十八。

八幡太郎……作者未詳

同じき年（天喜五）十一月。將軍（頼義）兵千八百餘人を率ゐて貞任を討たむと欲す。貞任等精兵四千餘人を率ゐ。金爲行の河崎柵を以て營とし。黄海に拒ぎ戰ふ。時に風雪甚だ勵し。道路艱難にして。官軍食なく。人馬共に疲る。賊類新羈の馬を馳せて疲足の軍を敵とす。唯客主の勢異なるのみに非ず。亦寡衆の力別なるあり。官軍大に敗れ死する者數百人。將軍の長男義家は。驍勇絶倫にして騎射神の如し。白刃を冒し。重圍を突き。賊の左右に出で。大鏃の箭を以て頻に賊師を射るに。矢空しく發たず。中る所必ず斃る。雷奔風飛。神武命世。夷人靡走し。敢て當る者なし。夷人號を立て丶八幡太郎と曰ふ。漢の飛將軍の號と年を同じうして語るべからず。將軍の從兵或は以て散走し。或は以て死傷す。殘る所纔に六騎あり。長男義家。修理少進藤原景通。大宅光任。清原貞廣。藤原範季。同じく則明等なり。賊衆二百餘騎。左右の翼を張りて圍み攻む。飛矢雨の如し。將軍の馬流矢に中りて斃る。景通馬を得て之を援く。義家の馬も亦矢に中つて死す。則明賊の馬を奪ひて之を援く。此の如きの間殆ど脱するを得ず。而して義家頻に射て魁帥を殺す。亦光任等の數騎も殊死して戰ふ。賊類爲行漸く引き退く。

（陸奥話記）

神明の變化……同

合戰の間。義家射る毎に甲士皆絃に應じて死す。後日武則（清原）義家に語つて曰はく。僕君の弓勢を試みむと欲す。如何。義家曰はく。善し。是に於て武則堅門三領を

重ねて之を樹枝に懸け。義家をして射しむ。一發に甲三領を貫く。武則大に驚きて云はく。是神明の變化なり。豈凡人の堪ふる所ならむや。宜なり武士の歸伏する所となる此の如きやと。

（陸奥話記）

小忍大成……玄慧法師

將軍（義家）の軍既に金澤の柵に到り著きぬ。雲霞の如くして野山を隱せり。一行の斜雁雲上を渡るあり。雁陣忽にやぶれて四方に散りて飛ぶ。將軍遙に之を見て怪み驚きて。兵をして野邊を蹈ましむ。案の如く草叢の中より三十餘騎の兵を尋ね得たり。是匿し置けるなり。將軍の兵是を射るに。數を盡して得られぬ。義家の朝臣。先年宇治殿（頼通）へ參じて貞任を攻めし事など申しけるを。江帥匡房卿立ち聞きて。器量はよき武士の。合戰の道を知らぬよと獨言ち給ひけるを、義家の郎等聞きて。我が主程の兵を。けやけき事云ふ翁かなと思ひつゝ。義家に此の由を語る。義家之を聞きて。さる事もあるらむとて。江帥の出られける所に寄りて殊更會釋しつゝ。其の後彼の卿に會ひて文を讀みけり。義家。我文の道を伺はずば。武衡が爲に破られなましとぞ云ひける。兵野に伏す時は雁列を破ると云ふ事侍るとかや。柵を攻むること數日に及ぶと云へども未だ陷し得ず。將軍兵どもの心を勵まさむとて。日毎に剛臆の座をなむ定めける。日にとりて剛に見ゆる者どもを一座に居る。臆病に見ゆる者を一座に居るけり。各臆病の座に著かじと勵み戰ふと雖も。日毎に剛の座に著くは難かりけり。

（奥州後三年記）

鎌倉權五郎景正

源義家の臣。寛治五年義家に從つて清原武衡を征す。驍勇を以て名あり。
歿年不詳。

死を欲するも蹈まるゝを欲せず……同

相模の國の住人鎌倉の權五郎景正と云ふ者あり。先祖より聞高（キコエ）きつはものなり。年纔に十六歳にして大軍の前にありて命を捨てゝ戰ふ間に。征矢にて右の目を射させつ。首を射貫きて兜の鉢付の板に射付けられぬ。矢を折りかけて當の矢を射て敵を射取り

つ。さて後退き歸りて兜を脱ぎて。景正手負ひたりとて仰(ノケ)ざまに伏しぬ。同國の武士(フシモノ)三浦の平太郎爲次と云ふ者あり。是も聞高き者なり。鞦(ツラヌキ)を穿きながら景正が顏を蹈まへて矢を拔がむとす。景正伏しながら刀を拔きて。爲次が草摺を捉へてあげさま突かむとす。爲次驚いて。此は如何に。など斯くはするぞと云ふ。景正が言ふやう。弓箭に中りて死するは武士(フシモノ)の望む所なり。いかでか生きながら足にて面(ツラ)を蹈まるゝ事あらむ。如かじ汝を敵として我爰にて死なむと言ふ。爲次舌を卷きて言ふことなし。膝を屈め顏を抑へて矢を拔きつ。多くの人是を見聞き。景正が功名彌雙なし。

（奥州後三年記）

大江匡房

信濃權守成衡の子。天永二年大藏卿を兼ね。幾許ならずして薨ず。年七十一。時人博治を以て。長房伊房と併稱して三房といへり。

北向の大門……一條兼良

宇治殿(賴通)平等院を建立し給ふ時。地形の事など示し合せられむ爲に土御門の右府(源師房)を相伴はせ給ふ。宇治殿仰せられて云はく、大門の便宜北向にあらずんば便なかるべし。北向に大門ある寺侍りや。右府申されて云はく。覺悟せしめず。時に匡房卿未無官にて江冠者とてありけるを後車にのせて具せられたるを召し出されて。彼こそ斯やうの事うるせく覺えて候へとて問はるゝ所に。匡房申して云はく。北向に大門ある寺は天竺には那蘭陀寺。唐土には西明寺。本朝には六波羅密寺なりと申す。宇治殿大に感ぜしめ給ふ。

（東齋隨筆）

暮年記……大江匡房

予四歳始めて書を讀み。八歳史漢に通ず。十一にして詩を賦す。世之を神童と謂ふ。源大相國は風月の主。社稷の臣也。試に雪裏松貞を看るの題を賜ふ。此日時棟朝臣座に在り。筆停滯せず。文點を加へず。相府深く之を賞歎し。幸に汲引の恩を賜ふ。宇治前大相國。又爲に詩を賦さる。忝く徵辟有り豫參すと雖も之を賦せず。相府の忌月に當るに依て也。十二月此日予を相して曰く。地を履み人を踰ゆ。必らず大位に至ら

んと。故肥前守長國朝臣は。予の先祖李部大卿の門人なり。文草に長ず。時に任國に在り。予の詩草を見。書を送つて之を賀す。十六にして秋日閑居賦を作る。故大學頭明衡朝臣深く以て許す、帝曰く。其鋒森然。定めて敵者少からん。後に落葉泉石を埋むるの詩を作る。感じて曰く。已に佳境に到ると。予後日之を見るに。未だ其美を盡さず。然り而して先達名儒の此の如くなるを感ず。故文章博士定義朝臣。予が師右大辨定親朝臣に謂つて曰く。定義始め江茂才の文を許さゞりしが。近日の製作日に新なりと謂ふ可しと。故都督源西相(經信)久好鑽仰し。兼て文章を知る。予の文章を見れば。必らず褒美を加ふ。馬は吳坂の風に嘶へ。龜は盧江の浪に拝ぐ。予が昇進の間。吹噓の力を加へらる。前肥前守時綱朝臣。深く詩心を得たり。予が前大相國表。竝に源右相(顯房)府室家源二位願文を見て曰く。殆ど江吏部の文章に近しと。故伊賀守孝朝臣。掃部頭佐國。文に提携し道に浮沈す。蓋し後進の領袖なり。予が圓德院願文。竝に前大相國關白第三表を見て。深く感歎す。故式部大輔實綱朝臣。文章に深からずと雖も。猶感激無きにあらず。予が高麗返條を見て心伏す。右中辨有信朝臣頗る詩心を得たり。予の文章を見。泣て之を感ず。爰に頃年以來。此等人皆物故し。之を識るの人。一も存する無し焉。司馬遷謂へる有り。曰く。誰が爲に之を爲り。誰をして之を聞かしめんと。蓋し聞く。匠石は斧を郢に輟め。伯牙は絃を鍾子に絶つと。何ぞ況んや風騷の道をや。識者鮮し焉。巧心拙目。古の人の傷む所たり。寛治以後。文章敢て深思せず。唯翰墨の責を避くるのみ。若し夫れ心内に動けば。言外に形はる。獨吟偶詠。聊か卷軸を成す。仍つて由緒を記し。來者に貽る。

(暮年詩記)

永觀律師

文學博士源國經の子。禪林寺の深觀僧都に從つて受業し華嚴法相を聽き。承應三年東大寺に原す。天承二年寂す。年八十。

悲田梅……鴨長明

永觀律師といふ人ありけり。年頃念佛の志深く。名利を思はず。世を捨てたるが如くなりけれど。さすがに哀れにもつかまつり知れる人を忘れざりければ。殊更深き山をもとむる事もなかりけり。東山禪林寺といふ處に籠居しつゝ。人にものをかしてな

ん日を送るはかりごとにしける。借る時も。返す時も。たゞ來る人の心にまかせて沙汰しければ、中々佛の物をとて。いさゝかも不法の事はせざりけり。いたく貧しきものゝ返さぬをば。前によびよせて。物の程に從ひて。念佛を申させてぞあがなはせける。東大寺別當の空きたりけるに。白河院此の人をなし給ふ。聞く人耳を驚かして。よも受けとられじといふ程に。思はずにいなび申す事なかりけり。その時年頃の弟子つかはれし人など。我も〳〵と爭ひて。東大寺の庄園を望みにけれども。一所も人のかへりみにもせずして。みな寺の修理の用途に寄せられたりけり。自ら本寺に行き向ふ時には。ことやうなる馬に乘りて。かしこにゐるべき程の時料。小法師にもたせてぞ入りける。かくしつゝ三年の内に修理事終りて。すなはち辭し申す。君又兎角の仰せもなくて。こと人をなされにけり。よく〳〵人の心を合せたる仕業のやうなりければ。時の人は寺の破れたる事を。此の人ならでは心やすく沙汰すべき人もなしと。思し召して仰せつけゝるを。律師も心得給ひたりけるなんめりとぞいひける。深く罪を恐れける故に。年頃の事行ひけれど。寺物を露ばかりも自用の事無くて止みにけり。此の禪林寺に梅の木あり。實なる頃になりぬれば。之をあだに散らさず。年毎にとりて。藥王寺といふところに多かる病人に。日々といふばかりに施させられければ。あたりの人。此の木を悲田梅とぞ名けたりける。今も事のほかに古木になりて。花も僅に咲き。木立もかじけつゝ昔のかたみに殘りて侍るとぞ。ある時かの堂に客人の詣で來りけるに。算をいくらともなくおきひろげて。人には目も得掛けざりければ。客人の思ふやう。律師は出擧をして。命つぐばかりを事にし給へりと聞くに合せて。その利の程數へ給ふにこそと。見居たる程に。置きはてゝ取り收めて對面せらる。その時算おき給ひつるは。何の御ようぞと問ひければ。年頃申しあつめたる念佛の數の。覺束なくてとぞ答へられける。さまで驚くべき事ならねど。ぬしがらに尊とく覺えしと。後に人の語りけるなり。

（發心集）

源俊頼

大納言經信の子。堀河鳥羽崇德三朝に仕へ。左近衞少將兼木工權頭左京權太夫に歷任し從四位下となる。和歌に堪能なり。著はすところ散木奔歌集等あり。

源俊頼

連歌……作者不詳

又時(堀川朝)の歌よみ十四人に、百首歌各に奉らせ給ひけり。男女僧など。歌人皆名顯はれたる人々なり。題は匡房の中納言ぞ奉りける。此の世の人。歌よむ媒には其なむせらるなる。尊勝寺作られ侍りける頃。殿上人に華鬘あてられ侍りけるに。俊頼歌人にておはしけるに。百首歌案ぜむとすれば。五文字には華鬘とのみおかるゝと聞かせ給ひて。ふびんの事かなとて。除かせ給ひけるとぞ聞え侍りし。何れの頃にかありけむ。南殿か仁壽殿かにて。御覽じつかはしけるに誰にかありけむ。上殿人の參りて殿上に昇り居たりければ。

雲の上に雲の上人のぼりゐぬ

と仰せられけるに。俊頼の君。

しもさぶらひに侍らひもせで

と付けられたりけるを。詞滯りたりと聞ゆれど。心ばせもある事と聞ゆめり。歌の風情徒に亡する事なりとて。連歌をば大方せられざりけりと聞え侍りしに。金葉集にぞいとしもなき多く集められたる。(中略)木工の頭俊頼も。高陽殿の大殿の姫君と聞え給ひし時。作りて奉り給へりとか聞ゆる和歌の詠むべきやうなど侍る書には。道信の中將の連歌。伊勢大輔が。こはえも云はぬ花の色かなと付けたる事など。最優なることにこそ侍るなれば。連歌をもっけぬ事に偏にし給ふとも聞えず。大方は見る事聞く事につけて。兼てぞ詠み設けられける。當座によむことは少なく。擬作と書きてぞ侍りつる。さて侍りけるにや。家集に。聞きと聞き給へりけると覺ゆることを詠み集められ侍るめり。

(續世繼物語)

貫之躬恒勝劣の判……鴨長明

三條の大相國(實行)非違の別當と聞えける時。二條の帥(長實)と二人の人。躬恒貫之がおとりまさりを論ぜられけり。互(カタミ)にさまざま詞を盡して爭はれけれど。更に事きるべくもあらざりければ。帥訝かしく思ひて。御氣色をとりて勝負きらむとて。白河の院に御氣色給はる。仰に云はく。我はいかでか定めむ。俊頼などに問へかしと仰せ事ありければ。共に其の便を待たれける程に。二三日ありて俊頼參りたりけり。帥此

の事語り出でゝ。初爭ひ始めたるより院の仰の趣まで語られければ。俊頼聞きて。度々うち首肯きて。躬恒をばな侮らせ給ひぞと云ふ。帥思の外に覺えて。されば貫之が劣り侍るか。事を斷り給ふべきなりと責められけれど。尚唯同じやうに。躬恒をば侮らせ給ふまじきぞと云はれければ。大やう事がら聞え侍りにたり。（無名抄）

基俊妄批……同

或人云はく。基俊は俊頼をば蚊虻の人とて。さはいへども。駒の道行くにてこそあらめと云はれければ。俊頼はかへり聞きて。文時朝綱詠みたる秀歌なし。躬恒貫之作りたる秀句なしとぞ宣ひける。

又云はく。雲居寺の聖の許にて。秋の暮の心を俊頼朝臣

明けぬともなほ秋風の音づれて野べの氣色よ面がはりすな

名を匿したりけれども。是をさよと心得て。基俊挑む人にて難じて云はく。如何にも歌は腰の句の末にて。文字居ゑつるは捗々しき事なし。支へていみじく聞き惡きものなりと。口あかすべくもなく難ぜられければ。俊頼はとも斯くも云はれざりけり。其の座に伊勢の君琳賢が居たりけるなむ。異樣なる證歌こそ一つ覺え侍れと云ひ出でたりければ。いで承らむ。よも事よろしき歌にはあらじと云ふに

さくら散る木の下風は寒からで

と。終のて文字を長々と詠めたるに。色眞蒼になりて。物も言はず俯きたりける時に。俊頼忍びに笑はれける。（無名抄）

源義光

頼義の子。新羅三郎と稱す。兄義家の武衡等を伐つ。義光從はんと請ふ。許されず遂に官を辭して赴く。還りて從五位上刑部少輔に至り。大治二年卒す。

足柄山……作者不詳

甲斐守義光左兵衛尉に侍りし時。兄陸奥守義家朝臣武衡家衡等を攻めけるを京に候ひて傳へ聞きけり。御暇を申して下らむとしけるを御許なければ。兵衛尉を辭し申し

て。陣に弦袋をかけて馳り下りける。近江の國鏡の驛の此方にて。縹の一重狩衣。青色の袴著て。引入烏帽子したる男。後れじと駒に鞭うて來るあり。奇しう思ひて見れば豐原時秋なり。彼は如何に。何しに來りたるぞと問ひければ。とかくの事は云はで。唯供仕うまつるべしとばかりぞ言ひける。此の度の下向物騒がしき事侍りてなれば。伴ひ給はむ事尤本意なれども益なしと頻に留むるを聞かず。強ひて慕ひ來にけり。力及ばで諸共に行く行く相模の國足柄山に來にけり。玆にて義光馬を控へて曰はく。止め申せども用ゐ給はで是まで伴ひ給へる事。其の志深し。さりながら此の山の關。容易く通すこともあらじ。義光は所職を三拜申して都を出でしより。命を無きものにして罷り向へば。如何なる關にても憚るまじ。懸け破りて通るべし。其許には其の要なし。是より歸り給へと云ふを。時秋尙承引かず。又言ふ事もなし。其の時義光時秋が思ふ所を酌んで。道より少し入り　木蔭にうち寄り。芝切り拂はせ馬より下り。楯二枚を敷きて一枚には我が身座し。一枚には時秋を居ゑけり。人を遠く退けて。空穗より文書を取り出でゝ時秋に見せけり。爰時元自ら書きたる大食調入調の曲譜なり。義光は時元が弟子にて管絃の奥義を極めたる者なり。時秋未十歳にも足らぬ程に時元は失せにければ。時秋には授けざりけり。さて笙はありやと問ひければ。候ふとて懐より取り出したりける。用意のほど先いみじうぞ侍りける。斯く慕ひ來給ふは定めて此の料にてもや侍らむとて。二つの曲を授く。義光は斯る大事によりて罷れば身の安否知り難し。百に一つも安穩ならば都の見參を期すべし。其許には豐原數代の樂工。朝家要須の仁なり。我が眞志あらば速に歸洛して道を全うせらるべしと言ひければ。理に負けて上りにけり。

（時秋物語）

日課念佛一萬遍……三善爲康

入道前刑部丞源義光は。前伊豫守頼義朝臣の第三息なり。武藝不覊の家に生るゝと雖も。常に放逸無愧の業を懺し。弱冠の時より法華經を談誦し。毎日念佛一萬遍を唱ふ。既に法華二千部を誦し。過去の二親に資し奉る。其の餘法界衆生に廻向すること卷數を限らず。又遂日必ず往生要集を見て。時に隨ひ枚數を定めず。然る間。園城寺の裏に道場を建立し。丈六の阿彌陀佛の豫を造顯して。卽ち逆修善根を營む。其の後大治二年十月一日より病氣ありと雖も。念佛を怠らず。同じき十九日に至り。嫡子阿闍梨

覺義。竝に二男進士廷尉義業に相對ひ。謂つて曰はく。吾明日を過ぐべからず、故に資財を處分し。兼ねて臨終の行儀を告ぐるなりと。既に二十日に至りて病惱平復す。俄に以て沐浴し。新衣を著して淨席に居る。漸く未の刻に及び。本尊に對ひ。手に定印を結び。口に念佛を唱へ。五色の絲を引きて。奄然として每絕ゆ。

（後拾遺往生傳）

良忍上人

融通念佛宗の開祖。尾張の人。藤原道武の子。良雅大僧都の弟子となり。聲明の中興と稱せらる。長承元年寂す。年六十一。

融通念佛……橋成季

大原良忍上人。生年二十三より偏に世間の名利を捨てゝ。深く極樂を願ふ人なり。日夜不斷に稱念して。未だ睡眠せず。生年四十六。首尾二十四年にいたりて。夏月日中に。たゞ佛力によりて。自心にまかせずまどろみたる夢に。阿彌陀佛示現して云はく。汝が行不可思議なり。閻浮提の內。三千界の間。是一有りとなす。雙無かるべし。然りと雖も汝順次の往生。誠に以てこれ有り難き事なり。所以は何んとなれば。我が土は一向淸淨の界。大乘善根の國なり。少緣の人生じ難きを以て。汝が如き行業。多生を經と雖も。未だ往生の業因たるに足らざるなり。蓋し速疾往生の法を敎ふべし。所謂圓融の念佛是れなり。一人の行を以て衆人の爲にす。故に功德廣大にして。順次往生す。既に以て果を易へて因を修し。已に以て融通して果を感ず。蓋ぞ一人を融通して。衆人を往生せしめざる。阿彌陀如來の示現したまふ粗此の如し。委細は毛擧するに遑あらず。天治元年甲辰六月九日。一乘佛子良忍。かくしるし置かれたり。此の後普く勸進の間。本帳に入る所の人三千二百八十二人なり。早旦に壯年の僧の。青衣きたる出で來りて。念佛帳に入るべきよしを自稱して。名帳を見て忽ちに隱れぬ。これ夢にもあらず現にもあらず。上人あやしみて則ち名帳を見るに。正しく其の筆跡あり。その字に曰はく。奉請念佛百反。我是佛法擁護者。鞍馬寺毘沙門天王なり。念佛結緣の衆を守護せんがために來入する所なり。又上人天承二年正月四日。鞍馬寺に通夜して念佛の間。寅の終りばかりに。夢に天に幻化の如くにして。自身と驚覺しての

たまはく。汝我が身の如く。又梵天王等正法を護り。念佛帳中に加へ奉るべし。我又汝を護ること影の形に隨ふが如し。惣して冥衆結衆に入り。諸神又滿ず云々。目さめて見れば眼前に其の文あり。梵天王部類諸天以下。一切諸王諸天。九曜二十八宿。惣三千大千世界。乃至微塵數。有らゆる一切の諸天神祇冥道。一つももれず。各百反入り給へり。不思議未曾有のことなり。凡そ勸進帳に入る所の人。三千二百八十二人の内。日時を注して往生を遂げたるもの六十八人なり。玆に上人。同月春秋六十一にて。七日先ちて死期を知りて。遂に往生の素懐を遂げられにけり。入棺の時。其の身輕きこと鵝毛の如しと云々。大原覺巖律師夢に。上人告げて曰はく。我本意を遂げて上品上生にあり。偏に融通念佛の力なりと云々。

（古今著聞集）

袈裟

渡邊渡の妻。遠藏武者盛遠見て之を悅び。其の母に逼りて之を得んと欲す。袈裟盛遠を欺き。自ら死して夫の厄を解く。事編中に詳なり。

三の不祥……葉室時長（俗傳）

文覺道心の起源を尋ぬれば女故なりけり。文覺が爲に内戚の姨母一人あり。其の昔事の縁につけて奥州衣川にありけるが歸り上りて故郷に住む。一家の者共衣川殿と云ふ。若く盛なりし時は眉目容貌人に勝れ。心ばへなども優にやさしかりけるが。今は盛過ぎて世の中も衰へ。寡（ヤモメ）にて物寂しき住まひなり。娘一人あり名をばあとまとぞ云ひける。されども衣川の子なればとて異名には袈裟と呼ぶ。親に似たる子とて。青黛の眉の邊。丹花の口付。愛々しく。桃李の粧。芙蓉の眸。最氣高くして。綠の簪雪の膚。楊貴妃李夫人は見ねば知らず。愛嬌百の媚一つも闕けず。さしも慈（イウク）しき女房の心さへ情深うして。物を憐み咎を恐るゝ事斜ならず。毛嬙西施が再誕か。觀音勢至の垂跡か。深窗の裡に扶けられて。既に人と成るなり。軒端の梅の匂最芳しく。庭上の花實（マコト）に濃やかにして。十四の春を迎へたり。榮花名聞人々。我も我もと心を通はす。其の中に竝の里に源左衞門尉渡とて。一門なりけるが。内外につけて申しければ。恥かしからぬ事なりとて之を遣す。互の心淺からずして早三年になりぬ。女今年は十六なり。盛遠（文覺）は十七になりけるが。其の歳の三月中旬に渡邊の橋供養あり。盛遠紺村濃の直垂に。黑絲縅の腹卷に袖つけて。折烏帽子係（カケ）にかけ。銀（シロガネ）の蛭卷。二筋通し

て巻きたる長刀左の脇に挾み。其の日の奉行しければ。辻々固めたる兵士共下知し。廻して橋の上に立ち渡り。ゆゝしくぞありける。供養既に終つて方方へ下向しける中に。此の橋詰より東へ三間隔てゝありける棧敷の内より。女房達數多出でゝ。下向しける中に。十六七にもやあらむと。見ゆる女房輿に乘らむとて。簾を打ち揚げたるを見れば。世に有り難き女なり。盛遠目昏れ心消して何處の者やらむ。如何なる人の妻子なるらむと。行末見たく思ひければ。輿に隨きて行く程に。竝の里に渡と云ふ者が家に見入れたり。是は聞えし衣川の女房の女や。過失なき美人なりけり。如何すべきと春の末より。秋の半まで臥しぬ。起きぬぞ案じける。思ひ澄して九月十三日のまだ朝。母の衣川が許に伺ひ行き。即ち刀を拔き。是非なく母が立頸を取つて。腹に刀を指し當てて害せむとす。女うつゝ心なし。能々見れば甥の遠藤武者盛遠也。女泣々申けるは。抑和殿は我には甥。我は和殿に姨母。此中には殊なる怨無し。就中御邊母死して後は孤なれば。孫子と思ふ樣に最惜み奉る。父とも母とも憑給ふべし。何人か如何と讒言したれば。かく憂き振舞をばし玉ふぞ。身に誤ありとも覺えず。暫く命を助けて怨の通を宣へ。晴らし申さんと手を摺りて泣く。盛遠は慈悲無く。目を大に見はりて。伯母也とても。我を殺さんとし給ふ敵なれば。遁すまじ。渡邊黨の習として。一目なれども敵を目に懸けて置かず。すは〳〵只今指殺さんとて。首に刀をひや〳〵と差當たり。姨母は肝魂も無し。戰く〳〵誰人の申ぞ。我寡にして夫無し。和殿に於て意趣無し。思寄らぬ事をも宣ふ物哉。是は如何なる事ぞやと申。盛遠は人の申すに非ず。袈裟御前を女房にせむと內々申し侍りしを聞き給はず。渡が許へ遣したれば。此の三箇年人知れず戀に迷ひて。身は蟬の脫殼の如くになりぬ。命は草葉の露のやうに消えなむとす。戀には人の死なぬものかは。是こそ姨母の甥を殺し給ふなれ。生きて物を思ふも苦しければ。敵と一所に死なむと思ふなりと云ふ。衣川はせめての命の惜しさに申しけるは。旁申しし中に斯とは聞きかども。さまでの事とも思はず。身貧なれば何方とも思ひ分かざりしを。渡奪ふが如くして取りしかば力なし。か程に思ひ給はゞ易き事なり。刀を納めよ。今宵呼びて見せむと云ふ。盛遠は等閑に口を堅めて。は惡しかりなむと思ひて。虛言せし渡が方へ返忠せじなど。能く能く堅めて刀を差し今夕參らむとて歸りにけり。衣川は涙を流し。如何はせむとぞ悲みける。此の盛遠が有樣云ふ事を聞かずは。一定事に逢ひぬべし。扨又呼びて逢はせなば。渡が怨如何は

せむとぞ思ひけるが。案じ廻らして娘の許へ文を遣る。此の程風の心地候ふ。うち臥すまでの事はなければ。披露までは事々しく候ふ。忍びておはしませ。申し合すべき事侍り。寡なる身にははかなき事のみ侍り。返す返す忍びて唯一人おはしませと書きたり。娘消息を取り上げ見て。心細き御文の態かな。とて胸うち騷ぎ。女の童一人具して。假初に出る樣にて母の許に來れり。母熟々と娘の顏を見て。はらはらと泣きて。良久しくありて手箱より。小刀を取り出して言ひけるは。之を以て我を殺し給へとて與へければ。娘大に騷ぎて。是は何事にか。御物狂はしくなり給へるか。とて顏うち赤めて居たり。母が云はく。今朝盛遠が來て。樣々振舞ひつる事共。有の儘に云ひ續けて。此の事如何にも如何にも。盛遠が思の晴れざらむには。我終に安穩なるべしとも覺えず。さればとて渡が心を破らむとにも非ず。由なき和御前故に。武者の手に懸りて亡びむよりは。憂目を見ぬ前に。和御前我を殺し給へとて潸々と泣く。娘之を聞きて。樣なき事なり。心憂き事かなと斜ならず歎きけるが。熟々之を案じて。親の爲にはさらぬ孝養をもする習なり。御命に代り奉らむ。結の神も哀と思しめせとて。口には甲斐〳〵しく言ひけれども。渡が事を思ひ出でつゝ目には涙を溢しけり。日も既に暮れぬ。盛遠は獨笑して鬢を搔き。髭を撫で色めきて。早來つて女と共に臥し居たり。小夜も漸う更け行きて曉方になりければ。鷄既に啼き渡り女暇を乞ふ。盛遠申しけるは。會はずば逢はぬにてあるべし。弓矢取る身と生れて。飽かぬ女に暇を取らせて戀する習なし。會はで思ひし思は數ならず。如何なる目に合ふとも。暇奉らむとは申すまじ。今より後は長き契。是だにあらば何事かあるべきとて。太刀を拔いて傍に立てたり。嗚呼今は世の亂ぞ思ひ設けし事なれば。會ひぬる後は命比べ。和御前の爲には命も惜しからず。和御前の不祥盛遠が不祥渡が不祥。三の不祥が一度に來るべき宿執にてこそありつらめとて。總じて思ひ切りたる氣色なり。女やゝ案じて云ひけるは。暇を乞ひ奉るは。女の習。志の程を知らむとなり。斯申すも率爾心の中は末頼まれぬためしなれば。憚あれども何事も此の世の事に非ずと聞き侍れば。實も前生の契にこそ侍らめ。されば我が思ふ心を知らせ奉らむ。渡に相馴れて今年三年になり侍りけれども。折々につけて。心ならぬ事のみ侍れば。思はずに覺えて。何地へも走り失せなばやと思ふ事度々なり。されども。母の仰の背き難さに今迄候ふばかりなり。眞に淺からず。思しめす事ならば。唯思ひ切つて左衞門尉を殺し給へ。互に心安からむ。

されば謀を構へむと言ふ。盛遠悦ぶ色限なし。謀は如何にと問へば。女が云はく。我家に歸つて左衞門尉が髪を洗はせ。酒に醉はせて。内に入れ高殿に伏せたらむに。濡れたる髪を搜つて殺し給へと云ふ。盛遠悦びて夜討の支度しけり。女暇を得て家に歸り酒を設けて渡を請ごて申しけるは。母の勞とて忍びて呼び給ひし程に。昨日罷りて侍りしに此の曉より快(ヨ)くならせ給ひぬ。悦び遊ばむとて。我が身も呑み夫をも強ひたりけり。元來思ふ中の酒盛なれば。左衞門尉前後不覺にぞ飲み醉ひたる。夫をば帳臺の奥に舁き臥せて。我が身は髪を濡し髻(タブサ)に取つて烏帽子を枕に置き。帳臺の端に臥して今や今やと待つ處に。盛遠夜半許に忍びやかに覗ひ寄り。濡れたる髪を探り合せて唯一刀に首を斬り。袖に裹みて家に歸り虚臥(ソラフシ)して思ひける。嗚呼終の禍事(コトユエ)由なく肝も潰さず。鎭めぬるこそ嬉しけれ。年來日來諸の神々廻り。行ひ祈る禱の效(カヒ)ありて本意を遂げぬる嬉しさよ。昔も今も神の御利生嚴重なり。春日八幡賀茂下上。松尾平野稲荷祇園に參りつゝ報賽(カヘリマウシ)せむとぞ悦びける。爰に郎等一人馳せ來りて申すやう。不思議の事こそ候へ。何者の所爲やらむ今夜渡左衞門殿の女房の御首を切り參らせて侍る程に。左衞門殿は口惜しき事なりとて門戸を閉ぢて。臥し沈み給へりと披露あり。弔には御渡り候まじきやらむと云ひければ。あな無慚や此の女房が夫の命に代りけるにこそと思ひて。首を取り出して見れば女房の首なり。一目見るより倒れ伏し。聲(コエ)も惜まず叫びけり。三年の戀も夢なれや。一夜の睦も何ならず。落つる涙に搔き昏れて身の置所もなかりけり。其の日も暮れぬ。盛遠起き居て熟々(ツクヅク)と諸法の無常を觀じけり。彼の女房消息細々と書きて。手箱に入れて形身に留む。是を披き見れば。さらぬだにも女は罪深しと承り侍るに。憂き身故に數多の人の失せぬべければ。我が身一を失ひ候ひぬ。獨殘り留りおはしまして歎き思しめさむ事こそ痛はしく侍れ。何事も然るべき事と申しながら。先立ち進らせぬる悲しさよ。相構へて後の世能く弔ひて給はらむ。佛になり侍りなば母御前をも渡をも必迎へ奉るべし。萬事細に申したく侍れども。落つる涙に水莖の跡見え分かずとて。

露深き淺茅が原に迷ふ身のいとゞ闇路に入るぞ悲しき

と母之を披見につけても。目も昏れ心も消えて。悶え焦れける有樣は。實に爲む方なくぞ見えける。

（源平盛衰記）